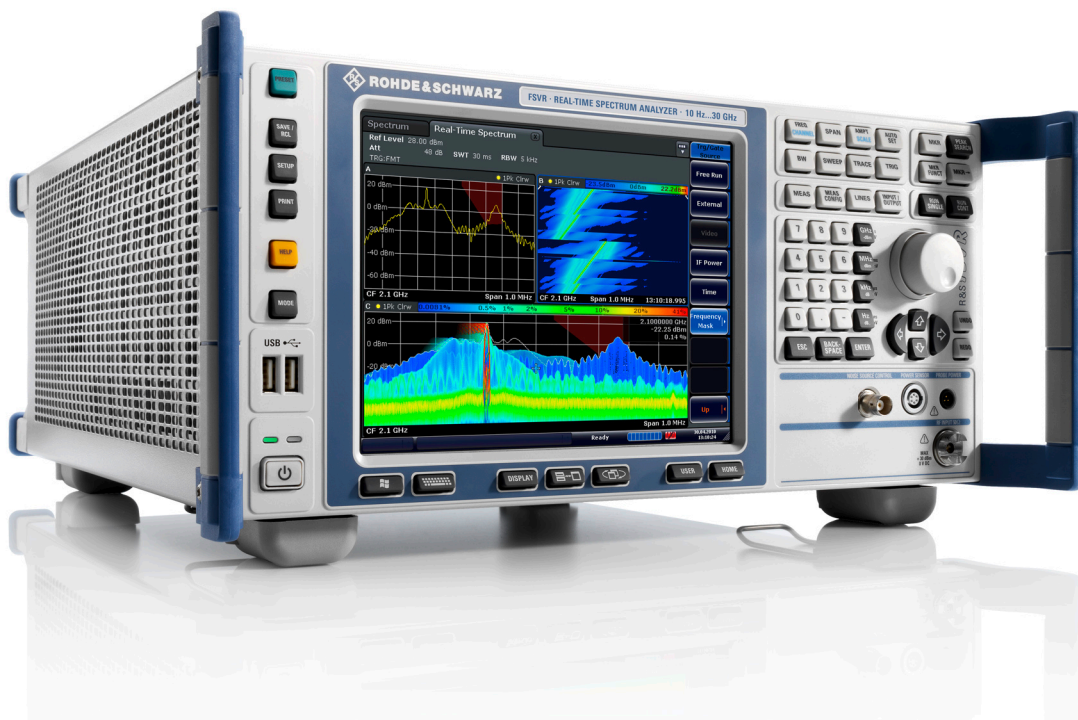


R&S®FSVR

リアルタイム・スペクトラム・アナライザ クイック・スタート・ガイド



1311.0670.18 — 03


ROHDE & SCHWARZ

電子計測器

クイック・スタート・ガイド

このマニュアルは、ファームウェア・バージョン 1.46 以上の下記のアナライザ・モデルに適用します。

- R&S®FSVR7 (1311.0006K7)
- R&S®FSVR13 (1311.0006K13)
- R&S®FSVR30 (1311.0006K30)

ローデ・シュワルツ製品のファームウェア開発には、さまざまなオープンソースソフトを使用しています。オープンソース開発者の方々ならびにコミュニティ参加者の方々に、心よりの感謝とお礼を申し上げます。詳細につきましては、同梱の CD-ROM に収録されている "Open Source Acknowledgement" をご参照ください。

© 2011 Rohde & Schwarz GmbH & Co. KG
Muehldorfstr. 15, 81671 Munich, Germany
Phone: +49 89 41 29 - 0
Fax: +49 89 41 29 12 164
E-mail: info@rohde-schwarz.com
Internet: <http://www.rohde-schwarz.com>

Printed in Germany - お断りなしに記載内容の一部を変更させていただくことがあります。
あらかじめご了承ください。R&S® は、Rohde & Schwarz GmbH & Co. KG. の登録商標です。

本書では、「R&S®FSVR」を「R&S FSVR」と略記します。

基本的な安全指示

以下の安全指示を常に確認して遵守してください。

ROHDE & SCHWARZ 社では、弊社が提供する製品が常に最新の安全基準を満足し、お客様に対して最善の安全性が提供できるよう、あらゆる努力をしております。弊社の製品およびそれらに必要な補助機器は、対応する安全基準に従って設計され、試験されています。これらの安全基準に対する適合性は、弊社の品質保証システムによって、常に確認されています。この製品は、EC Certificate of Conformity（ヨーロッパ共同体適合証明）に従って設計・検査され、安全基準に完全に合致した状態で弊社の工場から出荷されています。この状態を維持し、安全に動作させるためには、このマニュアルに示されているすべての指示と注意事項を守ってください。安全指示についてご質問があれば、弊社の支店 / 営業所にお問い合わせください。

さらに、使用者は、適切な方法で製品を使用しなければなりません。この製品は、産業環境やラボ環境、または作業現場でのみ使用するように設計されており、どのような場合であっても、個人の身体の安全や資産を損なう可能性があるような方法で使用することはできません。指定されている目的を逸脱して製品を使用したり、製造者の指示を守らなかったりした場合には、使用者が全責任を負うものとします。このような状態で製品が使用された場合には、製造者は一切の責任を負わないものとします。

製品の資料に従い、処理能力の範囲内（データ・シート、資料、以下の安全指示参照）で製品が使用された場合には、製品は指定の目的で使用されたものとします。製品を使用するためには、技術的な能力が必要とされ、英語が理解できなければなりません。したがって、製品は、適切な技術力を備えた専門の要員、または必要な技術によって完璧な訓練を受けた要員によってのみ使用することが重要です。ROHDE & SCHWARZ 社の製品を使用するにあたり、個人の安全を確保するための器具が必要な場合には、製品の資料のそれぞれの箇所に説明してあります。安全な場所で基本的な安全指示および製品の資料を順守して、それらを今後のユーザにも伝えてください。

安全指示を守ることによって、危険な状態から生じる身体への傷害やあらゆる損傷を、できるかぎり回避することができます。したがって、製品の操作を開始する前に、以下の安全指示をよく読み、厳守してください。また、資料の他の部分に示されている、身体の安全を確保するためのその他の安全指示にも、必ず従ってください。これらの安全指示の中で、“製品”とは、計測器本体、システム、およびすべてのアクセサリを含め、ROHDE & SCHWARZ 社が販売し、提供しているすべての商品を示します。

マークおよび安全表示





							
注意、一般的な危険箇所 製品資料の遵守	重い装置を扱う場合に注意	感電の危険	警告！ 高温面	PE 端子	接地	接地端子	静電気に弱い装置を扱う場合に注意

					
ON/OFF 供給電圧	スタンバイ表示	直流 (DC)	交流 (AC)	直 / 交流 (DC/AC)	二重絶縁 / 絶縁強化によって完全に保護されている装置

基本的な安全指示

タグと表示内容

以下の警告表示は、リスクや危険を警告するために製品資料で使用されています。

	回避しなければ、死亡または重傷を負う可能性がある危険な状態を示しています。
	回避しなければ、死亡または重傷を負う可能性もある危険な状態を示しています。
	回避しなければ、軽度または中程度の負傷を負う可能性もある危険な状態を示しています。
	不適切な操作を行うと製品を損傷する可能性があることを示しています。製品資料では、ATTENTION が同じ意味として使用されています。

これらのタグは、欧州経済圏の一般市場で使用されている標準的な定義に従って表示されています。他の経済圏または軍事的に利用する場合は、標準の定義とは異なることもあります。したがって、ここで説明されているタグは、常に、対応する製品資料および対応する製品に関連してのみ使用されていることを確認してください。対応していない製品や対応していない資料に当てはめてタグを使用すると、誤って解釈し、その結果、身体の安全を損なったり、製品に損傷を与えたりすることがあります。

操作状態と操作位置

製品は、製造者によって指定された操作条件下で、指定の位置でのみ使用することができます。使用中は、換気が妨げられないようにしなければなりません。製造者の仕様を遵守しないと、感電、火災、または重傷や死亡を招く可能性があります。該当する地域または国内における安全指示および事故防止の規制をすべての実施作業において遵守する必要があります。

別段の指定がないかぎり、ROHDE & SCHWARZ 社の製品には、次の必要条件が適用されます。

所定の動作位置では、必ず、ケースの底が下方に向いていること、IP 保護 2X、公害重大度 2、過電圧カテゴリ 2、密閉された場所でのみ使用すること、最大動作高度は海拔 2000 m、最大運搬光度は海拔 4500 m。公称電圧に対しては $\pm 10\%$ 、公称周波数に対しては $\pm 5\%$ の許容範囲が適用されるものとします。

重量や安定性の理由から製品の設置に適していない面、乗物、キャビネット、またはテーブルに製品を置かないでください。製品を設置し、物体や構造物（壁、棚など）に固定するときには、必ず、製造者の設置指示に従ってください。製品資料で説明されているとおりに設置しないと、身体への障害または死亡の可能性がります。

ラジエータやファンヒータなど、熱を発生する装置の上に製品を置かないでください。周囲温度が製品資料またはデータシートで指定されている最高温度を超えることはできません。製品がオーバーヒートすると、感電、火災、または重傷や死亡を招く可能性があります。

基本的な安全指示

電気保安

電気保安情報の必要な範囲内すべてを遵守しないと、感電、火災、または身体への重度の傷害や死亡を招く可能性があります。

1. 製品の電源を入れる前に、製品の公称電圧の設定と、AC 電源ネットワークの公称電圧とが一致しているか確認しなければなりません。別の電圧を設定しなければならない場合には、それに対応して、製品の電源ヒューズを交換する必要が生じることもあります。

取り外しのできる電源コードとコネクタのついた安全クラス I の製品の場合には、接地端子と PE 接地のあるソケットでのみ、操作することができます。

給電ラインや製品本体の接地は、絶対に切断しないでください。接地を切断した場合、製品に感電する危険があります。延長コードやコネクタのストリップを使用している場合には、安全に使用できるかどうか、定期的に点検しなければなりません。

製品に、AC 電源から切断するための電源スイッチがない場合には、接続ケーブルのプラグが切断装置とみなされます。この場合には、電源プラグが簡単に手の届く位置にあり、いつでも操作できるようにしなければなりません。(接続ケーブルの長さは約 2 m です。) AC 電源ネットワークから切断する場合、機能的スイッチや電子式スイッチは適切ではありません。電源スイッチのついていない製品をラックに取りつけたり、システムに組み込んだりする場合には、システムレベルで切断装置を準備しなければなりません。

電源ケーブルが破損している場合には、絶対に製品を使用しないでください。正しい操作条件下にあるかどうか電源ケーブルを定期的に点検してください。適切な安全対策を講じ、慎重に電源ケーブルを設置することによって、ケーブルが破損しないよう、また、ケーブルにつまづいたり、感電したりしてけがをすることがないようにしてください。

製品は、最大 16 A のヒューズが取り付けられた TN/TT 電源ネットワークからのみ、操作することができます(高いヒューズは ROHDE & SCHWARZ 社に相談後のみ)。

プラグをほこりがついていたり、汚れたりしているソケットに差し込まないでください。プラグは、ソケットの奥までしっかりと差し込んでください。プラグが十分に差し込まれていないと、火花が出たり、火災の原因になったり、けがをしたりすることがあります。

ソケット、延長コード、またはコネクタのストリップをオーバロード状態にしないでください。火災や感電の原因になる可能性があります。

Vrms > 30 V の電圧の回路を測定する場合には、あらゆる危険を避けるために、適切な手段(適切な計測器、ヒューズ、電流制限器、電気分離、絶縁など)を講じる必要があります。

PC または他の産業用コンピュータなどの IT 機器との接続が、どの場合においても、標準規格 IEC 60950-1/EN 60950-1 または IEC 61010-1/EN 61010-1 に準拠していることを確認してください。

製品を操作しているときには、絶対に、カバーをはずしたり、ケースの一部をはずしたりしないでください。回路や構成部品が露出し、けがをしたり、火災の原因になったり、製品が損傷したりすることがあります。

固定位置に製品を設置する場合には、最初に設置場所の PE 端子と製品の PE コンダクタを接続し、そのあとで他の接続を行わなければなりません。製品は、熟練の電気技師によってのみ、設置し、接続することができます。

ヒューズ、サーキット・ブレーカ(回路遮断器)、または同様の保護装置が組み込まれていない機器を固定して設置する場合には、使用者や製品をけがや損傷から適切に保護できるような方法で、電源回路を保護しなければなりません。

基本的な安全指示

適切な過電圧保護機能を使用し、雷雨によって生じるような過電圧が、製品に達しないようにしてください。高圧保護機能がないと、操作要員に感電の危険が及ぶ可能性があります。

設計が意図していないかぎり、どのような物もであっても、ケースの開口部に差し込まないでください。製品内部が短絡状態になり、感電したり、火災の原因になったり、けがをしたりすることがあります。

別段の記載がないかぎり、製品は防水ではありません。（「操作状態と操作位置」セクションの項目 0 も参照してください。したがって、機器を水滴の浸入から保護する必要があります。）必要な予防策を取らないと、感電する危険が生じたり、製品に損傷を与えたり、その結果、身体への損傷を招く可能性があります。

低温の環境から暖かい環境へと製品を移動した場合など、製品の内外に結露が生じている状態、あるいは生じる可能性があるような条件下では、絶対に製品を使用しないでください。水の浸入は感電の危険性が増します。

電源（AC 供給ネットワークまたはバッテリーなど）と製品の接続を完全に外してから、製品を掃除してください。柔らかく、糸くずの出ない布を使用して製品を掃除してください。アルコール、アセトン、またはセルロースラッカー用の希釈剤などの化学洗剤を使用しないでください。

操作

1. 製品を操作するためには、専門的な訓練と高度な集中力が必要です。製品を使用する要員が、肉体的、精神的、および情緒的見地から、製品の操作に適切かどうか確認してください。不適切な場合には、けがまたは製品への損傷の可能性があります。製品の操作に適した要員を選択することは、雇用者/運営担当者の責務です。

「輸送」セクションを確認して遵守しながら、製品の移動および輸送を行います。

すべての工業製品同様、通常、ニッケルなど、アレルギー症状を引き起こす物質（アレルゲン）の使用を避けることはできません。ROHDE & SCHWARZ 社の製品を使用して皮膚に発疹ができたり、くしゃみが頻発したり、目が充血したり、または呼吸困難な状態など、アレルギー症状が現れた場合には、すみやかに医者にご相談し、原因を確認して、健康上の問題またはストレスを予防してください。

製品の機械的処理、熱処理、または解体前に、「値の入力 - パラメータの設定」セクションの項目 1 を必ず確認して注意を払ってください。

RF 無線設備など、特定の製品の機能によっては、高レベルな電磁放射が生じる可能性があります。胎児に対しては保護を強化する必要があるため、妊婦は適切な方法で保護する必要があります。また、電磁放射は、ペースメーカーを使用している人に対しても危険を及ぼす可能性があります。雇用者/運用担当者は、電磁放射を被ばくする危険性の高い職場を調査し、必要に応じて、潜在的な危険を回避するための方策を講じる必要があります。

火災が発生した場合には、健康に害を与える恐れのある有毒物質（気体、液体など）が製品から流出する可能性があります。したがって、防護マスクや防護服の装着など、適切な対策を講じる必要があります。

ROHDE & SCHWARZ 社の製品にレーザー製品（CD/DVD ドライブなど）が組み込まれている場合には、製品資料で説明されている設定や機能以外は使用しないでください。これは身体への損傷（レーザー光線などによる）を防ぐためです。

基本的な安全指示

修理とサービス

1. 製品は、専門的訓練を受けた資格のある要員以外が開くことはできません。製品に対して作業をする場合、あるいは製品を開く場合には、事前に、製品を AC 供給ネットワークから切断しておかなければなりません。切断しておかないと、要員に感電の危険が及ぶ可能性があります。

ROHDE & SCHWARZ 社から許可された電気技師以外が、調整、部品の交換、保守、および修理を行うことはできません。安全性に関わる部品（電源スイッチ、電源トランス、ヒューズなど）を交換する場合には、オリジナルの部品以外を使用することはできません。安全性に関わる部品を交換した場合には、必ず、安全テスト（外観検査、PE コンダクタ・テスト、絶縁抵抗測定、漏れ電流測定、機能テスト）を行わなければなりません。これにより製品の安全を引き続き確保します。

バッテリーと蓄電池

バッテリーと蓄電池に関する情報の必要な範囲内すべてを遵守しないと、破裂や火災の発生、または重傷や死亡の可能性があります。アルカリ性のバッテリーおよび蓄電池（リチウム電池など）は、標準規格 EN 62133 に従って処理する必要があります。

1. 電池を分解したり、または破壊したりしないでください。
2. 電池またはバッテリーを熱や火に近づけないでください。日光が直接当たる場所への保管を避けてください。電池およびバッテリーを清潔で乾いた状態で保管してください。乾いた清潔な布でコネクタの汚れを取り除いてください。
3. 電池またはバッテリーを短絡させないでください。互いに短絡を起こしたり、他の伝導体により短絡が引き起こされるため、電池またはバッテリーを箱や引き出しに保管しないでください。電池およびバッテリーを使用する時まで元の梱包から取り出さないでください。
4. 電池およびバッテリーを子供の手の届かない所に保管してください。電池またはバッテリーを飲み込んだ場合には、すみやかに医者にご相談してください。
5. 許容範囲外の強い機械的衝撃を電池およびバッテリーに与えてはいけません。
6. 電池から液体が漏れている場合、その液体が皮膚または目に直接触れないようにしてください。触れてしまった場合には、十分な水でその部分を洗い、医者にご相談してください。
7. アルカリ性の蓄電池またはバッテリー（リチウム電池など）は正しく交換しないと、破裂する可能性があります。製品の安全性を確保するために、ROHDE & SCHWARZ 社のタイプに一致する電池またはバッテリー（部品リストを参照してください）とのみ交換してください。

電池およびバッテリーをリサイクルして、残留廃棄物とは区別してください。鉛、水銀、およびカドミウムを含む蓄電池および通常のバッテリーは有害廃棄物です。廃棄物処理およびリサイクルに関する国内の規則を遵守してください。

輸送

1. 製品は非常に重いため、慎重に扱う必要があります。一部では、背中や体のその他の部分の損傷を避けるため、製品の持ち上げまたは移動には適切な方法（リフトトラックなど）が必要になります。

基本的な安全指示

2. 製品の取っ手は、操作要員が製品を運ぶ目的でのみ設計されています。したがって、クレーン、フォークリフト、自動車などの輸送手段に製品を固定するために取っ手を使用することはできません。輸送または持ち上げる際に製品をしっかりと固定する場合、使用者が責任を負います。輸送または持ち上げの際は、製造者の安全規則を遵守してください。規則に従わない場合には、身体または製品への損傷を招く可能性があります。

車中で製品を使用する場合には、車の安全な運転については、運転者が全責任を負うものとします。事故や衝突については、製造者は一切の責任を負わないものとします。車の運転者の注意力が散漫になる可能性があるため、移動中の車の中では絶対に製品を使用しないでください。事故の際に身体またはその他への損傷を避けるために、製品を車中で適切に固定してください。

廃棄物処理

1. 製品または構成部品に対して本来の使用目的を超えて機械的処理または熱処理を行うと、有害な物質（鉛、ベリリウム、ニッケルなどの重金属粉）が放出されることがあります。このため、専門的訓練を受けた要員以外が製品を解体することはできません。適切に解体しないと、健康に害を与えることがあります。各国の廃棄物処理規則を遵守しなければなりません。
2. 特殊な方法で廃棄しなければならない有害物質や燃料、たとえば定期的な補給を必要とする冷却液やエンジンオイルなどを生じる製品を取り扱う場合には、有害物質や燃料の製造者からの安全指示、および、各地で適用されている廃棄物処理規則を遵守しなければなりません。また、製品資料に示されている安全規則も遵守してください。有害物質または燃料を適切に処理しないと、健康被害および環境問題を引き起こす可能性があります。

目次

1 はじめに.....	5
1.1 文書の概要.....	5
1.2 本書の表記について.....	7
2 フロント・パネルとリア・パネル.....	9
2.1 フロント・パネル.....	9
2.2 リア・パネル.....	19
3 使用準備.....	24
3.1 使用前準備.....	24
3.2 USB デバイスの接続.....	31
3.3 外部モニタの接続.....	33
3.4 本機の設定.....	33
3.5 Windows オペレーティング・システム.....	43
3.6 ネットワーク (LAN) 接続の設定.....	45
3.7 LXI の設定.....	48
3.8 GPIB インタフェースの設定.....	54
3.9 リモート・デスクトップ接続.....	55
4 ファームウェアのアップデートとオプションのインストール	59
4.1 ファームウェアのアップデート.....	59
4.2 ファームウェア・オプションの有効化.....	60
5 基本的な操作.....	62
5.1 ダイアグラム・エリア内の情報.....	62
5.2 ユーザとのインタフェース.....	70
5.3 パラメータの設定.....	80

5.4 表示の変更.....	86
6 基本的な測定例.....	96
6.1 リアルタイム・アナライザの使用.....	96
6.2 正弦波信号の測定.....	108
6.3 正弦波信号の高調波測定.....	113
6.4 複数の信号のスペクトラムの測定.....	117
6.5 ゼロ・スパンでの測定.....	124
6.6 本機の設定情報のセーブ／リコール.....	135
7 リモート制御の概要.....	139
7.1 リモート制御プログラミングの基本ステップ.....	139
7.2 プログラミングの詳細例.....	147
8 付録.....	163
8.1 付録：プリンタ・インタフェース.....	163
8.2 付録：LAN インタフェース.....	166
8.3 RSIB プロトコル.....	192
索引.....	193

1 はじめに

1.1 文書の概要

本機のユーザ・ドキュメントは、次の冊子から構成されています。

- クイック・スタート・ガイド
- オペレーティング・マニュアル
- サービス・マニュアル
- オンライン・ヘルプ
- リリース・ノート

クイック・スタート・ガイド

このマニュアルは印刷物と CD に PDF 形式で記録されたものが本体に同梱されています。内容は、本機の設定と操作に必要なもので、基本的な操作方法と測定方法を説明しています。またリモート制御の概要、安全にご使用いただくための注意事項などの一般的な事項のほか、次の各章が続きます。

第 1 章	本書の説明および本機の概要
第 2 章	フロント・パネルとリア・パネル
第 3 章	使用準備
第 4 章	ファームウェアのアップデートとファームウェア・オプションのインストール
第 5 章	基本的な操作
第 6 章	基本的な測定例
第 7 章	リモート制御の概要
付録 1	プリンタ・インタフェース
付録 2	LAN インタフェース

オペレーティング・マニュアル

オペレーティング・マニュアルは、クイック・スタート・ガイドを補足するものです。オペレーティング・マニュアルは、基本ユニットおよび追加（ソフトウェア）オプションごとに用意されます。

文書の概要

基本ユニットのオペレーティング・マニュアルでは、本機の基本事項について概説し、“Spectrum”モードについて詳細に説明します。さらに、様々な測定モードの基本機能を向上させるソフトウェア・オプションも解説します。クイック・スタート・ガイドで説明した測定例を、より高度な測定例を使ってさらに詳細に解説しています。リモート制御については、クイック・スタート・ガイドで述べた概要のほかに、コマンドの詳細とプログラミングの例も示してあります。保守および本機のインターフェースやエラー・メッセージに関する情報も提供します。

各々のオプション・マニュアルでは、そのオプションで追加される本機の機能を具体的に詳述します。デフォルトの設定とパラメータの詳細については、データ・シートを参照してください。本機の基本的な操作方法は、オプション・マニュアルでは説明しません。

本機では、下記のオペレーティング・マニュアルが提供されます。

- R&S FSV 基本ユニット。次のオペレーティング・マニュアルもあります。
 - R&S FSV-K9 パワー・センサ・サポート
 - R&S FSV-K14 スペクトログラム測定
- R&S FSV-K7 アナログ復調および R&S FSV-K7S FM ステレオ測定
- R&S FSV-K10 GSM/EDGE 測定
- R&S FSV-K30 ノイズ・フィギュア測定
- R&S FSV-K40 位相雑音測定
- R&S FSV-K70 ベクトル信号解析
- R&S FSV-K72 3GPP FDD BTS 解析
- R&S FSV-K73 3GPP FDD UE 解析
- R&S FSV-K76/77 3GPP TD-SCDMA BTS/UE 測定
- R&S FSV-K82/83 CDMA2000 BTS/MS 解析
- R&S FSV-K84/85 1xEV-DO BTS/MS 解析
- R&S FSV-K91 WLAN IEEE 802.11a/b/g/j/n
- R&S FSV-K93 WiMAX IEEE 802.16 OFDM/OFDMA 解析
- R&S FSV-K100/K104 EUTRA/LTE ダウンリンク測定アプリケーション
- R&S FSV-K101/K105 EUTRA/LTE アップリンク測定アプリケーション

このマニュアルは CD に PDF 形式で収録され、本体に添付されて出荷されます。印刷版のマニュアルをご希望の場合は営業担当へご請求ください。

サービス・マニュアル

このマニュアルは、PDF 形式で CD に記録されて本体と共に出荷されます。本機の機能について、正確な測定を行うための定格仕様との適合性のチェック方法、修理、トラブルシューティング、および故障除去について説明します。モジュールの交換によって本機を修理するときに必要な内容が、詳細に説明してあります。サービス・マニュアルの内容は、次のとおりです。

第 1 章	性能確認試験
第 2 章	調整
第 3 章	修理
第 4 章	ソフトウェアのアップデート／オプションのインストール
第 5 章	ドキュメント

オンライン・ヘルプ

オンライン・ヘルプには、本機および使用可能なすべてのオプションの操作について、項目別のヘルプ情報が収録されています。マニュアル操作とリモート操作の両方について説明しています。オンライン・ヘルプは本機にデフォルトでインストールされているほか、本機に添付の CD に実行可能形式の chm ファイルとしても収められています。

リリース・ノート

リリース・ノートには、ファームウェアのインストール方法をはじめ、機能の追加や修正、解決済みの問題点、ドキュメントの収録に間に合わなかった変更内容などを記載しています。対応するファームウェアのバージョンは、リリース・ノートの表紙に示されています。現時点のリリース・ノートは、インターネット上で提供しています。

1.2 本書の表記について

1.2.1 文字体裁

本書では、次のテキスト書式を使用しています。

表記	説明
"Graphical user interface elements"	ダイアログ・ボックスや、メニュー、オプション、ボタン、ソフトキーなどのグラフィカル・ユーザ・インタフェースの名前はクォーテーション・マークで囲みます。
KEYS	キー名は大文字で表記します。
File names, commands, program code	ファイル名、コマンド名、プログラムコード、スクリーン表示文字などは、このフォントで表記します。
<i>Input</i>	ユーザが入力する内容は、イタリック体で表記します。
Links	クリックできるハイパーリンクは、青いフォントで表記します。
"References"	参照は、クォーテーション・マークで囲みます。

1.2.2 手順説明の表記について

本機は、同じ動作について複数の操作方法がある場合があります。ここでは、タッチ・スクリーンを使用する方法を説明します。タッチ操作できるエレメントは、マウス・クリックで操作することもできます。同じ操作をパネル上のキーやタッチ・スクリーン上のキーボードを使用して行う方法については、標準以外の手順の場合にのみ記述します。

操作の説明で「選択」という場合、タッチ・スクリーンに指を触れるか、マウス・ポインタ、パネル上のキー、キーボードのいずれかで行ってください。

2 フロント・パネルとリア・パネル

2.1 フロント・パネル

本章では、すべてのファンクション・キーとコネクタを含め、フロント・パネルについて説明します。

図 2-1 に、本機のフロント・パネルの外観を示します。個々についての詳細な説明は、それぞれのセクションを参照してください。

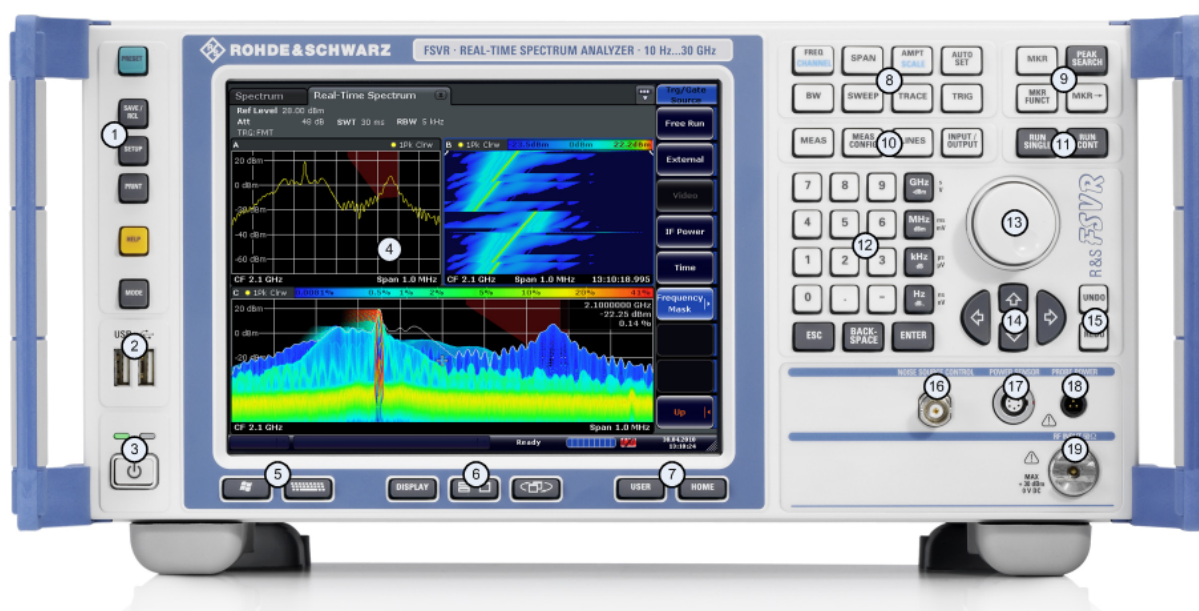


図 2-1:

No.	説明	参照先
1	本機の基本的な設定に使用するファンクション・キー。測定モードの切り替え、初期設定の変更、ヘルプなど	2.1.1, “フロント・パネルのファンクション・キー”, (ページ 10)
2	USB コネクタ。外部装置（マウス、キーボードなど）を接続するときに使用	2.1.3, “フロント・パネルのコネクタ”, (ページ 15)
3	電源 ON/OFF スイッチ	3.1.6, “電源のオン/オフ”, (ページ 28)
4	タッチ・スクリーン。測定結果の表示領域	2.1.2, “タッチ・スクリーン上の表示”, (ページ 14)

No.	説明	参照先
5	補助機能。Windows のスタート・メニューや オン・スクリーン・キーボードを呼び出す	2. 1. 1, “フロント・パネルのファンクション・キー”, (ページ 10)
6	スクリーンの表示モード切り替え	5. 4, “表示の変更”, (ページ 86)
7	スクリーン・メニューのナビゲーション	5. 2. 6, “矢印キー、UNDO/REDO キー”, (ページ 75)
8	測定条件の設定。周波数、レベルなど	2. 1. 1, “フロント・パネルのファンクション・キー”, (ページ 10)
9	マーカ機能	2. 1. 1, “フロント・パネルのファンクション・キー”, (ページ 10)
10	測定の手順、組み立て	2. 1. 1, “フロント・パネルのファンクション・キー”, (ページ 10)
11	測定開始の指示	2. 1. 1, “フロント・パネルのファンクション・キー”, (ページ 10)
12	テンキー。単位やデータの入力キー	5. 2. 4, “キーパッド”, (ページ 74)
13	ロータリ・ノブ	5. 2. 5, “ロータリ・ノブ”, (ページ 75)
14	矢印キー	5. 2. 6, “矢印キー、UNDO/REDO キー”, (ページ 75)
15	取り消し/やり直し機能	5. 2. 6, “矢印キー、UNDO/REDO キー”, (ページ 75)
16	ノイズ・ソースの制御	2. 1. 3, “フロント・パネルのコネクタ”, (ページ 15)
17	パワー・センサ (オプション)	2. 1. 4, “フロント・パネルのオプション・コネクタ”, (ページ 17)
18	プローブ電源コネクタ。測定用の付属品に電圧を供給	2. 1. 3, “フロント・パネルのコネクタ”, (ページ 15)
19	RF 入力	2. 1. 3, “フロント・パネルのコネクタ”, (ページ 15)



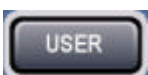

2. 1. 1 フロント・パネルのファンクション・キー

対応するメニュー、およびその他のファンクション・キーについては、オペレーティング・マニュアルの第 6 章 “Instrument Functions” で詳しく解説してあります。

表 2-1: ファンクション・キー

	本機をオン/オフします。
	本機をデフォルト状態にリセットします。
	本機の設定情報をセーブしたりリコールしたりする機能と、セーブされているファイルを管理する機能があります。
	本機を設定する基本機能。 <ul style="list-style-type: none"> ● 日付と時間 ● 表示の設定 ● LAN の設定 ● ファームウェアに関する情報およびアップデート ● その他
	プリンタとプリントアウト形式の設定。
	オンライン・ヘルプを表示します。
	モードの選択
	Windows のスタート・メニューを開きます。
	オン・スクリーン・キーボードの表示を次のように切り替えます。 <ul style="list-style-type: none"> ● スクリーンの最上部に表示 ● スクリーンの最下部に表示 ● 表示しない
	英数字キーボード
	スクリーンのエレメントをオン/オフするダイアログ・ボックスを開きます。

フロント・パネル

	フォーカスしている領域を最大表示と分割表示に切り替えます。
	フォーカスしている表示を表形式と図形式に切り替えます。
	ユーザ固有の設定ファイルをリコールできるように、ソフトキーの定義と設定をします。
	現在の動作モードのルート・メニューを開きます。
FREQ (CHANNEL)	設定しようとする周波数範囲の中心周波数、スタート周波数、およびストップ周波数を設定します。このキーは、周波数オフセットやシグナル・トラック機能の設定にも使用します。 (特殊なアプリケーションでは CHANNEL と呼ばれます)
SPAN	解析する周波数スパンを設定します。 リアルタイム・モードではスパンは RBW に連動し、40MHz に制限されます。
AMPT (SCALE)	レベル表示のときの基準レベル、表示するダイナミック・レンジ、RF アッテネーション、および単位を設定します。 レベル・オフセットと入力インピーダンスを設定します。 プリアンプ (オプションの RF プリアンプ、R&S FSV-B22) を起動します。 (特殊なアプリケーションでは SCALE と呼ばれます)
AUTO SET	周波数やレベル、掃引モードの設定などを自動的にを行います。
BW	分解能帯域幅とビデオ帯域幅を設定します。 リアルタイム・モードでは、RBW はスパンに連動します。ビデオ帯域幅は使用できません。
SWEEP	掃引時間と測定ポイント数を設定します。リアルタイム・モードでは、測定ポイント数は 801 に固定されます。 連続測定または単測定を選択します。
TRACE	測定データの収集と解析の方法を設定します。
TRIG	ゲート掃引の場合のトリガ・モード、トリガ閾値、遅延トリガ、およびゲート・コンフィグレーションを設定します。
MKR	絶対測定と相対測定のマーカ (マーカとデルタ・マーカ) を設定して位置を決めます。

PEAK SEARCH	有効になっているマーカに対しピーク・サーチを実行します。有効になっているマーカがないときは、ノーマル・マーカ 1 を有効にしてピーク・サーチを実行します。
MKR FUNC	この測定マーカには次の解析機能も付随しています。 <ul style="list-style-type: none"> ● 相対測定マーカ用の固定基準点 (Ref Fixed) ● 周波数カウンタ (Sig Count) ● ノイズ・マーカ (Noise Meas) ● 位相雑音 (Phase Noise) ● n dB ダウン機能 ● AM/FM オーディオ復調 (オプション R&S FSV-B3 使用時) リアルタイム・モードでは、マーカ機能は使用できません。
MKR⇒	測定マーカのサーチ機能に使用します (トレースの最大値と最小値)。 マーカ周波数を中心周波数に設定し、マーカ・レベルを基準レベルに設定します。 サーチ・エリアを限定し (Search Limits)、最大点と最小点の特性を明らかにします (Peak Excursion)。
MEAS	測定を実行するときに使用します。 スペクトラム・モードでは、以下の測定が実施できます。 <ul style="list-style-type: none"> ● マルチキャリア隣接チャネル・パワーの測定 (Ch Power ACLR) ● 搬送波対雑音間隔 (C/N C/No) ● 占有帯域幅 (OBW) ● スペクトラム・エミッション・マスク測定 (Spectrum Emission Mask) ● スプリアス・エミッション (Spurious Emissions) ● タイム・ドメイン・パワー測定 (Time Domain Power) ● 信号の統計データ 振幅確率分布 (APD) と累積分布補関数 (CCDF) ● 3 次インタセプト・ポイント (TOI) ● AM 変調度 (AM Mod Depth) リアルタイム・モードでは、以下の測定が実施できます。 <ul style="list-style-type: none"> ● リアルタイム・スペクトラム ● スペクトログラム ● 持続性スペクトラム
MEAS CONFIG	測定条件を定義するときに使用します。

LINES	表示ラインと規格線を設定します。
TRIGGER OUTPUT	入出力機能用のソフトキーを表示します。
RUN SINGLE	単測定 (Single Sweep Mode) を開始します。
RUN CONT	連続測定 (Continuous Sweep Mode) を開始します。
UNDO	直前の操作を取り消します。 一部のアプリケーションには対応していません。詳細はリリース・ノートを参照してください。
REDO	直前に取り消した操作を再度実行します。 一部のアプリケーションには対応していません。詳細はリリース・ノートを参照してください。

2.1.2 タッチ・スクリーン上の表示

すべての測定結果は、フロント・パネルのスクリーンに表示されます。また、スクリーンを通して測定の状態や条件設定を確認できるほか、複数の測定タスクを切り替えることもできます。このスクリーンは指で触れて制御することもでき、ユーザは素早く容易に操作できるようになっています。

図 2-2 に、本機のタッチ・スクリーンの画面とその周辺を示します。個々のエレメントについては、5, “基本的な操作”, (ページ 62) で詳細に説明しています。

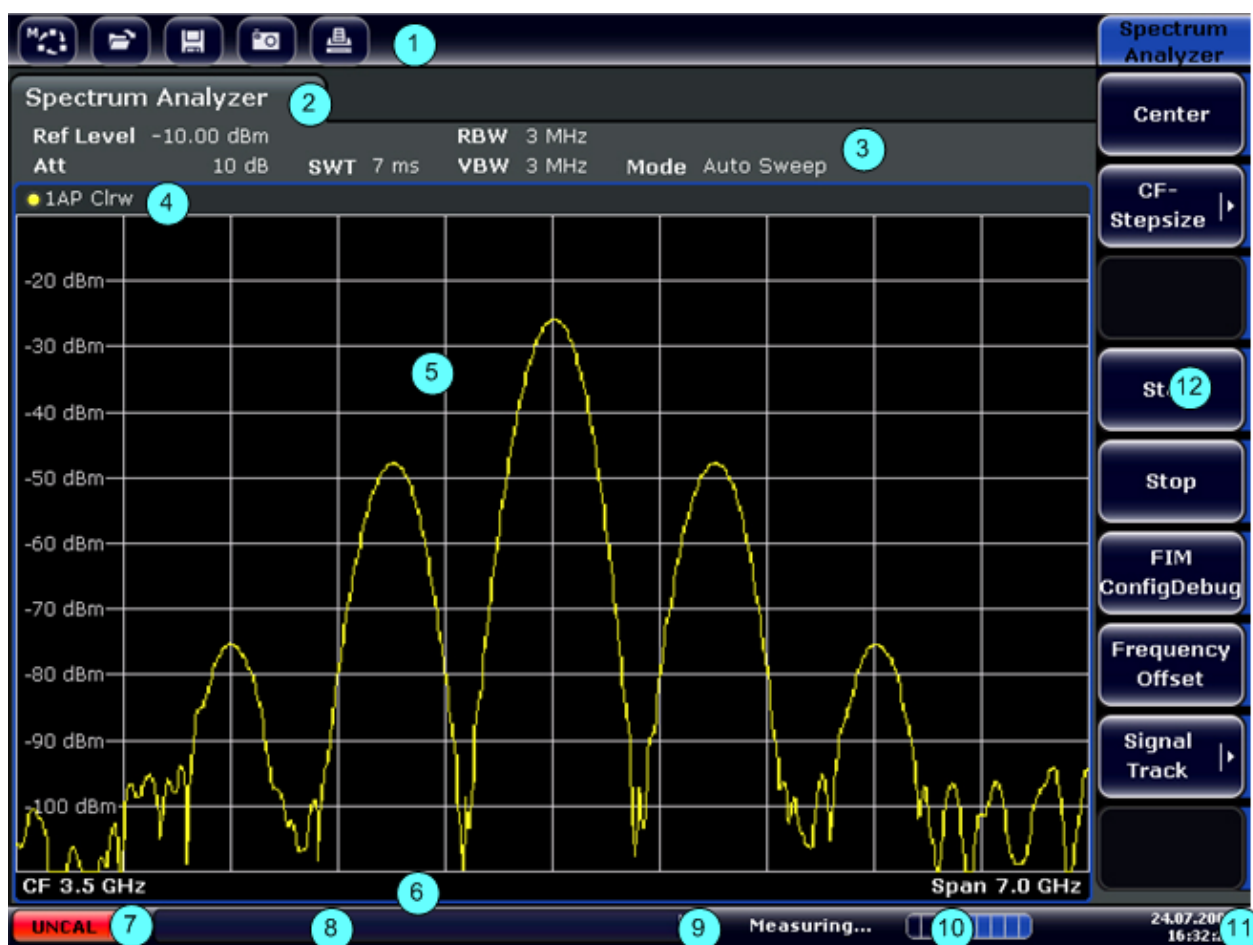


図 2-2: タッチ・スクリーンのエレメント

- 1 = 基本的な動作のツールバーです。印刷、ファイルのセーブ／オープンなどの機能が利用できます。
- 2 = 個々の測定タスクのタブです。
- 3 = 現在の測定の条件設定に関するチャンネル情報バーです。
- 4 = ダイアグラムのヘッダ部。ダイアグラム特有の情報（トレース）を示します
- 5 = 測定結果の表示領域です。
- 6 = 測定結果のフッタ部。測定モードに応じたダイアグラム特有の情報を示します
- 7 = エラー表示
- 8 = エラーがあったときにエラー・メッセージが表示されます。
- 9 = 装置の状態
- 10 = 測定の進捗度を示すバーが表示されます。
- 11 = 日付と時間
- 12 = メニューを選択するソフトキーです。

2.1.3 フロント・パネルのコネクタ

このセクションでは、本機のフロント・パネル上のコネクタとインタフェースについて説明します。オプションで追加されたコネクタやインタフェースは、括弧

内にオプション名を示します。USB コネクタ以外のほとんどのコネクタは、フロント・パネルの右下に実装されています。

2.1.3.1 USB

フロント・パネルには、キーボードやマウスなどのデバイスを接続するために、2 つの USB コネクタがあります（キーボードには R&S PSL-Z2、オーダー番号 1157.6870.03 を、またマウスには R&S PSL-Z10、オーダー番号 1157.7060.03 を推奨します）。また USB メモリを接続して、本機の設定情報や測定値のセーブ、リロードに使うこともできます。



測定結果への EMI の影響

電磁妨害（EMI）により測定結果が影響される場合があります。影響を排除するために、次の条件を守ってください。

- ケーブルは 2 重シールドされたものを使用してください。
- USB 接続ケーブルの長さは、1m 以内のものを使用してください。
- また EMI の規制に適合する USB 装置だけを使用してください。
- 本機に IEC バス・ケーブルを接続する場合は、他の機器またはコントローラで必ず終端させてください。

2.1.3.2 ノイズ・ソースの制御

外部のノイズ・ソースに電源電圧を与えるためのノイズ・ソース制御用コネクタです。ノイズ・フィギュアやアンプ・ゲインの測定、周波数を変換するような被試験装置の測定などに使用します。

通常使われるノイズ・ソースは多くの場合、スイッチ・オンのときに +28V、オフのときに 0V を必要とします。この出力では最大 100mA の電流をサポートしています。

2.1.3.3 RF 入力 50Ω

RF 入力は、適切なコネクタの付いたケーブルで被試験装置に接続してください。



本機への損傷の危険

入力をオーバーロード状態にしないでください。最大許容値については、データシートを参照してください。入力を AC カップリングで使用するときは、重畳できる DC 電圧の最大値は 50V です。また DC カップリングのときには、いかなる DC 電圧も重畳させてはなりません。どちらのカップリングでも、これらの制限内で使用ください。

2.1.3.4 プローブ・パワー



本機には、アクティブなプローブやプリアンプに電圧 +15V ~ -12V およびアースを接続するためのコネクタを備えています。最大で 140 mA までの電流が使用できます。このコネクタは、Agilent のハイインピーダンス・プローブの電源として適しています。

2.1.4 フロント・パネルのオプション・コネクタ

2.1.4.1 AF 出力（オーディオ復調器オプション、R&S FSV-B3）

この AF 出力コネクタには、ミニチュア・ジャック・プラグ付きヘッドホンを接続することができます。内部インピーダンスは 10 Ω です。このコネクタの右にあるボリューム・コントロールで出力電圧を設定できます。プラグを接続した場合、内蔵スピーカは自動的にオフになります。

このコネクタとボリューム・コントロールは、オーディオ復調器オプション（R&S FSV-B3）でのみ使用できます。AF 出力を使用するには、“In-/Output” メニュー（INPUT/OUTPUT キー）から “Video Output” を選択します。出力電圧（ボリューム）は 1V です。

▲ 注意

聴覚障害の危険

聴覚を保護するため、ヘッドホンを装着する前に、ボリュームの設定が高すぎないことを確認してください。

2.1.4.2 パワー・センサ（追加インタフェース・オプション、R&S FSV-B5）

R&S NRP-Zxy 系列のパワー・センサの接続には、LEMOSA コネクタを使用します。

2.1.4.3 外部ミキサ用コネクタ（EXT MIXER、オプション R&S FSV-B21）

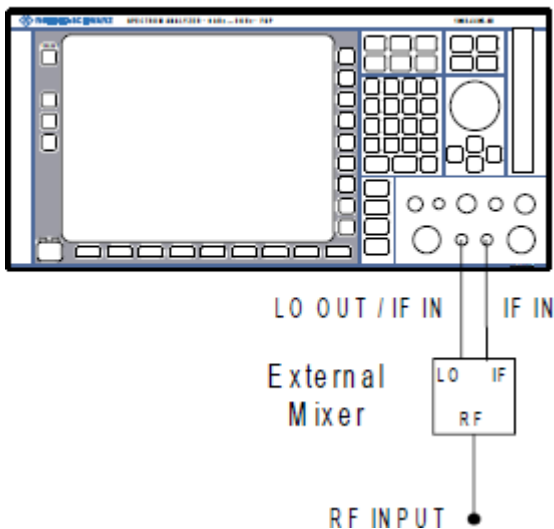
外部ミキサは、R&S FSVR 30（オプション R&S FSV-B21）の LO OUT/IF IN と IF IN のコネクタに接続できます。2ポート構成および3ポート構成のミキサの両方に対応しています。ミキサは次のように接続します。



LO 信号を入力するには、付属の同軸ケーブルを使用してください。本機に外部ミキサを接続しない場合は、フロント・パネルのコネクタ LO OUT/IF IN と IF IN の両方を、付属の SMA キャップでカバーしてください。

3 ポート・ミキサ

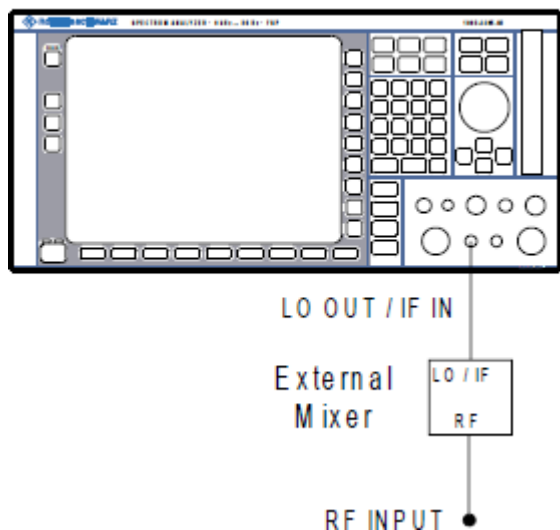
Three-port mixer:



1. 本機の LO OUT/IF IN 出力を外部ミキサの LO ポートに接続します。
2. 本機の IF IN 入力を外部ミキサの IF ポートに接続します。
3. 測定する信号を、外部ミキサの RF 入力に供給します。

2 ポート・ミキサ

Two-port mixer:



1. 本機の LO OUT/IF IN 出力を外部ミキサの LO/IF ポートに接続します。公称 LO レベルは 15.5dBm です。本機にダイプレクサが内蔵されているため、ミキサに LO 信号を入力するためのラインから、IF 信号を取り込むことができます。
2. 測定する信号を、外部ミキサの RF 入力に供給します。

2.2 リア・パネル

図 2-3 に、本機のリア・パネルの外観を示します。個々についての詳細な説明は、それぞれのセクションを参照してください。オプションで追加されたコネクタやインターフェースは、括弧内にオプション名を示します。



図 2-3: リア・パネル

- 1 = LAN
- 2 = EXT TRIGGER / GATE IN
- 3 = MONITOR (VGA)
- 4 = REF IN
- 5 = REF OUT
- 6 = GPIB インタフェース
- 7 = AC 電源入力、およびヒューズ付き主電源スイッチ

2.2.1 リア・パネルの標準コネクタ

2.2.1.1 AC 電源コネクタと主電源スイッチ

AC 電源に接続するコネクタと主電源スイッチは、リア・パネルの 1 箇所を実装されています。

主電源スイッチの機能：

Position 1 にあるときは、本機が使用状態にあることを示します。

Position 0 にあるときは、AC 電源から完全に切り離されています。

詳細については、[3.1.6](#), “電源のオン/オフ”, (ページ 28) を参照してください。



OCXO に必要なウォームアップ時間

本機の電源を入れたときには十分な OCXO ウォームアップ時間が必要です（データシートを参照）。待機モードから起動する場合には、ウォームアップ時間の必要はありません。

2.2.1.2 LAN

LAN インタフェースを使用して、本機をローカル・ネットワークに接続し、リモート制御、プリントアウト、およびデータ転送を行うことができます。RJ-45 コネクタを採用することによって、星形構成においてカテゴリ 5 の UTP/STP ツイスト・ペア・ケーブルを使用することができます。UTP は *unshielded twisted pair*（シールドされていないツイスト・ペア）、STP は *shielded twisted pair*（シールドされたツイスト・ペア）を表します。

2.2.1.3 MONITOR (VGA)

VGA コネクタは、外部モニタを接続するために使用します。モニタの接続方法の詳細は、3.3, “外部モニタの接続”, (ページ 33) を参照してください。

2.2.1.4 EXT TRIGGER / GATE IN

EXT TRIGGER/GATE IN コネクタは、外部信号で測定を制御するときに使用します。電圧レベルは 0.5 ~ 3.5V、初期値では 1.4V です。入力インピーダンスは、標準で 10 k Ω です。

2.2.1.5 REF IN

基準信号は、内部基準信号を使うか外部基準信号を接続して使うかを選択できます。この切り替えは設定メニューの中で行います。外部の基準信号を使用するときは REF IN コネクタに外部基準信号を入力します。周波数が 1 ~ 20MHz、レベルが 0 ~ 10dBm の信号を印加してください。

2.2.1.6 REF OUT

このコネクタは、本機に接続された装置に外部基準信号（OCXO 基準信号など）を出力するときに使用します。基準信号は 10 MHz、出力レベル 0 dBm で出力されます。

2.2.1.7 GPIB インタフェース

GPIB インタフェースは、IEEE488 および SCPI 規格に準拠しています。外部のコンピュータからリモート制御するときはこのコネクタを使います。接続の際には、シールド・ケーブルをご使用ください。詳細については、オペレーティング・マニュアルの第 7 章 “Remote Control Basics” を参照してください。

2.2.2 リア・パネルのオプション・コネクタ

2.2.2.1 OCXO オプション (R&S FSV-B4)

このオプションは、出力レベル ≥ 0 dBm の 10MHz の基準信号を高精度で生成します。このオプションが実装され、外部から基準信号が入力されていないときには、このオプションの信号が内部基準信号として使用されます。この基準信号を REF OUT コネクタから出力すると、他の装置を同期させるときにも使用できます。



OCXO に必要なウォームアップ時間

本機の電源を入れたときには十分な OCXO ウォームアップ時間が必要です（データシートを参照）。待機モードから起動する場合には、ウォームアップ時間の必要はありません。

2.2.2.2 TRIGGER OUTPUT (オプション番号、R&S FSV-B5)

別の装置に信号を出力するときに BNC コネクタを使用できます。出力は TTL レベルです (0V/5V)。“In-/Output” メニュー (INPUT/OUTPUT キー) から “Trigger out” ソフトキーを選択して、トリガ出力をコントロールします。

トリガ出力では、リアルタイム・モードで利用できる周波数マスク・トリガによって信号をコントロールすることもできます。

2.2.2.3 IF/VIDEO (オプション番号、R&S FSV-B5)

この BNC コネクタは、次に示す様々な出力に使用できます。

- 約 20MHz の中間周波数 (IF) 出力
- ビデオ出力 (1V)

IF 出力とビデオ出力の切り替えは、“In-/Output”メニュー（INPUT/OUTPUT）で行います。

2.2.2.4 USB（オプション番号、R&S FSV-B5）

リア・パネルにはさらに 2 個の USB コネクタが実装されています。ここに、キーボード（推奨品 R&S PSL-Z2、オーダー番号 1157.6870.03）やマウス（推奨品 R&S PSL-Z10、オーダー番号 1157.7060.03）を接続できます。また USB メモリを挿入し、装置設定や測定データのセーブ、リロードができます。



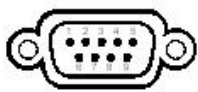
測定結果への EMI の影響

電磁妨害（EMI）により測定結果が影響される場合があります。影響を排除するために、次の条件を守ってください。

- ケーブルは 2 重シールドされたものを使用してください。
- USB 接続ケーブルの長さは、1m 以内のものを使用してください。
- また EMI の規制に適合する USB 装置だけを使用してください。
- 本機に IEC バス・ケーブルを接続する場合は、他の機器またはコントローラで必ず終端させてください。

2.2.2.5 AUX PORT（オプション番号、R&S FSV-B5）

9 ピンの D-SUB コネクタから、外部装置をコントロールするための制御信号が出力されます。電圧レベルは TTL レベルです（最大 5V）。



ピン番号	信号	説明
1	+5V/最大 250mA	外部回路への電圧供給
2 ~ 7	I/O	未使用（将来の機能拡張用）
8	GND	接地
9	トリガ準備 OK	本機にトリガ信号受信の準備ができていることを示す信号



ピンの短絡（接地）に注意

ピンの短絡によって本機が壊れることがあります。ピンの配列に十分な注意を払ってください。

3 使用準備

3.1 使用前準備

このセクションでは、本機を最初に設定するときの基本手順を説明します。

警告

感電の危険

本機のケーシングは開けないでください。本機の通常操作時には、ケーシングを開ける必要はありません。このマニュアルの冒頭に示した安全注意事項および規則を参照してください。



本機への損傷の危険

一般的な安全注意事項には、本機の損傷を防止するための操作条件についても記載しています。本機のデータ・シートに、その他の操作条件が記載されている場合があります。



本機への損傷の危険

本機の電源を入れる前に、次の条件が満たされていることを確認してください。

- 本機のケーシングが閉じていて、すべてのねじが固く締めてあること。
- ファンの開口部が塞がれてなく、通風孔も遮られていないこと。壁面までの距離は 10cm 以上取ってください。
- 本機に湿気がなく、結露がないこと。
- 本機は平面上に水平にして使用されること。
- 周囲温度はデータ・シートに指定されている範囲を外れていないこと。
- 入力コネクタから入力される信号レベルがすべて指定範囲内にあること。
- 信号出力が適切に接続され、オーバロード状態になっていないこと。

以上の条件が守られていないと、本機あるいは試験システムの他の装置にも損傷を与える可能性があります。



静電放電の危険

モジュール内の電子部品の損傷を防止するために、作業区域を静電放電から保護してください。詳細については、このマニュアルの巻頭に示した安全注意事項を参照してください。



測定結果への EMI の影響

電磁妨害 (EMI) により測定結果が影響される場合があります。影響を排除するために、次の条件を守ってください。

- ケーブルは 2 重シールドされたものを使用してください。
- USB 接続ケーブルの長さは、1m 以内のものを使用してください。
- また EMI の規制に適合する USB 装置だけを使用してください。
- 本機に IEC バス・ケーブルを接続する場合は、他の機器またはコントローラで必ず終端させてください。

3.1.1 パッケージ内容の確認

次の手順に従って本機を梱包から取り出し、不足しているものがないか確認してください。

1. 本機のリアのスタンド部からポリエチレン製の梱包保護材を外し、フロントのハンドルから梱包保護材をていねいに外します。
2. 本機リア部分を保護している段ボール・カバーを外します。
3. 本機フロントのハンドルを保護している段ボール・カバーを注意して外します。
4. 納品書や付属品リストと照合して不足しているものがないか確認してください。
5. 本機に損傷がないか点検します。損傷が見つかった場合は、直ちに弊社へ連絡してください。梱包箱と包装材は廃棄しないでください。



包装材

元の包装材は保管しておいてください。本機を輸送したり、出荷する場合に、元の包装材を使用してコントロール機能やコネクタが損傷しないようにすることができます。

3.1.2 付属品リスト

標準付属品として次のものが添付されます。

- 電源ケーブル
- クイック・スタート・ガイド
- CD “R&S FSV シグナル／スペクトラム・アナライザ ユーザ・ドキュメンテーション”

3.1.3 本機の設置または取り付け

本機は、ベンチトップに設置するかまたはラックに取り付けて、ラボ環境で使用するよう設計されています。

ベンチトップで使用する場合

本機をベンチトップで操作する場合には、平らな面に設置してください。本機は脚部に載せて、または底部の支持脚を延長して、水平な姿勢で使用します。

▲ 注意

傷害の危険

スタンドを引き出したまま本機を移動すると、スタンドが折り畳まれてしまうことがあります。本機を安定させるため、また作業者の安全を確保するためにも、スタンドは完全に引き出すか、完全に折り畳んでください。けが防止のため、スタンドを引き出したまま本機を移動しないでください。

けがや損傷の原因になりますので、スタンドを引き出して本機を使用しているときは、本機の下で作業したり本機の下に物を置いたりしないでください。

ラックに取り付ける場合

本機は、ラック・アダプタ・キットを使用してラックに取り付けることができます（キットのオーダー番号についてはデータシートを参照）。アダプタ・キットに取り付け説明書が添付されています。



本機への損傷の危険

ラックに取り付ける場合は、ファンの開口部が塞がれてなく、通風孔も遮られていないことを確認してください。本機の過熱を防止するためにも注意してください。

3.1.4 AC 電源の接続

標準のバージョンでは AC 電源に接続するコネクタが実装されています。本機は何通りかの AC 電源電圧に自動的に対応して動作します。この電圧と周波数の要件についてはデータシートを参照ください。AC 電源コネクタはリア・パネルに実装されています。

コネクタの詳細については、[2.2.1.1, “AC 電源コネクタと主電源スイッチ”](#), (ページ 20) を参照してください。



- ▶ 本機と AC 電源の接続には、付属の電源ケーブルを使用します。本機は安全規格 EN61010 に適合するように設計されており、AC 電源の接続に当たっては接地された端子を持つコンセントに接続します。

3.1.5 AC 電源ヒューズの変更

ヒューズは、タイプ IEC 60 127-T6.3H/250 V を使用します。これらのヒューズは、すべての規定公称 AC 電源電圧に使用されます。

AC 電源ヒューズの変更

1. 電源ケーブルを取り外します。
2. 小型のドライバなどを使用し、電圧切り替え部を覆っているフラップを開きます。
3. 公称電圧が表示されている円筒部を取り外します。ヒューズを 2 本とも取り外し、新しいヒューズを取り付けます。円筒部を元の位置に挿入します。カバー・フラップの穴から見える公称電圧の値が交換前の値と同じであることを確認してください。
4. フラップを閉めます。

3.1.6 電源のオン／オフ

電源の投入

- ▶ リア・パネルの AC 電源スイッチの “I” 側を押します。本機に AC 電源が供給されます。本機が起動し、運転可能になります。このとき ON/OFF キーの上の緑色 LED が点灯し、オン・モードであることを示します。



0CX0 に必要なウォームアップ時間

本機の電源を入れたときには十分な 0CX0 ウォームアップ時間が必要です（データシートを参照）。待機モードから起動する場合には、ウォームアップ時間の必要はありません。

電源の切断

1. フロント・パネルの ON/OFF キーをオフにします。
2. リア・パネルの AC 電源スイッチを“0”の位置に切り替えるか AC 電源コードを取り外します。

これで本機はオフ・モードになります。



データ損失の危険

本機の動作中にリア・パネルの電源スイッチを押したり電源コードを取り外して電源をオフにすると、本機から現在の設定が失われます。さらに、プログラム・データも失われる可能性があります。

必ず最初に ON/STANDBY キーを押して、アプリケーションを正しく停止してください。

3.1.7 保守

本機には定期的保守の必要はありません。基本的に本機を清掃する以外の保守作業は不要です。ただし、公称データについては適宜確認することを推奨します。



洗浄剤による装置の損傷

洗浄剤には、装置を損傷する可能性のある物質が含まれています。例えば、溶剤を含む洗浄剤は、フロント・パネルの標示部やプラスチック部を損傷する可能性があります。

溶剤（シンナー、アセトン、その他）、酸性／アルカリ性の強い洗浄剤は絶対に使用しないでください。

本機の外面は、柔らかく、糸くずの出ない布で十分に清掃してください。

本機の保管温度範囲はデータ・シートに明記されています。長期間本機を保管する場合には、ほこりから保護してください。

本機を搬送あるいは出荷するときは、元の包装材（特にフロント・パネルとリア・パネルの 2 枚の保護カバー）を使用することを推奨します。

3.1.8 自己調整とセルフテストの実行



動作温度

この機能試験を実行する前に、本機が動作温度に達していることを確認してください（詳細はデータ・シートを参照）。

自己調整の実行

1. SETUP キーを押します。
2. “Alignment” ソフトキーを押します。
3. “Self Alignment” ソフトキーを押します。

システム補正値が正常に計算されたら、メッセージが表示されます。



後で整合結果を再び表示する方法

- SETUP キーを押します。
- “Alignment” ソフトキーを押します。
- “Show Align Results” ソフトキーを押します。

セルフテストの実行

セルフテストは電源投入時に毎回実行する必要はありません。本機の誤動作が疑われるときに限り、実行してください。

1. SETUP キーを押します。
2. “More” ソフトキーを押します。
3. “Service” ソフトキーを押します。

4. “Selftest” ソフトキーを押します。

本機のもジュールのテストが正常に実施されると、その旨のメッセージが表示されます。

3.1.9 付属オプションの確認

本機にハードウェア・オプションとファームウェア・オプションの両方が実装されている場合があります。納品書に記載されているオプションが実装されているかどうか、次の手順で確認してください。

1. SETUP キーを押します。
2. “System Info” ソフトキーを押します。
3. “Versions + Options” ソフトキーを押します。
ハードウェアとファームウェアの情報がリスト表示されます。
4. 納品書に記載されているハードウェア・オプションが搭載されているか確認します。

3.2 USB デバイスの接続

本機はフロント・パネルに、またオプション仕様でリア・パネルにも、USB インタフェースがあり、USB デバイスを直接本機に接続することができます。USB ハブを使用することで、接続するデバイスの数を必要に応じて増やすことができます。使用可能な USB デバイスは多数あり、本機はほぼ無制限に拡張することができます。

あると便利な USB デバイスには、次のようなものがあります。

- データ（例えばファームウェアのアップデート）をコンピュータと簡単にやり取りするための USB メモリ
- ファームウェア・アプリケーションを簡単にインストールするための CD-ROM および DVD ドライブ
- データ、コメント、ファイル名などを簡単に入力するためのキーボード
- 操作全般を容易にするためのマウス
- 測定結果をプリントアウトするためのプリンタ
- パワー・センサ（NRP Zxy 系列製品など）

USB デバイスの接続

USB デバイスはどれもプラグ&プレイ仕様であるため、Windows XP 環境下で簡単にインストールすることができます。本機の USB インタフェースにデバイスを接続すると、自動的に Windows XP が適切なデバイス・ドライバを探します。

Windows XP が適切なドライバを見つけられない場合は、ドライバ・ソフトウェアが入っているディレクトリを指定するように指示してきます。ドライバのソフトウェアが CD 上にある場合には、ディレクトリを指定する前に、本機に USB CD-ROM ドライブを接続してください。

本機から USB デバイスを取り外すと、Windows XP は即座にハードウェアの設定が変わったことを認識し、対応するドライバを停止します。

すべての USB デバイスは、本機が動作中でも接続したり外したりすることができます。

USB メモリや CD-ROM ドライブの接続

USB メモリや CD-ROM ドライブのインストールに成功すると、Windows XP は USB デバイスを使用できることを通知します。USB デバイスは新しいドライブ (D:) として使用できるようになり、Windows Explorer に表示されます。ドライブ名は、メーカーによって異なります。

キーボードの接続

キーボードは、接続と同時に自動的に検出されます。デフォルトの入出力言語は英語（米国）です。

Windows XP で “Start > Control Panel > Keyboard” または “Regional and Language Options” を選択し、キーボードのプロパティを設定します。Windows XP にアクセスするには、キーボードの Windows キーを押します。

マウスの接続

マウスは、接続と同時に自動的に検出されます。

Windows XP で “Start > Control Panel > Mouse” を選択し、マウスのプロパティを設定します。

プリンタの接続

ファイルを印刷するときには、本機はプリンタが接続されていてオンになっているか、また適切なプリンタ・ドライバがインストールされているかを調べます。必要な場合には、Windows XP の “Add Printer” ウィザードによりプリンタ・ドライバのインストールを開始します。プリンタ・ドライバは、一度だけインストールすれば済みます。

外部モニタの接続

アップデートや改良されたドライバ・バージョン、あるいは新しいドライバを、インストール・ディスク、USB メモリ、その他の外部記憶媒体から読み込むことができます。本機がネットワークに組み込まれている場合は、ネットワーク・ディレクトリにセーブされているドライバ・データをインストールすることも可能です。“Start > Settings > Printer and Faxes”メニューから“Add Printer”ウィザードを使用して、ドライバをインストールします。Windows XP にアクセスするには、キーボードの Windows キーを押します。

3.3 外部モニタの接続

外部モニタは、本機リア・パネルの“MONITOR”コネクタに接続します。

コネクタの詳細については、[2.2.1.3, “MONITOR \(VGA\)”](#), (ページ 21) を参照してください。

1. 本機に外部モニタを接続します。
2. SETUP キーを押します。
3. “General Setup” ソフトキーを押します。
4. “More” ソフトキーを押します。
5. “Configure Monitor” ソフトキーを押します。

接続されたモニタの設定は、Windows 標準の設定ダイアログ・ボックスで行います。

6. この設定ダイアログ・ボックスで、内部モニタ（ラップトップ・アイコン）と外部モニタ（モニタ・アイコン）を切り替えたり、両方のモニタ（ダブル・モニタ・アイコン）を使用したりすることができます。

外部モニタを選択したときは、本機のディスプレイは無効になります。それまで本機に表示されていた画面内容（測定画面）が外部の画面に表示されます。両方のモニタを選択したときは、本機の画面と外部の画面の両方がアクティブになります。

3.4 本機の設定

このセクションでは、次のような内容で本機の設定方法を説明します。

本機の設定

3.4.1	基準周波数信号の選択.....	34
3.4.2	日付と時間の設定.....	35
3.4.3	タッチ・スクリーンの調整.....	36
3.4.4	スクリーン・カラーの設定.....	36
3.4.4.1	スクリーン・カラーのサブ・メニューの表示.....	36
3.4.4.2	デフォルトの色設定の使用.....	37
3.4.4.3	定義済みカラー・セットの使用.....	37
3.4.4.4	ユーザ定義のカラー・セットの定義付けと使用.....	38
3.4.5	ディスプレイのパワー・セーブ機能の設定.....	40
3.4.6	プリンタの選択と設定.....	40
3.4.6.1	プリンタとプリントアウト形式の設定.....	41
3.4.6.2	プリントアウトの色の選択.....	42

3.4.1 基準周波数信号の選択

本機の周波数処理用の基準信号として、内部基準信号または 10 MHz の外部基準信号が使用できます。どちらを使用するか、次の手順で切り替えることができます。

1. SETUP キーを押します。
2. “Reference Int/Ext” ソフトキーを押し、内部か外部を選択します。



外部基準信号

外部基準信号を接続したままで内部基準信号に切り替えると、2 つの信号間で干渉が起きる危険があります。外部基準から内部基準に切り替えるときは、外部基準信号を無効にしてください。

リモート・コマンド：

ROSC:SOUR EXT

ROSC:EXT:FREQ 20

3.4.2 日付と時間の設定

内蔵のリアルタイム・クロックの日付と時間は、次の手順で設定します。

日付と時間のプロパティ・ダイアログ・ボックスの起動

1. SETUP キーを押します。
2. "General Setup" ソフトキーを押します。
3. "Time + Date" ソフト・キーを押して "Date and Time Properties" ダイアログ・ボックスを開きます。
"Date & Time" タブが表示されます。

日付の変更

1. "Month" 欄に矢印を合わせて押し、リストを表示します。
2. リストから目的の月を選択します。
3. "Year" 欄の横にある上下の矢印ボタンをクリックし、目的の年を選択します。
4. 表示されたカレンダーから目的の日付を選択するか、キーボードから日付を入力します。
5. "OK" をクリックします。

リモート・コマンド：
SYST:DATE 2008,10,1

時間の変更

時、分、秒をそれぞれ独立に設定できます。

1. "Time" 欄の時、分、または秒の部分を選択します。
2. キーボードまたはロータリ・ノブで設定を入力します。
3. ステップ 2 を繰り返し 時、分、秒を正しく設定します。
4. "OK" をクリックします。

リモート・コマンド：
SYST:TIME 12,30,30

タイム・ゾーンの変更

1. "Time Zone" タブを選択します。

2. “Time Zone” 欄に矢印を合わせて押し、リストを表示します。
3. リストから目的のタイムゾーンを選択します。
4. また、“Automatically adjust clock for daylight saving changes” チェック・ボックスを選択する方法もあります。
5. “OK” をクリックします。

3.4.3 タッチ・スクリーンの調整


製品出荷時に、タッチ・スクリーンは初期調整されています。しかし、イメージのアップデートやハード・ディスクの交換後などに、再調整が必要になることがあります。また、スクリーンの特定の箇所をタッチしたときに適正な応答がない場合にも、調整を試みるとよいでしょう。

1. SETUP キーを押します。
2. “General Setup” ソフトキーを押します。
3. “Alignment” ソフトキーを押します。
4. “Touch Screen Alignment” ソフトキーを押します。
5. 指先やポインティング・デバイスなどを使ってスクリーン上の 4 個のマーカを押します。

この操作に従ってタッチ・スクリーンが調節されます。

3.4.4 スクリーン・カラーの設定

表示色を変える手段として、2 種の色設定がデフォルトとして用意されています。あるいは個々の表示色について、定義済みの色や独自に定義した色に変更することも可能です。

 テーマに合わせた色設定がいくつか定義されています（136 ページの“テーマの選択”を参照）。これらの色設定は個々に変更することはできません。

3.4.4.1 スクリーン・カラーのサブ・メニューの表示

1. SETUP キーを押します。

2. “Display Setup” ソフトキーを押します。
3. “More” ソフトキーを押します。
4. “Screen Colors” ソフトキーを押します。
“Screen Colors” サブメニューが表示されます。

3.4.4.2 デフォルトの色設定の使用

すべての表示色の輝度、色合い、彩度についてデフォルト設定を選択するには、次の手順に従います。

1. “Screen Colors” サブメニュー (3.4.4.1, “スクリーン・カラーのサブ・メニューの表示”, (ページ 36) を参照) で、“Set to Default” ソフトキーを押します。
“Set User Colors to Default” ダイアログ・ボックスが表示されます。
2. デフォルト・カラー・セットの 1 つを選択します。各セットとも、すべてのスクリーン・エレメントが上から見ても下から見ても最適に表示されるような色の組み合わせになっています。本機の場合、“Default Colors 1” がデフォルトで設定されています。

リモート・コマンド :

```
DISP:CMAP:DEF1
```

```
DISP:CMAP:DEF2
```

3.4.4.3 定義済みカラー・セットの使用

1. スクリーン・カラー・サブメニュー (3.4.4.1, “スクリーン・カラーのサブ・メニューの表示”, (ページ 36) を参照) で、“Select Screen Color Set” ソフトキーを押します。
“Select Screen Color Set” ダイアログ・ボックスが表示されます。
2. “User Defined Colors” オプションを選択します。
3. スクリーン・カラー・サブメニューで、“Select Object” ソフトキーを押します。
“Screen Color Setup” ダイアログ・ボックスが表示されます。



4. “Selected Object” リストに矢印を合わせて押し、色設定を変更する対象物を選択します。
5. 対象物に使用する色を選択します。その色が、ユーザ定義色として“Preview”ボックスに表示されます。
6. 色を変えたいすべての対象物について、上記の操作を繰り返します。
7. ユーザ定義の色に変更するには、“Userdefined Colors” ソフトキーを押します。詳細については、[3.4.4.4, “ユーザ定義のカラー・セットの定義付けと使用”](#), (ページ 38) を参照してください。
8. “OK” をクリックします。設定した内容が確定され、ダイアログ・ボックスが閉じます。

リモート・コマンド：

```
DISP:CMAP1 ... 41:PDEF <color>
```

3.4.4.4 ユーザ定義のカラー・セットの定義付けと使用

1. スクリーン・カラー・サブメニュー [3.4.4.1, “スクリーン・カラーのサブ・メニューの表示”](#), (ページ 36) を参照) で、“Select Screen Color Set” ソフトキーを押します。

“Select Screen Color Set” ダイアログ・ボックスが表示されます。

2. “User Defined Colors” オプションを選択します。
3. “Screen Colors” サブメニューで、“Select Object” ソフトキーを押します。“Screen Color Setup” ダイアログ・ボックスが表示されます。



4. “Selected Object” リストに矢印を合わせて押し、色設定を変更する対象物を選択します。
5. カラー・パレットの中から対象物に使用する色を選択します。または、色合い、彩度、輝度を数値で入力します。
その色が、ユーザ定義色として “Preview” ボックスに表示されます。
メモ：色の連続スペクトル (“Tint”) では、赤は 0 %、で青は 100 % で表されます。
6. 色を変えたいすべての対象物について、上記の操作を繰り返します。
7. 既に定義してある色に変更するときは、“Predefined Colors” ソフトキーを押します。詳細については、[3.4.4.3](#), “定義済みカラー・セットの使用”, (ページ 37) を参照してください。

本機の設定

8. “OK” をクリックします。設定した内容が確定され、ダイアログ・ボックスが閉じます。

リモート・コマンド：

```
DISP:CMAP1 ... 41:HSL <hue>,<sat>,<lum>
```

3.4.5 ディスプレイのパワー・セーブ機能の設定

本機は、ユーザが予め設定した時間で自動的にスクリーンをオフにする機能を備えています。また一定の応答時間の間、フロント・パネルの入力キーやソフトキー、ロータリ・ノブから何の操作も行われなかったときにはバックライトを消します。

ディスプレイのパワー・セーブを有効にする手順

1. SETUP キーを押します。
2. “Display Setup” ソフトキーを押します。
3. “More” ソフトキーを押します。
4. “Display Pwr Save On/Off” ソフトキーを押します。
パワー・セーブ・モードが有効になり (“On” がハイライトされます)、応答時間を入力するためのダイアログ・ボックスが表示されます。
5. 希望する応答時間を分単位で入力し、ENTER キーで確定します。
設定された時間が過ぎるとスクリーンは停止し (暗くなり)、パワー・セーブ・モードになります。

ディスプレイのパワー・セーブを無効にする方法

- ▶ “Display Setup” サブメニューで、“Display Pwr Save On/Off” ソフトキーをもう一度押します。
“Off” がハイライトされ、パワー・セーブ・モードが解除されます。

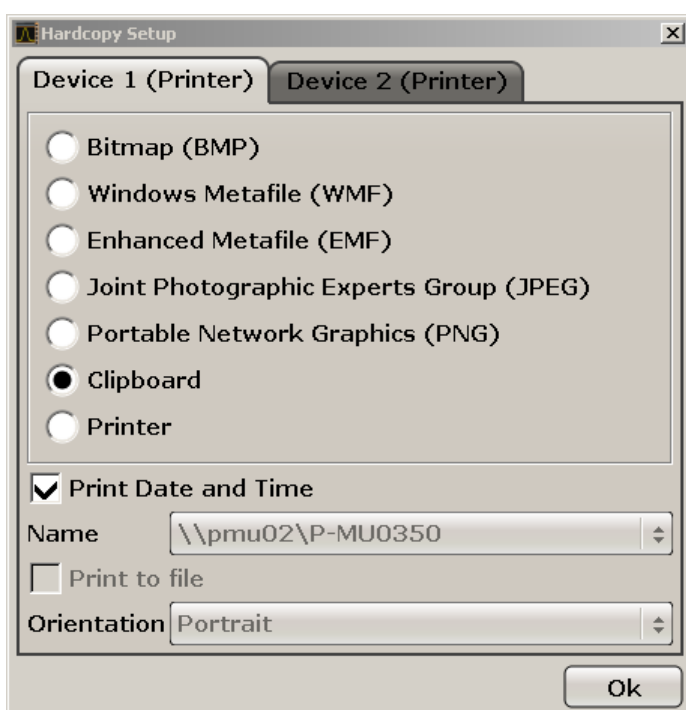
3.4.6 プリンタの選択と設定

測定結果は、ローカル・プリンタまたはネットワーク・プリンタを使用してプリントアウトすることができます。本機では、2種類の異なるプリント出力形式を設定できます。これにより、ファイルへの出力とプリンタへの出力を、簡単に切り替えることができます。ローカル・プリンタをインストールする手順は [8.1](#), “付録：プリンタ・インタフェース”, (ページ 163) に示します。ネットワー

ク・プリンタのインストール方法は、8.2.1.9, “ネットワーク・プリンタのインストール”, (ページ 177) で説明します。

3.4.6.1 プリンタとプリントアウト形式の設定

1. PRINT キーを押します。
2. “Device Setup” ソフトキーを押します。
“Hardcopy Setup” ダイアログ・ボックスが表示されます。



3. 2 番目のプリンタを設定するときは、ダイアログ・ボックスでそのタブを選択して行います。
4. 必要なオプションを選択して出力方法を指定します。
 - 画像ファイルにハードコピーをセーブする場合は、画像の種類を 1 つ選択します。画像の種類によって色深度が変わります（例えば BMP では 4 ビット、PNG や JPEG では 24 ビット）。
 - 画像をクリップボードにコピーする場合は、“Clipboard” オプションを選択します。
 - 既に設定済みのネットワーク・プリンタを使用する場合は、“Printer” オプションを選択します。

本機の設定

メモ：“Name”、“Print to File”、“Orientation”の各欄は“Printer”オプションを選択した場合にのみ使用できます。これ以降のステップは、“Printer”オプションを選択した場合にのみ実行できます。

5. “Name”欄で、使用するプリンタの種類を選択します。
6. 出力先をプリンタからポストスクリプト・ファイルに変更する場合は、“Print to file”オプションを選択します。
7. “Orientation”欄で、希望する印刷の向きを選択します。
8. 必要ならば、“Print Date and Time”オプションを有効にして日時情報を出力に加えることができます。
9. “OK”をクリックすると、設定した内容が確定されダイアログ・ボックスが閉じます。

3.4.6.2 プリントアウトの色の選択

1. PRINT キーを押します。
2. “Colors”ソフトキーを押します。
3. カラーで印刷するには、“Select Print Color Set”ソフトキーを押してカラー・セットを選択します。
“Select Print Color Set”ダイアログ・ボックスが表示されます。
4. 矢印キーを使ってカラー・セットを選択し、ENTER キーを押して確定します。
 - “Screen Colors (Print)”オプション：現在スクリーンに表示されている色でプリントアウトされます。現在のスクリーンの表示色とは無関係に、背景は白で、グリッドは黒で印刷されます。
リモート・コマンド：HCOP:CMAP:DEF1
 - “Optimized Colors”オプション：プリントアウトの色分けが明瞭になります。トレース 1 は青、トレース 2 は黒、トレース 3 は明るい緑、トレース 4 はピンク、トレース 5 はシー・グリーン、トレース 6 は濃い赤で、そしてマーカはスカイ・ブルーで印刷されます。また、背景は白で、グリッドは黒で印刷されます。その他の色は、“Setup”メニューのデフォルト・カラー設定によるスクリーン・カラーに従います。
リモート・コマンド：HCOP:CMAP:DEF2
 - “User Defined Colors”オプション：プリントアウトに使用する色を自分で定義します。操作方法については、[3.4.4.4, “ユーザ定義のカラー・セットの定義付けと使用”](#), (ページ 38) を参照してください。

Windows オペレーティング・システム

リモート・コマンド : HCOP:CMAP:DEF3

- “Screen Colors (Hardcopy) ” オプション : 現在スクリーンに表示している色がそのままハードコピーとして出力されます。出力形式の詳細については、[3.4.6.1, “プリンタとプリントアウト形式の設定”](#), (ページ 41) を参照してください。

リモート・コマンド : HCOP:CMAP:DEF4

5. 白黒のプリントアウトにしたいときは、“Color On/Off” ソフトキーを押してカラーをオフに設定します。白黒のプリントアウトでは、背景は白で、また色のついている線はすべて黒で印刷されます。これによりプリントアウトのコントラストが鮮明になります。

リモート・コマンド : HCOP:DEV:COL ON

3.5 Windows オペレーティング・システム

本機には、その機能や要求条件に従って構成された Windows XP オペレーティング・システムが搭載されています。本機のソフトウェアを正しく機能させるためには、オペレーティング・システムに関して守らなければならない一定のルールがあります。



本機の不安定化の危険

本機は Windows XP オペレーティング・システムを搭載しているため、追加のソフトウェアを本機にインストールすることができます。しかし、追加するソフトウェアによって、本機の動作や機能に支障が生じる場合もあります。当社にて本機との互換性を確認済みのプログラムのみをインストール／実行するようにしてください。

Windows XP 上で動作する本機のドライバやプログラムは、本機用に最適化を行なっています。本機に組み込まれているソフトウェアを変更するときは、必ずローデ・シュワルツがリリースするアップデート用ソフトウェアを使用してください。

次のプログラム・パッケージは、互換性が確認されています。

- R&S Power Viewer - パワー・センサ R&S NRP-Zxx の測定結果を表示するための仮想パワー・メータ
- Windows XP リモート・デスクトップ

- Symantec Norton AntiVirus – アンチウイルスソフト
- McAfee Virusscan
- FileShredder – ハード・ディスク上のファイルを確実に削除するソフトウェア

3.5.1 ウィルス対策

本機のウィルス感染を防ぐために、適切な対策を行なう必要があります。強力なファイアウォール設定を使用する、本機に使用する外部記憶装置にはウィルス・スキャンを実施する、ウィルス対策ソフトウェアを本機にインストールすること等の対策を推奨します。ローデ・シュワルツでは、Windows ベースの測定器にウィルス対策ソフトウェアをバックグラウンド（「オン・アクセス」モード）で実行することは、性能が低下する可能性があるため推奨しませんが、本作業以外のときなどにウィルス対策ソフトウェアを実行するよう推奨します。

詳細や推奨方法などについては、当社発行のホワイト・ペーパー「Malware Protection（悪意のあるソフトウェアからの保護）」（http://www2.rohde-schwarz.com/en/service_and_support/Downloads/Application_Notes/?type=20&downid=5699）を参照してください。

3.5.2 サービス・パックとアップデート

Microsoft 社では、Windows ベースのオペレーティング・システムの保護のために、セキュリティ・アップデート、その他のパッチを定期的に作成しています。これらは、Microsoft 社のアップデート用ウェブサイトおよび関連のアップデート・サーバからリリースされています。Windows を使用する機器、特にネットワークに接続するものについては、定期的にアップデートするようにしてください。

詳細について、また自動アップデートの設定については、当社発行のホワイト・ペーパー「Malware Protection（悪意のあるソフトウェアからの保護）」（http://www2.rohde-schwarz.com/en/service_and_support/Downloads/Application_Notes/?type=20&downid=5699）を参照してください。

システム設定の変更が必要になるのは、キーボードやプリンタなどの周辺機器を接続したとき、あるいはネットワーク設定がデフォルト設定に適合していない場合（3.6.1, “本機からネットワークへの接続”,（ページ 46）を参照）に限られます。

3.5.3 ログイン

Windows XP では、ログイン・ウインドウでユーザ名とパスワードを入力し、ユーザ識別を行う必要があります。ユーザは 2 種類のユーザ・アカウントを設定することができます。すなわち、コンピュータやドメインへのアクセスに制限のない管理者アカウントと、アクセス制限のある標準ユーザ・アカウントです。本機では、管理者アカウントに対してオート・ログイン機能が提供されていて、アクセス無制限のログインがバックグラウンドで自動的に実行されます。デフォルトでは、管理者アカウント用のユーザ名は“Instrument”で、標準ユーザ・アカウント用のユーザ名は“NormalUser”となっています。どちらも、初期パスワードは“894129”です（ファームウェア・バージョン 1.50 以前では“123456”ですが、ファームウェア・アップデート時にデフォルト・パスワードが自動的に“894129”に変更されます。）どのユーザのパスワードについても、Windows XP 上で“Settings > Control Panel > User Accounts”を開けば、いつでも変更することができます。ファームウェアのアップデート、LAN ネットワークの設定など、一部の管理作業には管理者権限が必要になります。管理者権限と各機能の関係については、SETUP メニューのソフトキーの説明を参照してください。

オート・ログインを停止する方法については、[8.2.1.7, “自動ログインの仕組”](#), (ページ 175) を参照してください。

3.5.4 スタート・メニューへのアクセス

Windows XP の“Start”メニューからは、Windows XP の各機能やインストールされているプログラムにアクセスすることができます。“Start”メニューを開くには、キーボードで Windows キーを押すか、または CTRL + ESC を同時に押します。

必要なシステム設定はすべて、“Start > Control Panel”メニューで行うことができます（必要な設定については、Windows XP のマニュアルおよびハードウェア説明を参照してください）。

“Start”メニューから各サブメニューへは、マウスまたはキーボードのカーソル・キーを使用して移動することができます。

3.6 ネットワーク（LAN）接続の設定

本機に搭載のネットワーク・インタフェースを使用して、イーサネット LAN（ローカル・エリア・ネットワーク）に接続することができます。ネットワーク管理

ネットワーク (LAN) 接続の設定

者から適切な権限が与えられて、Window XP のファイアウォールが適切に設定されている場合は、このネットワーク・インタフェースを使用して次のようなことが可能です。

- リモート制御プログラムの実行など、コントローラと本機の間でデータを転送する。「リモート制御」の章を参照
- 「リモート・デスクトップ」アプリケーション (または類似のツール) を使用して、リモート・コンピュータからアクセスまたは測定をコントロールする
- プリンタなどの外部ネットワークデバイスに接続する
- ネットワーク・フォルダを使用するなどして、リモート・コンピュータとデータをやりとりする

以下のセクションでは、LAN インタフェースの設定方法を説明します。

- [3.6.1, “本機からネットワークへの接続”](#), (ページ 46)
- [3.6.2, “IP アドレスの割り当て”](#), (ページ 47)



LXI

本機は、LXI クラス C に準拠しています。LXI により、LAN 設定を行なうことができます。

3.6.1 本機からネットワークへの接続

本機に LAN 接続を確立する方法は、次の 2 種類があります。

- RJ-45 (ストレート) ネットワーク・ケーブルを使用して、本機を既存ネットワークに非専用ネットワーク (イーサネット) 接続を確立します。本機に IP アドレスが割り当てられ、同じネットワーク上にある他のコンピュータやホストと共存することができます。
- RJ-45 (クロスオーバ) ネットワーク・ケーブルを使用して、本機と 1 台のコンピュータとの間に専用ネットワーク接続 (ポイント・ツー・ポイント接続) を確立します。ネットワーク・アダプタを備えたコンピュータと本機を直接接続する必要があります。ハブやスイッチ、ゲートウェイは必要ありませんが、データの転送には TCP/IP プロトコルが使用されます。本機およびコンピュータに IP アドレスを割り当てなければなりません。[3.6.2, “IP アドレスの割り当て”](#), (ページ 47) を参照してください。



ネットワーク障害の危険

本機をネットワークに接続する場合、あるいはネットワークを設定する場合は、あらかじめネットワーク管理者に相談してください。エラーが発生すると、ネットワーク全体に影響することがあります。

- ▶ 非専用ネットワーク接続を確立するには、RJ-45 (ストレート) ケーブルで接続します。
専用ネットワーク接続を確立するには、本機と 1 台の PC を RJ-45 (クロスオーバ) ケーブルで接続します。

本機が LAN に接続されると、Windows XP が自動的にネットワーク接続を検出し、必要なドライバの設定を行ないます。

3.6.2 IP アドレスの割り当て

本機の TCP/IP アドレス情報は、ネットワークの構成に応じて異なる方法で取得します。

- ネットワークが DHCP (Dynamic Host Configuration Protocol) によるダイナミック TCP/IP 構成をサポートしている場合は、すべてのアドレス情報を自動的に割り当てることができます。
- ネットワークが DHCP をサポートしていない場合、または本機が Alternate TCP/IP 設定を使用するように設定されている場合は、アドレスを手動で設定する必要があります。

デフォルト設定では、本機はダイナミック TCP/IP 構成を使用するように設定されており、アドレス情報を自動的に取得するように設定されています。したがって、本機を LAN に接続する前に、事前の設定は必要ありません。



ネットワーク・エラーの危険

接続エラーはネットワーク全体に影響を与える可能性があります。ネットワークが DHCP をサポートしていない場合、あるいはダイナミック TCP/IP 設定を無効にした場合は、本機を LAN に接続する前に適切なアドレス情報を割り当てる必要があります。ネットワーク管理者から有効な IP アドレスを取得してください。

3.6.3 コンピュータ名の使用

LAN に接続している PC やデバイスに、IP アドレスの代わりに一意的なコンピュータ名を指定してアクセスすることができます。各デバイスには出荷時にコンピュータ名が付与されていますが、これは変更することができます。

3.6.4 Windows ファイアウォール設定の変更

ファイアウォールは、権限のないユーザがネットワークを通して測定器にアクセスできないようにするものです。ローデ・シュワルツは、ご使用の測定器にファイアウォールを使用することを強く推奨します。本機は、Windows ファイアウォールを有効にして出荷され、またリモート制御用のすべてのポート接続が有効であるように設定されています。ファイアウォール設定の詳細については、当社発行のホワイト・ペーパー「Malware Protection (悪意のあるソフトウェアからの保護)」(http://www2.rohde-schwarz.com/en/service_and_support/Downloads/Application_Notes/?type=20&downid=5699)、および Windows XP ヘルプ・システムを参照してください。

ファイアウォール設定を変更するには管理者権限が必要です。

3.7 LXI の設定

LXI (LAN eXtensions for Instrumentation) は、標準のイーサネット技術をベースにした、測定器と測定システム用の計装プラットフォームです。 GPIB の後継となる LAN ベースの仕様であり、イーサネットの長所と簡潔で慣れ親しんだ GPIB を組み合わせたものです。

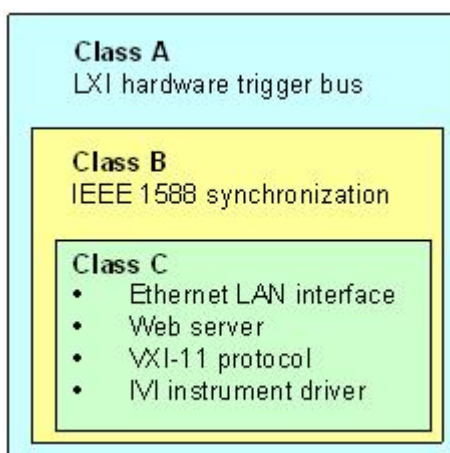


制限事項

LXI 機能を使用できるのは、管理者権限を持つユーザ・アカウントに限られます。詳細については、3.5, “Windows オペレーティング・システム”, (ページ 43) の中の注を参照してください。

LXI クラス分けと LXI の機能

LXI に準拠した装置は A、B、C の 3 クラスに分類されます。それぞれ階層的に重なった機能構造になっています。



- **Class C** 装置は、診断用の ICMP Ping Responder をはじめ、LAN の基本機能を搭載したものです。装置は Web ブラウザから設定が可能で、LAN 設定は LCI (LAN Configuration Initialize) メカニズムによりリセットされます。LXI class C 装置はさらに、VXI-11 発見プロトコルを使用した LAN 内の自動検出、および IVI ドライバによるプログラミングをサポートするものとします。
- **Class B** は Class C をベースに、IEEE 1588 PTP (Precision Time Protocol) という精密時間プロトコルと、ピア・ツー・ピア通信を加えたものです。IEEE 1588 では、同一ネットワーク上のすべての装置がネットワーク内で一番正確なクロック (時計) に自動的に同期することが可能になり、タイム・スタンプまたは時間ベースの同期信号が全装置に超高精度に提供されます。
- **Class A** の装置は、Class B の機能に加え、LXI 規格に定義されている 8 チャンネルのハードウェア・トリガ・バス (LVDS インタフェース) を搭載しています。



LXI 規格の詳細については、LXI のウェブサイト (<http://www.lxistandard.org>) を参照してください。また、ローデ・シュワルツのウェブサイトの掲載記事 (<http://www2.rohde-schwarz.com/en/technologies/connectivity/LXI/information/>) も参照してください。

Class A と B の装置は、LAN メッセージを介してソフト・トリガを発生・受信できるとともに、コントローラの介在なしに相互に通信することができます。

本機は LXI Class C に準拠しています。上に説明した Class C の全般的な機能に加え、次の LXI 関連機能を備えています。

- “LXI Configuration” ダイアログ・ボックス - LXI をアクティブにする機能と、LAN 設定をリセットする機能 (LCI : LAN Configuration Initialize) を統合したものです。

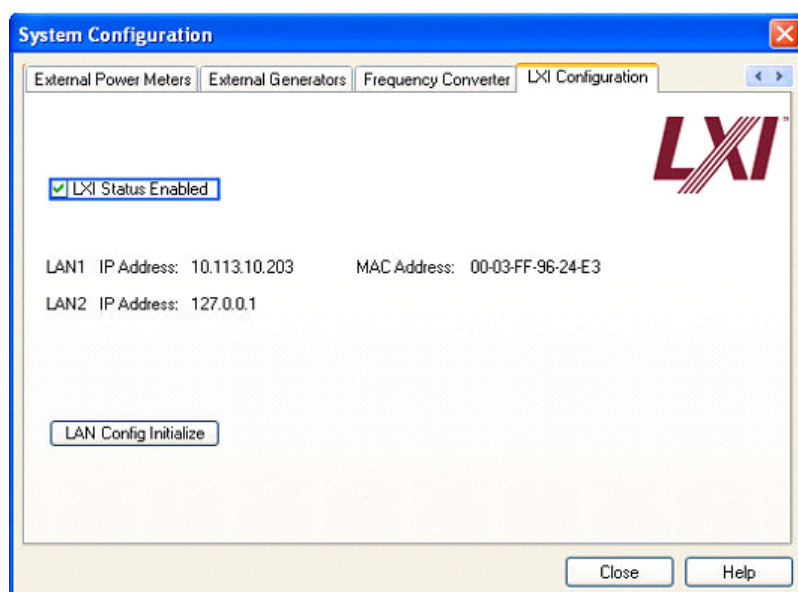


ファームウェアのアップデート

ファームウェアをアップデートした後は、本機をシャットダウンし再起動することで、LXI の全機能を有効にします。

3.7.1 LXI 設定ダイアログ・ボックス

このダイアログ・ボックスは、本機の基本的な LXI 機能を提供します。“LXI Configuration” は、“System > System Configuration” ダイアログ・ボックス内のタブとなっています。



LXI の設定

- “LXI Status Enabled” は、ステータス・バーに表示する LXI ロゴのオン/オフを切り替えます。
- “LAN Config Initialize” は、本機に対してネットワーク設定リセット機能 (LCI) を開始します。

ネットワーク設定のデフォルト状態

LXI 規格に従い、LCI では次のパラメータをデフォルト状態に設定する必要があります。

パラメータ	設定
TCP/IP Mode	DHCP + Auto IP Address
Dynamic DNS	Enabled
ICMP Ping	Enabled
Password for LAN configuration	LxiWebIfc

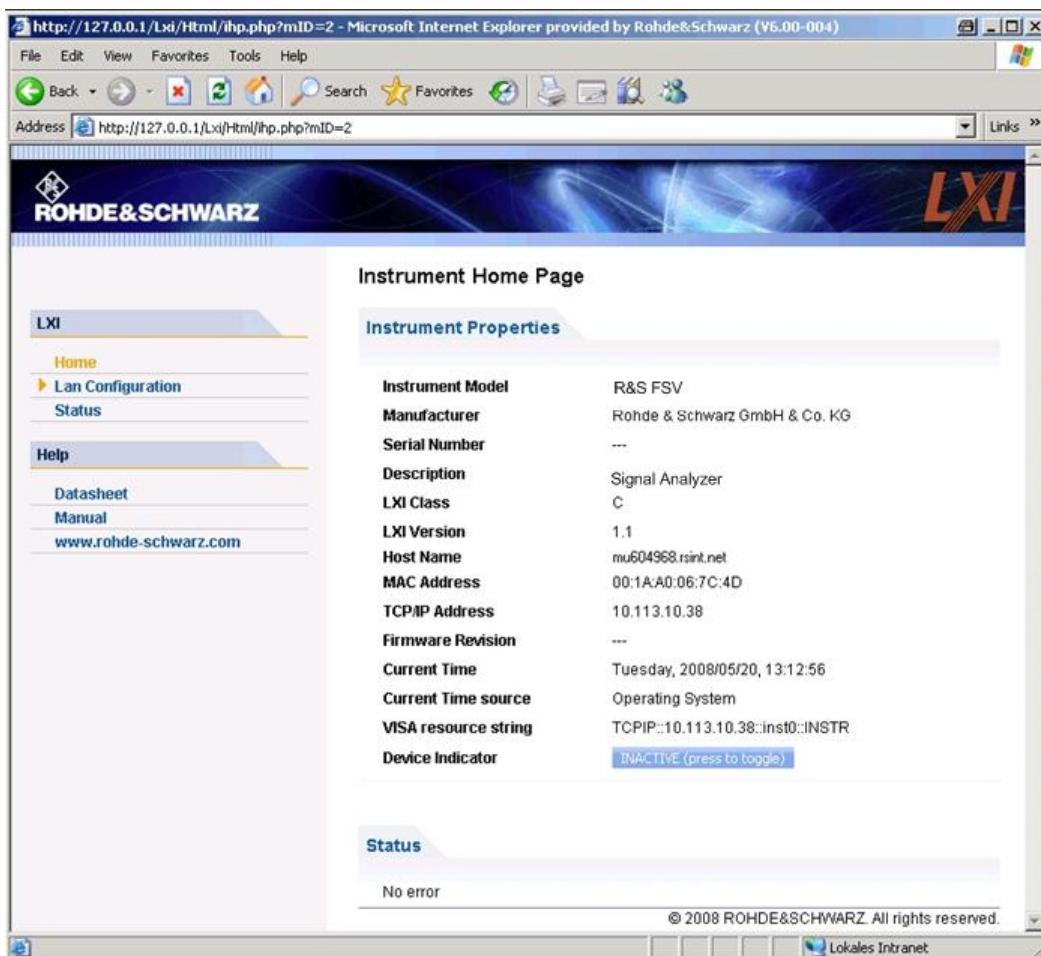
本機の LCI では、次のパラメータもリセットされます。

パラメータ	設定
Hostname	<装置固有の名前>
Description	Signal Analysis R&S FSVR
Negotiation	Auto Detect
VXI-11 Discovery	Enabled

LAN の設定は、本機の LXI ブラウザ・インタフェースを使用して行います。

3.7.2 LXI ブラウザ・インタフェース

本機の LXI ブラウザ・インタフェースは、W3C 準拠のすべてのブラウザで正常に機能します。PC 上でブラウザのアドレス欄に、本機のホスト名または IP アドレス (例: *http://10.113.10.203*) を入力すると、“Instrument Home Page” (ウェルカム画面) が開きます。



本機の名前を確認するには、SETUP > “General setup” > “Computer name” を選択します。

本機の IP アドレスを確認するには、SETUP > “General setup” > “IP address” を選択します。

“Instrument Home Page” では、VISA リソース文字列など、LXI 規格で要求されるデバイス情報が読み出し専用形式で表示されます。

- ▶ “Device Indicator” 切り替えボタンを押して、本機のステータス・バー上の LXI ステータス表示のオン／オフを切り替えます。オンにすると、ステータス・バーに LXI ロゴが点滅します。緑色の LXI ステータス記号は、LAN 接続が確立していることを示し、赤色の記号は LAN ケーブルが接続されていないことを示します。“Device Indicator” の設定はパスワードで保護されていません。



ブラウザ・インタフェース内のナビゲーション・ペインには、次のコントロール・エレメントが含まれています。

- “LAN Configuration” - [LAN の設定](#) ページが開きます。
- “LXI Glossary” - LXI 規格に関する用語集を収めたドキュメントが開きます。
- “Status” - 本機の LXI ステータスに関する情報が表示されます。

3.7.3 LAN の設定

“LAN Configuration” ウェブ・ページには、必須 LAN パラメータがすべて表示され、変更が可能になっています。

“TCP/IP Mode” 設定欄では、本機の IP アドレスの割り当て方法を指定します (3.6.2, “[IP アドレスの割り当て](#)”, (ページ 47) を参照)。手動設定モードの場合は、固定 IP アドレス、サブネット・マスク、デフォルト・ゲートウェイを使用して LAN を設定します。自動設定モードの場合は、DHCP サーバまたは Dynamic Link Local Addressing (Automatic IP) を使用して装置の IP アドレスを取得します。



LAN 設定の変更は、パスワードで保護されています。パスワードは *LxiWebIfc* です (大文字・小文字を間違えないでください)。このパスワードは、現行のファームウェアのバージョンでは変更できません。

“LAN Configuration” ページの下部に表示されているリンクを押すと、その他の関連ページが開きます。

- [Advanced LAN Configuration](#) は、LXI 規格では必須でない LAN 設定にリンクされています。
- [Ping](#) は、本機と他のデバイスとの接続を確認するための Ping ユーティリティにリンクされています。

3.7.3.1 Advanced LAN Configuration

“Advanced LAN Configuration” パラメータは、次のように使用します。

- “Negotiation” 設定欄では、異なるイーサネット速度や 2 重モードを設定できます。一般的には “Auto Detect” モードで十分です。

GPIB インタフェースの設定

- Ping ユーティリティを使用するには、“ICMP Ping” を有効にする必要があります。
- “VXI-11” は、本機を LAN 内で検出するためのプロトコルです。 LXI 規格では、LXI デバイスはこの VXI-11 を使用して検出機能を提供します。他の検出方法も使用することができます。

3.7.3.2 Ping

本機には、Ping サーバと Ping クライアントを備えています。 Ping クライアントを使用すると、本機と他のデバイスとの接続を検証することができます。 Ping コマンドは、ICMP のエコー要求パケットとエコー応答パケットを使用し、LAN 接続が機能しているかどうかを確認します。 Ping は IP ネットワークの診断やルータの故障発見に有効です。 Ping ユーティリティはパスワードで保護されていません。

LXI 準拠装置ともう 1 台のデバイスの間で Ping を起動する方法

1. “Advanced LAN Configuration” ページの “ICMP Ping” を起動します (LCI を発した後に起動されます)。
2. “Destination Address” 欄で、対象デバイスの IP アドレスを、Ping コマンドやその他のパラメータを付けずに入力します (例: *10.113.10.203*)。
3. “Submit” をクリックします。

接続が確立されていれば、エコー要求の結果が表示されます。

3.8 GPIB インタフェースの設定

GPIB インタフェースは、本機のリア・パネルに装備されています。 GPIB アドレスと ID 応答文字列は、ユーザが設定することができます。 GPIB 言語は、デフォルトで SCPI に設定されていて、本機では変更できません。

GPIB インタフェースの詳細については、[2.2.1.7, “GPIB インタフェース”](#), (ページ 22) を参照してください。

GPIB サブメニューの表示

1. 1. SETUP キーを押します。
2. 2. “General Setup” ソフトキーを押します。

3. 3. “GPIB” ソフトキーを押します。

リモート制御インターフェースのパラメータを設定するためのサブメニューが表示されます。

GPIB アドレスの設定

- ▶ “GPIB” メニューで、“GPIB Address” ソフトキーを押します。

GPIB アドレス編集用のダイアログ・ボックスが表示されます。設定範囲は 0 ~ 30 です。GPIB 言語として SCPI が選択されている場合、デフォルトのアドレスは 20 です

リモート・コマンド：

```
SYST:COMM:GPIB:ADDR 20
```

デフォルトの ID 応答文字列の設定

- ▶ “GPIB” メニューで “ID String Factory” ソフトキーを押し、*IDN? コマンドに対するデフォルトの応答を選択します。

ユーザ定義の ID 応答文字列の設定

- ▶ “GPIB” メニューで “ID String User” ソフトキーを押し、*IDN? コマンドに対するユーザ定義の応答を入力します。出力文字列の最大長は 36 文字です。

3.9 リモート・デスクトップ接続

リモート・デスクトップは、リモート・コンピュータから LAN 接続で本機にアクセスし、コントロールすることができる Windows アプリケーションです。本機の動作中に、本機の画面の内容がリモート・コンピュータに表示され、本機のすべてのアプリケーション、ファイル、およびネットワーク・リソースにリモート・デスクトップを使用してアクセスすることができます。これによって、本機のリモート制御が可能になります。



不正アクセスの危険

本機の Windows リモート・デスクトップ・アプリケーションの設定が有効になっていると (“Start > Settings > Control Panel > System” に移動)、本機が接続されているネットワークのユーザがログイン情報を知っている場合には、誰でも本機にアクセスすることができます。不必要なアクセスを防ぐため、通常は本機のリモート・デスクトップ・アプリケーションを無効にしてください。

リモート・デスクトップ接続の設定方法

1. 本機のリモート・デスクトップ・コントロールを有効にします。
2. 本機とリモート・コンピュータを LAN に接続します。3.6.1, “本機からネットワークへの接続”, (ページ 46) を参照してください。
3. リモート・コンピュータと本機のリモート・デスクトップ接続を設定します。



リモート・デスクトップ・クライアント

Windows XP の、リモート・デスクトップのクライアントは、オペレーティング・システムの標準機能として “Start > Programs > Accessories > [Communications >] Remote Desktop Connection” からアクセスできます。その他のバージョンの Windows では、リモート・デスクトップ・クライアントはアド・オンとして Microsoft 社から提供されます。

本機のリモート・デスクトップ・コントロールの有効化

1. “Windows” キーを押してオペレーティング・システムにアクセスします。
2. “Start > Settings > Control Panel” を選択してコントロール・パネルを開きます。
3. “System” を選択し、“Remote” タブに切り替えます。
4. “Remote Desktop” の “Allow users to connect remotely to this computer” オプションを有効にします。

メモ： リモート・デスクトップのアクセスとファイアウォール設定。
Windows リモート・デスクトップ・オプションを “System Properties” で有効／無効を切り替えると、関連するファイアウォールが自動的に設定されます。

リモート・デスクトップ接続

5. 必要に応じ、“Select Remote Users” をクリックし、リモート・デスクトップ経由でのアクセスを許可するユーザを選択します。この設定したユーザ・アカウントは、自動的にリモート・デスクトップにも適用されます。

リモート・コンピュータでのリモート・デスクトップ接続の設定

1. リモート・コンピュータ上で、“Start > Programs > Accessories > [Communications >] Remote Desktop Connection” を選択します。
2. 表示されたダイアログ・ボックスに、本機のコンピュータ名または IP アドレスを入力します (3.6.2, “IP アドレスの割り当て”, (ページ 47) を参照)。
3. 本機に対するユーザ ID とパスワードを入力します (3.5, “Windows オペレーティング・システム”, (ページ 43) を参照)。
4. “Connect” をクリックします。

接続の設定が完了すると、本機の画面がリモート・コンピュータ上に表示されます。

リモート・デスクトップおよびその接続の詳細については、Windows XP のヘルプを参照してください。

リモート・デスクトップに役立つ設定

リモート PC 上での操作性を向上するために、次に示すリモート・デスクトップ接続の設定が利用できます。

1. 本機への接続を設定する場合は、“Remote Desktop Connection” ダイアログ・ボックスで接続設定を行うことができます。
“Options >>” ボタンをクリックします。
ダイアログ・ボックスが拡張され、設定データが表示されます。
2. 設定を調整します。
 - “Experience” タブでの設定
 - 接続速度が最適になるように適切な接続を選択します。
 - 性能を向上させるために、“Allow the following” にリストされているオプションのうち不要なものを無効にすることができます。
 - “Local Resources” タブでの設定
 - 設定のセーブやファイルのコピーのために、本機からリモート PC のドライブにアクセスする必要がある場合、“Disk drives” オプションを有効にします。リモート PC のドライブが対応するネットワーク・ドライ

リモート・デスクトップ接続

- ブにマップされます。接続が確立すると、リモート PC のドライブに外部機器からのアクセスが可能であるというメッセージが表示されます。
- 本機からリモート PC に接続されているプリンタに、アクセスして使用するには、“Printers” オプションを有効にします。その他の設定は変更しないでください。
 - “Display” タブでの設定
 - “Remote desktop size” で、リモート PC のデスクトップに表示する本機画面のウィンドウ・サイズを設定します。
 - “Display the connection bar when in full screen mode” オプションを有効にします。
画面に表示された、本機のネットワーク・アドレスを示すバーを使用してウィンドウの縮小、最小化、クローズを行ないます。
 - “General” タブでの設定
接続設定は、再使用できるように “Save As” ボタンでセーブすることができます。

リモート・デスクトップ・コントロールの終了

リモート・デスクトップ接続は、本機またはリモート PC で終了させます。本機でリモート制御が有効になっている限り、いつでも接続を再び確立することができます。リモート・デスクトップを利用した不正アクセスについては、前記の「注意」を参照してください。

1. 接続を本機で終了させるために、本機にログオンします。
2. リモート PC で接続を終了させるには、“Remote Desktop” ウィンドウを閉じるか、または “Start > Disconnect” を選択します。

4 ファームウェアのアップデートとオプションのインストール

この章では、ファームウェアのアップデート方法と、オプションのファームウェア・パッケージの有効化方法を説明します。

4.1 ファームウェアのアップデート

ファームウェアは、次のいずれかの方法でインストールすることができます。

- USB デバイス (USB メモリなど)、GPIO、LAN を使用して本機にファイルをコピーする
- LAN ネットワーク内で “Remote Installation” 機能を使用する

本機にファイルをコピーする方法

1. SETUP キーを押します。
設定メニューが表示されます。
2. “More” ソフトキーを押します。
サイド・メニューが表示されます。
3. “Firmware Update” ソフトキーを押します。
“Firmware Update” ダイアログ・ボックスが表示されます。
4. キーパッドでドライブ名とディレクトリを入力します。
例：インストール・ファイルが USB メモリの Update ディレクトリにセーブされているとします。USB メモリを挿入すると、USB メモリはドライブ D: として検出されます。したがって、指定するパスは D:\UPDATE になります。
5. リモート・デスクトップ・アプリケーションを使用して LAN 経由でインストールする場合は、コピー元のドライブ名とディレクトリを入力します。または、“Browse” ボタンを押し、次の手順に従ってディレクトリを指定します。
 - a) 表示されたダイアログ・ボックスで、コピー元のドライブを選択します。
 - b) 選択したドライブから、インストール・ファイル (*.exe) が入っているフォルダを選択します。
 - c) “Select” ボタンを押して選択を確定し、“Firmware Update” ダイアログ・ボックスに戻ります。
6. “Execute” を押します。

インストール・プログラムの指示に従ってインストールを進めます。

7. ファームウェアのアップデートが完了すると、“UNCAL”ステータスが表示され、自己調整が必要なことが示されます。自己調整を実行します（詳細は [3.1.8, “自己調整とセルフテストの実行”](#), (ページ 30) を参照)。
リモート・コマンド : SYST:FIRM:UPD 'D:\FW_UPDATE'

Windows PC からリモート・インストールを実行する方法

この方法では、本機と Windows PC を LAN 接続する必要があります ([3.6, “ネットワーク \(LAN\) 接続の設定”](#), (ページ 45) を参照)。

1. 手元の PC で FSVSetup.exe を実行します。
2. “Remote Installation” を選択し、“Next” ボタンをクリックします。
3. インストールするパッケージを選択し、“Next” ボタンをクリックします。
4. 使用している LAN のサブネットがスキャンをし、発見したすべての装置がリスト表示されます。
メモ : FSVSetup.exe コマンドは、LAN を経由して本機と通信するため、ファイアウォールを通過しなければなりません。このコマンドをファイアウォールのルールに追加し、“Rescan” をクリックしてスキャンを再実行します。
5. アップデート対象として同時に 5 台の装置を選択することができます。
メモ : 接続した LAN にあるすべての装置がリスト表示されます。装置の選択を間違えないようにしてください。
その他のオプションを表示するには、“Options” ボタンをクリックします。
6. “Install” をクリックしてインストールを開始します。
7. ファームウェアのアップデートを有効にするために本機を再起動を求めるメッセージが表示されます。これを確定すると、自動的に本機が再起動されます。

4.2 ファームウェア・オプションの有効化

ファームウェア・オプションは、次の手順に従ってライセンス・キーを入力することで使用できるようになります。

ファームウェア・オプションの有効化の方法

1. SETUP キーを押します。

2. “More” ソフトキーを押します。
3. “Option Licenses” ソフトキーを押します。
4. “Install Option” ソフトキーを押します。
ダイアログ・ボックスが表示されます。
5. 有効化するオプションのキー番号を、キーパッドで入力します。
6. ENTER キーを押します。
オプションが認証されると、“option key valid” というメッセージが表示されます。認証に失敗した場合は、オプション・ソフトウェアはインストールされません。
7. 本機を再起動します。



期限付きライセンスの場合は、期限が近づくとメッセージ・ボックスが表示されます。“OK” ボタンを押して本機の使用することができます。期限が終了したオプションについては、確認のためのメッセージ・ボックスが表示されます。この場合、すべての機能（リモート制御を含みます）が本機を再起動するまで使用できなくなります。


また、XML ファイルを使用してオプションを有効化する方法もあります。

XML ファイルを使用してファームウェア・オプションを有効化する方法

1. SETUP キーを押します。
2. “More” ソフトキーを押します。
3. “Option Licenses” ソフトキーを押します。
4. “Install Option by XML” ソフトキーを押します。
ダイアログ・ボックスが表示されます。
5. オプション・キーが入っている XML ファイルの名前を、直接入力するか参照して指定します。
6. “Select” を押します。
オプションが認証されると、“option key valid” というメッセージが表示されます。認証に失敗した場合は、オプション・ソフトウェアはインストールされません。
7. 本機を再起動します。

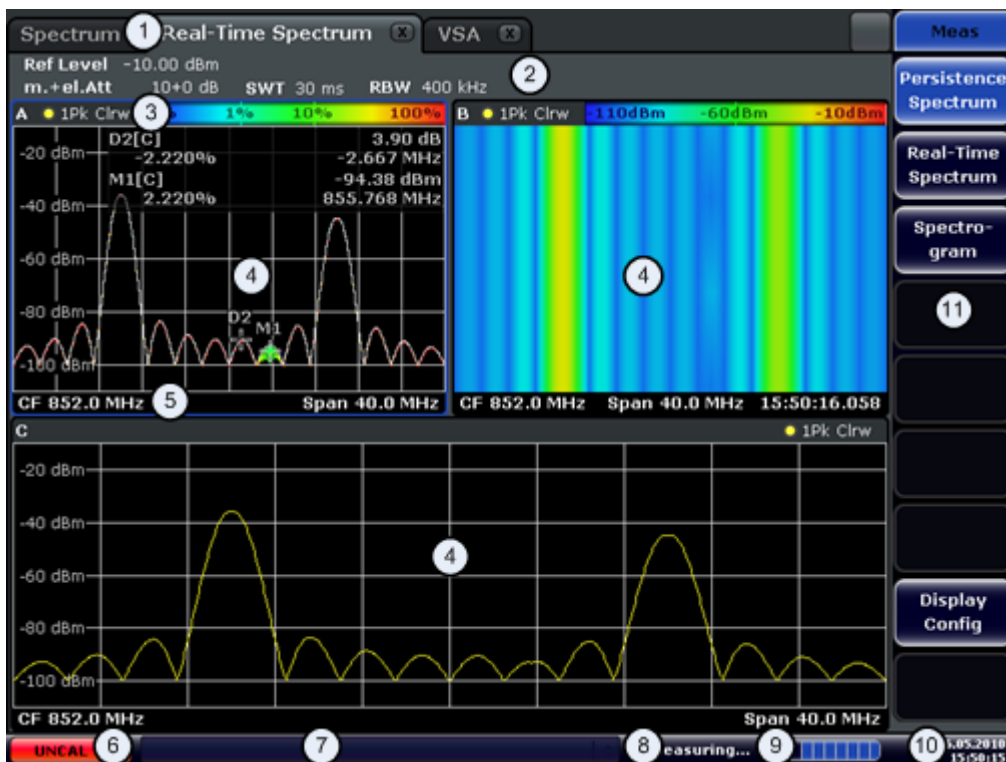
5 基本的な操作

この章では、本機の使用方法を概説します。ダイアグラム・エリアに表示される情報の内容をはじめ、フロント・パネルのキーや他のソフトキーなどを使っての操作方法、オンライン・ヘルプの使い方などを説明します。また第2章「フロント・パネルとリア・パネル」で述べたユーザ・インタフェース・エレメントについても詳しく解説します。

 5, “基本的な操作”, (ページ 62) の操作説明と用語については、このマニュアルの冒頭の説明も参照してください。

5.1 ダイアグラム・エリア内の情報

下の図は、アナライザとして動作時の測定ダイアグラムを示しています。各種の情報エリアの名称がすべて示されています。これ以降のセクションでそれぞれ詳細に説明します。



- 1 = オプション・モードのタブ
- 2 = ハードウェア情報
- 3 = 結果表示のヘッダ部。トレース情報を示します

- 4 = 結果表示部
- 5 = 結果表示部のフッタ部。一般的な測定条件の設定を示します
- 6 = キャリブレーション・ステータス
- 7 = エラー・メッセージ
- 8 = 測定ステータス情報
- 9 = 測定プログレス・バー
- 10 = 日付と時間
- 11 = ソフトキー

5.1.1 チャンネルの表示

本機は、いくつかの異なる測定のタスク（チャンネルと呼びます）を同時に実行できます（同時ではあっても非同期に実行されます）。チャンネルごとに異なるタブがスクリーンに表示されます。チャンネルから別のチャンネルに表示を切り替えるには、表示したいチャンネルのタブを押せば切り替わります。

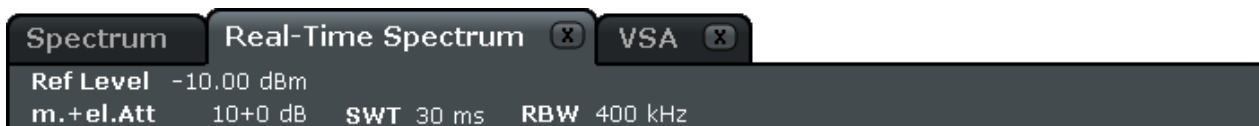


新しいチャンネルの開始

1. スクリーン上部のツールバーにあるアイコンをクリックします（ツールバーを表示する方法は 5.2.1, “ツールバー”, (ページ 71) を参照）。
2. 使用する測定モードをソフトキーで選択します。
新しいタブとチャンネルが表示されます。

5.1.2 ハードウェアの設定表示

ダイアグラム上部のチャンネル・バーに、ハードウェアの設定情報が表示されます。



無効な設定

ハードウェアの設定の隣の丸印は、自動設定ではなくユーザ定義の設定が使われていることを示しています。緑の丸印は、有効な設定であり、測定が正しいことを示しています。赤い丸印の場合は、不正な設定であり、有用な結果は得られません。

このような状況のときは、ハードウェアの設定条件の変更をお勧めします。



チャンネル・バーの設定の編集

チャンネル・バーに表示されている設定は、ディスプレイ上の設定項目に指やマウス・ポインタで触れることで簡単に編集できます。ダイアログ・ボックスが表示され、編集が可能になります。

リアルタイム・モードのときは、本機では次の設定が表示されます。

Ref Level	現在の基準レベル
m. +el. Att	現在の機械式および電子式の RF アッテネーション
SWT	現在の掃引時間
RBW	現在の分解能帯域幅

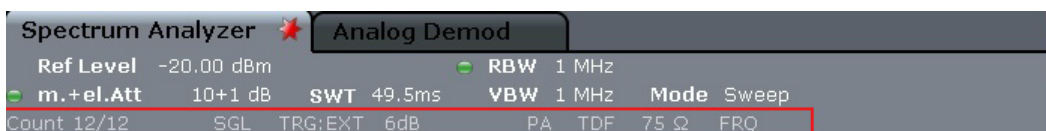
スペクトラム・モードのときは、本機では次の設定が表示されます。

Ref Level	基準レベル
m. +el. Att	設定されている機械式および電子式の RF アッテネーション
Ref Offset	基準レベルのオフセット値
SWT	設定されている掃引時間。 掃引時間が自動的に設定される値と異なっている場合は、この項目の先頭に丸印が表示されます。掃引時間が自動で設定されている値より短い場合は、丸印の色が赤くなり、また UNCAL フラグが表示されます。そのときは、掃引時間を長くしてください。
RBW	分解能帯域幅の設定値。 帯域幅が自動的に設定される値と異なっている場合は、この項目の先頭に緑の丸印が表示されます。
VBW	ビデオ帯域幅の設定値。 帯域幅が自動的に設定される値と異なっている場合は、この項目の先頭に緑の丸印が表示されます。
Compatible	装置の互換モードの表示（FSP、FSU、デフォルト。デフォルトでは表示されません）。
モード	選択された掃引モードのタイプを表示します。 <ul style="list-style-type: none"> ● 「Auto FFT」：自動的に選択された FFT 掃引モード ● 「Auto sweep」：自動的に選択された掃引モード ● 「FFT」：手動で選択された FFT 掃引モード ● 「Sweep」：手動で選択された掃引モード
Mod	アナログ復調モード（AM/FM/PM）
AQT	ACP/CCDF 測定用の収集時間（アナログ復調モードの使用時）

DBW	復調帯域幅（アナログ復調モードの使用時）

5.1.3 測定条件の設定情報

ダイアグラム上部のチャンネル情報バーには、共通のハードウェア設定が表示されますが、それに加えて測定結果に影響する装置設定も表示されます。ただしその影響は、表示される測定値に直ちに反映されるものではありません。この情報は灰色のフォントで表示され、今実行している測定に関係する場合にのみ表示されます（その他の共通の設定情報は常時表示されています）。



チャンネル・バーの設定の編集

チャンネル・バーに表示されている設定の多くは、簡単に編集ができます。編集したい項目を指やマウス・ポインタで触れると、ダイアログ・ボックスが表示され、編集が可能になります。

次の情報が、適宜表示されます。

★	タブ・ラベルにこの星印が表示されている場合、ダイアグラムはあらかじめ設定された条件に従って演算されたものであり、現在の測定結果に基づいたものではありません。つまり、あくまでも推定される結果であり、現在の設定条件の下での実際の測定値ではありません。有効なデータを取得するためには、あらためて単掃引を実行してください。
SGL	掃引が単掃引モードに設定されています。
Sweep Count	一定回数の掃引を伴う測定タスクに関する、現在の信号カウント数を示します（オペレーティング・マニュアルで説明している「Sweep」メニューにある「Sweep Count」設定を参照）。
TrgSrc	トリガ・ソースを示します（例えば、外部トリガなら EXT。オペレーティング・マニュアルの「TRIG」メニューのトリガ設定を参照）。
6dB/ RRC/CHN	掃引帯域幅に対するフィルタの種類を示します（オペレーティング・マニュアルの「BW」メニューを参照）。 スペクトラム・モードのときに表示されます。
PA	プリアンプが起動しています。
GAT	周波数掃引が「EXT TRIG/GATE IN」コネクタからの入力信号でコントロールされています。


TDF	トランスデューサ・ファクタが起動しています。
75 Ω	本機の入カインピーダンスが 75Ω に設定されています。
FRQ	周波数オフセットが 0Hz 以外に設定されています。
DC/AC	DC 又は AC の外部キャリブレーション信号が使用されています。


5.1.4 ダイアグラムに関する情報とトレースの情報

トレース情報など、ダイアグラムに関する情報は、ダイアグラムのヘッダとフッタ部分に表示されます。

ダイアグラムのヘッダに表示されるトレース情報

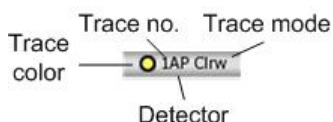
ダイアグラムの上部にあるヘッダには、次のトレース情報が表示されます。

 ヘッダにはユーザが指定したタイトルが含まれる場合もあります。5.4.7, "ダイアグラム・ヘッダへのタイトルの追加", (ページ 93) を参照してください。

 **ダイアグラム・ヘッダに表示される設定の編集**
ダイアグラム・ヘッダに表示されている設定は、どれも簡単に編集ができます。編集したい項目を指やマウス・ポインタで触れると、ダイアログ・ボックスが表示され、編集が可能になります。

Norm/NCor

補正データが使用されていないことの表示。



Trace color		ダイアグラム内のトレース表示色
Trace no.		トレース番号 (1 ~ 6)
Detector		選択されている検波器の種別を示します。
	AP	AUTOPEAK 検波器
	Pk	MAX PEAK 検波器

ダイアグラム・エリア内の情報

	Mi	MIN PEAK 検波器
	Sa	SAMPLE 検波器
	Av	AVERAGE 検波器
	Rm	RMS 検波器
	QP	QUASIPeAK 検波器
Trace Mode		使用している掃引モードを示します。
	ClrW	CLEAR/WRITE
	Max	MAX HOLD
	Min	MIN HOLD
	Avg	AVERAGE (Lin/Log/Pwr)
	View	VIEW

ダイアグラム・グリッド内のマーカ表示

最後に設定された 2 個のマーカまたはデルタ・マーカの X/Y 軸上の位置が、そのインデックスとともにダイアグラム・グリッドの中に表示されます。インデックスの後に角括弧で囲まれている数字は、マーカを設定したトレース番号を示します。例えば M1 [1] の場合は、トレース 1 上のマーカ 1 を表しています。3 個以上のマーカがあるときは、マーカ・テーブルがダイアグラムの下に表示されます。

マーカ機能情報はリアルタイム・モードでは使用できません。

マーカに対して有効になっている測定機能、およびその主な結果がある場合は、同じくマーカ情報として示されます。このときの表示には、次の略号が使用されます。

FXD	基準としての固定マーカがアクティブ
PHNoise	位相雑音測定がアクティブ
CNT	周波数カウンタがアクティブ
TRK	信号トラックがアクティブ
NOise	雑音測定がアクティブ
MDepth	AM 変調度測定がアクティブ
TOI	TOI 測定がアクティブ

マーカ・テーブル内のマーカ情報

ダイアグラム・グリッドに表示されるマーカ情報に加えて、ダイアグラムの下にマーカ・テーブルが表示される場合があります。この表には、すべてのアクティブなマーカに関し、次のような情報が示されます

Type	マーカ・タイプ : N (ノーマル)、D (デルタ)、T (テンポラリ、内部)、PWR (パワー・センサ)
Dgr	ダイアグラム番号
Trc	マーカが指定されているトレース
Stimulus	マーカの X 値
Response	マーカの Y 値
Func	アクティブなマーカ機能または測定機能
Func . Result	アクティブなマーカ機能または測定機能の結果

ダイアグラム・フッタに表示されるモード関連の情報

ダイアグラムの下に表示されるフッタには、現在のモードに応じて次のような情報が表示されます。

モード	ラベル	情報
FREQ	CF	中心周波数 (始点と終点の間)
	Span	周波数スパン
SPAN	CF (1.0 ms/)	ゼロ・スパン

ダイアグラム・フッタは一時的に非表示にすることができます。5.4.8, “ダイアグラム・フッタの削除”, (ページ 93) を参照してください。

5.1.5 装置と状態に関する情報

装置のグローバル設定、装置の状態および異常などが、ダイアグラム下部のステータス・バーに表示されます。



ステータス・バーの表示消去


測定結果の表示領域を広げたいときなどには、ステータス・バーの表示を消去することができます。

1. DISPLAY キーを押します。
 2. 「Display Settings」ダイアログ・ボックスで、「Status Bar State: Off」を選択します。
ステータス・バーが表示されなくなります。
- ステータス・バーを再表示するには、「Status Bar State: On」を選択します。

リモート・コマンド: DISP:SBAR:STAT OFF

次のような情報が表示されます。

装置の状態

	本機が外部基準で動作するように設定されています。
---	--------------------------

エラー情報

エラーや異常が検出された場合、キーワードおよびエラー・メッセージ（対応している場合）が、ステータス・バーに表示されます。



使用されているキーワードは次の通りです。

UNCAL	次のいずれかの状態が該当します。 <ul style="list-style-type: none"> ● 補正データがオフになっている。 ● 補正值がない。この状態は、例えばファームウェアのアップデートを実行した後に本機をコールド・スタートした場合などに発生します。 ● 自己調整を実行して補正データを記録してください（詳細は第 3 章「自己調整とセルフテストの実行」を参照）。
OVL	入力回路のミキサへのオーバーロード。 <ul style="list-style-type: none"> ● RF アッテネーションを増やしてください（RF 入力回路の場合）。 ● 入力レベルを下げてください（デジタル入力の場合）。
IFOVL	入力回路のミキサを通過した後の IF 信号パスのオーバーロード。 <ul style="list-style-type: none"> ● 基準レベルを上げてください。
LOUNL	本機の周波数処理ハードウェアにエラーが検出された。
NO REF	本機が外部基準に設定されたが、基準入力に信号が検出されなかった。
OVEN	OCXO 基準周波数（オプション R&S FSV-B4）がまだ正常動作温度に達していない。通常は電源投入後、数分間経過するとこの表示は消えます。

進捗状況

機器の動作状態の進捗状況がステータス・バーに表示されます。



日付と時間

本機の日付と時間の設定がステータス・バーに反映されます。



5.2 ユーザとのインタフェース

本機ではその操作に当たって外付けキーボードを使わなくとも次の手段で入力ができます。

- 5.2.1, “ツールバー”, (ページ 71)
- 5.2.2, “タッチ・スクリーン”, (ページ 72)
- 5.2.3, “オン・スクリーン・キーボード”, (ページ 73)
- 5.2.5, “ロータリ・ノブ”, (ページ 75)
- 5.2.6, “矢印キー、UNDO/REDO キー”, (ページ 75)
- 5.2.7, “ソフトキー”, (ページ 77)
- 5.2.9, “ダイアログ・ボックス”, (ページ 79)

本機の操作に必要なタスクのすべては、このユーザ・インタフェースを通して行われます。本機に特有のキーを除き、外付けキーボードから入力できるすべてのキーは Microsoft 社製キーボードに合わせてあります（矢印キー、ENTER キーなどを含むすべてのキー）。

多くの場合、タスクを動作させる方法は少なくとも 2 通り以上用意されています。

- タッチ・スクリーンを使用する方法
- フロント・パネルのキーパッド、ロータリ・ノブ、矢印キー、ポジション・キーなどを使用する方法

5.2.1 ツールバー

主な機能は、スクリーン上部のツールバーに並ぶアイコンを使って操作することができます（5, “基本的な操作”, (ページ 62) を参照）。このツールバーは、デフォルトでは表示されません。

ツールバーの表示

- ▶ 表示部のタブの右にある「ツールバー」アイコンを押して、ツールバー表示のオン/オフを切り替えます。







また、次の方法も使用できます。







1. SETUP キーを押します。
2. 「Display Setup」ソフトキーを押します。
3. 「Tool Bar State On/Off」ソフトキーを押します。
- または -
4. DISPLAY キーを押します。
5. 「Display Settings」ダイアログ・ボックスで「Tool Bar State:On」を選択します。
ツールバーがスクリーン上部に表示されます。

リモート・コマンド： DISP:TBAR:STAT ON

次に示す機能がツールバーに用意されています。

表 5-1: ツールバーにある標準アプリケーション機能

アイコン	説明
	「Select Mode」メニューを開きます（5.1.1, “チャンネルの表示”, (ページ 63) を参照）。
	既存の測定ファイルや設定ファイルを開きます。
	現在の測定ファイルをセーブします。
	現在の測定スクリーンをプリントアウトします。

アイコン	説明
	現在の測定スクリーンをファイル（スクリーンショット）としてセーブします
	直前の操作を取り消します。
	直前に取り消した操作を再度実行します。
	選択モード： カーソルを使用してズーム画面内でマーカを選択（および移動）することができます。
	ズーム・モード： ダイアグラムの中に点線の四角形を表示します。これを拡大してズーム領域を指定することができます。複数回、繰り返すことができます。
	ズーム・オフ： ダイアグラムが元のサイズで表示されます。

5.2.2 タッチ・スクリーン

タッチ・スクリーンは、指先やポインティング・デバイスなどでスクリーンの特定エレメントをタッチしたときに、それに反応して動作するスクリーンです。マウス・ポインタでクリックできるユーザ・インタフェース・エレメントは、どれもタッチ操作でも同じ反応をします。同様に、タッチ操作が可能なエレメントは、どれもマウス・ポインタで操作できます。

ある項目の操作状況に対応したヘルプを開くときなどにはマウスの右ボタンをクリックしますが、これに相当するタッチ・スクリーン操作は、スクリーンを 1 秒程度押し続けることで行います。

タッチ・スクリーン機能は、ダイアログ・ボックスでも使用できます。ダイアグラムの中で、マーカの設定や移動、線の表示などをタッチ・スクリーン機能で実行することができます。ダイアグラム上部の情報バーに表示されている測定条件の設定も、それをタッチするだけで簡単に編集できます。



タッチ・スクリーンが正しく反応しない場合は、スクリーンの整合が必要になることがあります。5, “基本的な操作”, (ページ 62) を参照してください。

タッチ・スクリーン機能の停止と起動

タッチ・スクリーンの入力機能は、停止させることもできます。例えば本機を展示品として使用するときなどは、入力機能を停止しておけば、スクリーンをタッチしても反応しないようになります。

1. スクリーン下部の DISPLAY キーを押します。

ユーザとのインタフェース

- 表示されたダイアログ・ボックスで、次のいずれかのオプションを選択します。
 - 「TOUCH SCREEN ON」: スクリーン全面でタッチ・スクリーンが機能します。
 - 「TOUCH SCREEN OFF」: スクリーン全面でタッチ・スクリーン機能が停止します。
 - 「DIAGRAM TOUCH OFF」: スクリーンのダイアグラム・エリアについてタッチ・スクリーン機能が停止します。ただし、周囲のソフトキー、ツールバー、メニューには機能しています。

リモート・コマンド: DISP:SBAR:STAT OFF

5.2.3 オン・スクリーン・キーボード

キーボードを接続しなくても、オン・スクリーン・キーボードで代用すれば本機でキーボード操作が可能になります。



スクリーン下部の「オン・スクリーン・キーボード」ファンクション・キーを使用して、オン・スクリーン・キーボードの表示オン／オフを切り替えることができます。



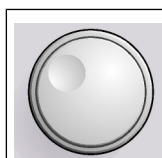
このキーを押すと、表示は次のような順番で切り替わります。

- キーボードがスクリーン上部に表示されます。
- キーボードがスクリーン下部に表示されます。
- キーボードが表示されなくなります。



ダイアログ・ボックスの中では、オン・スクリーン・キーボードの Tab キーを押すと、現在の欄から次の欄にフォーカスが移動します。

5.2.4 キーパッド



キーパッドは、英数字によるパラメータ入力に使用します。ここには次のキーが含まれています。

- 英数字キー
編集ダイアログ・ボックスに、数字や（特殊）文字を入力します。詳細については、[5.3.1, “数値パラメータの入力”](#), (ページ 80) および [5.3.2, “英数字パラメータの入力”](#), (ページ 81) を参照してください。
- 小数点
小数点「.」をカーソル位置に挿入します。

- 符号キー
数値パラメータの正負符号を切り替えます。英数字パラメータの場合は、カーソル位置にマイナス符号「-」を挿入します。
- 単位キー (GHz/-dBm, MHz/dBm, kHz/dB, Hz/dB)
これらのキーによって、入力した数値に選択した単位が付加され、入力が終了します。
dB 単位によるレベルの入力、あるいは単位の無い数値の場合には、すべての単位の倍率が「1」になります。したがってこれらのキーは、ENTER キーと同じ機能になります。英数字の入力についても同じです。
- ESC キー
編集モード以外では、すべてのダイアログ・ボックスを閉じます。編集モードのときは、編集モードを終了します。「Cancel」ボタンを持つダイアログ・ボックスの中では、「Cancel」ボタンと同じ機能になります。「Edit」ダイアログ・ボックスの中では、次のようになります。
 - データの入力が始まっていれば、元の値をそのまま有効にし、ダイアログ・ボックスを閉じます。
 - データの入力が始まっていない、または完了しているときには、ダイアログを閉じます。
- BACKSPACE キー
 - 英数字の入力が始まっている場合は、カーソルの左の 1 文字を削除します。
 - 入力欄以外にフォーカスがある場合は、直前に入力された値が取り消され、それ以前の値に復帰します。これにより、2 つの値（例えばスパン値）を交互に切り替えることができます。

- ENTER キー
 - 単位の無い入力の場合は、現在の入力を完了して確定します。
 - その他の入力の場合は、「Hz/dB. .」単位キーの代わりに ENTER キーを使用できます。
 - ダイアログ・ボックスの中で、デフォルトのボタンまたはフォーカスされているボタンを押します。
 - ダイアログ・ボックスの中で、フォーカスされているエリアに対して編集モード（使用可能な場合）を起動します。編集モードの詳細については、[5.3.3, “ダイアログ・ボックス内の移動”](#), (ページ 83) を参照してください。
 - ダイアログ・ボックスの中で、編集モードが起動している場合は、フォーカスしたエリアに対して選択したオプションを起動/停止します。

5.2.5 ロータリ・ノブ

●	<p>ロータリ・ノブには、次のような機能があります。</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 数値を入力する場合は、既定のステップ幅で本機の設定パラメータを増やしたり（時計回り）減らしたり（反時計回り）します。 ● 編集モードが起動されている場合、フォーカスしたエリアの中（例えばリスト内）で選択バーをシフトします。 ● スクリーン上のマーカ、規格線などを移動します。 ● 押されると、ENTER キーと同じように機能します。詳細については、5.3.3, “ダイアログ・ボックス内の移動”, (ページ 83) を参照してください。 ● スクロール・バーがフォーカスされ、編集モードが起動しているときは、垂直方向にスクロール・バーを動かします。 <p>編集モードの詳細については、5.3.3, “ダイアログ・ボックス内の移動”, (ページ 83) を参照してください。</p>
---	---

5.2.6 矢印キー、UNDO/REDO キー

矢印キーはナビゲーション（移動）用に使われます。UNDO/REDO キーは入力時に利用できます。



上下の矢印キー

上下の矢印キーは、次のように使用します。

- 数字編集用のダイアログ・ボックスの中で、本機のパラメータを増減します。
- リストの中で、項目間を前後にスクロールします。
- テーブル（表）の中で、選択バーを垂直方向に動かします。
- ウィンドウやダイアログ・ボックスに垂直スクロール・バーがあるときは、スクロール・バーを動かします。

左右の矢印キー

左右の矢印キーは、次のように使用します。

- 英数字編集用のダイアログ・ボックスの中で、カーソルを移動させます。
- リストの中で、項目間を前後にスクロールします。
- テーブルの中で、選択バーを水平方向に動かします。
- ウィンドウやダイアログ・ボックスに水平スクロール・バーがあるときは、スクロール・バーを動かします。

UNDO/REDO キー

- UNDO キーは、直前に実行したアクションを元に戻します。すなわち、アクションの実行前の状態に復帰します。
例えばいくつかマーカをセットし、規格線も定義してゼロ・スパンで測定をしているときに、誤って「ACP」ソフトキーを押してしまったとします。そのままだと多くの測定条件の設定などが失われますが、直ちに「UNDO」キーを押せば、ゼロ・スパンの測定も条件設定も以前の状態に戻せます。
- REDO キーは、直前に取り消されたアクションを再度実行します。すなわち、1 つ前に実行したアクションが繰り返されます。



「UNDO」機能は、「PRESET」や「RECALL」処理を実行した後では無効です。この処理の結果として、それまでのアクションの履歴が削除されるからです。

「UNDO」／「REDO」機能は、アプリケーションによっては利用できません。詳細については、リリース・ノートを参照してください。

5.2.7 ソフトキー

ソフトキーは、ソフトウェアから提供される仮想のキーです。そのため、本機のファンクション・キーから直接実行される機能よりも多くの機能を提供することができます。ソフトキーは動的となっています。すなわち、選択されたファンクション・キーに従って、スクリーン右側のリストに表示されるソフトキーが変化します（ファンクション・キー全般についての詳細は、このマニュアルの「フロント・パネルとリア・パネル」の章を参照してください）。あるファンクション・キーに対応するソフトキーのリストも、メニューと呼ばれます。各ソフトキーは、1つの特定の機能を表す場合と、複数のソフトキーを選択するためのサブメニューになっている場合があります。

ソフトキーの選択

- ▶ 個々のソフトキーの選択は、スクリーン上のそのキーを指や、マウス・ポインタ、その他のポインティング・デバイスで押して行います。



ソフトキーはスクリーンからのみ操作可能です。通常、対応するファンクション・キーはありません。

ソフトキー・メニュー間の移動

- “More” ソフトキーは、スクリーンに表示しきれないソフトキーが他にもあることを示しています。このソフトキーを押すと、もう1組のソフトキーが表示されます。
- ソフトキーの表示名に “>” 記号が含まれている場合、さらなるソフトキーを取りまとめたサブメニューとなっています。このソフトキーを押すと、サブメニューが表示されます。
- “Up” キーを押すと、1つ上のレベルのメニューに切り替わります。
- 現在の測定モードのスタート・メニューに移動するには、フロント・パネルの HOME キーを押します。

ソフトキーの動作

ソフトキーを押すと、次のいずれかの動作が実行されます。

- データを入力するためのダイアログ・ボックスを開く
- 機能のオン／オフを切り替える
- サブメニューを開く (“>” 記号付きのソフトキーの場合のみ)

色によるソフトキー・ステータスの識別

製品の出荷時には、ソフトキーはそのダイアログ・ボックスが開いているときにはオレンジ色でハイライトされるよう設定されています。ソフトキーが単なる切り替え用のものなら、青色にハイライトされます。特定の設定が原因で装置機能が一時的に使用できない場合は、関連するソフトキーが停止され、その文字色は灰色になります。

また、特定の（ファームウェア）オプションに属するソフトキーもあります。そのオプションが実装されていない機器では、対応するソフトキーは表示されません。

ソフトキーの表示消去

リモート制御の使用時などに測定結果の表示領域を大きく取れるように、ソフトキーの表示を消去できます。フロント・パネルのファンクション・キーを押すと、対応するソフトキーがしばらく表示され、ソフトキーで一定の処理を実行できるようになります。しかし一定時間の間、何にも使用されないと、自動的に消えます。入力する編集ダイアログ・ボックスは、表示されたまま残ります。

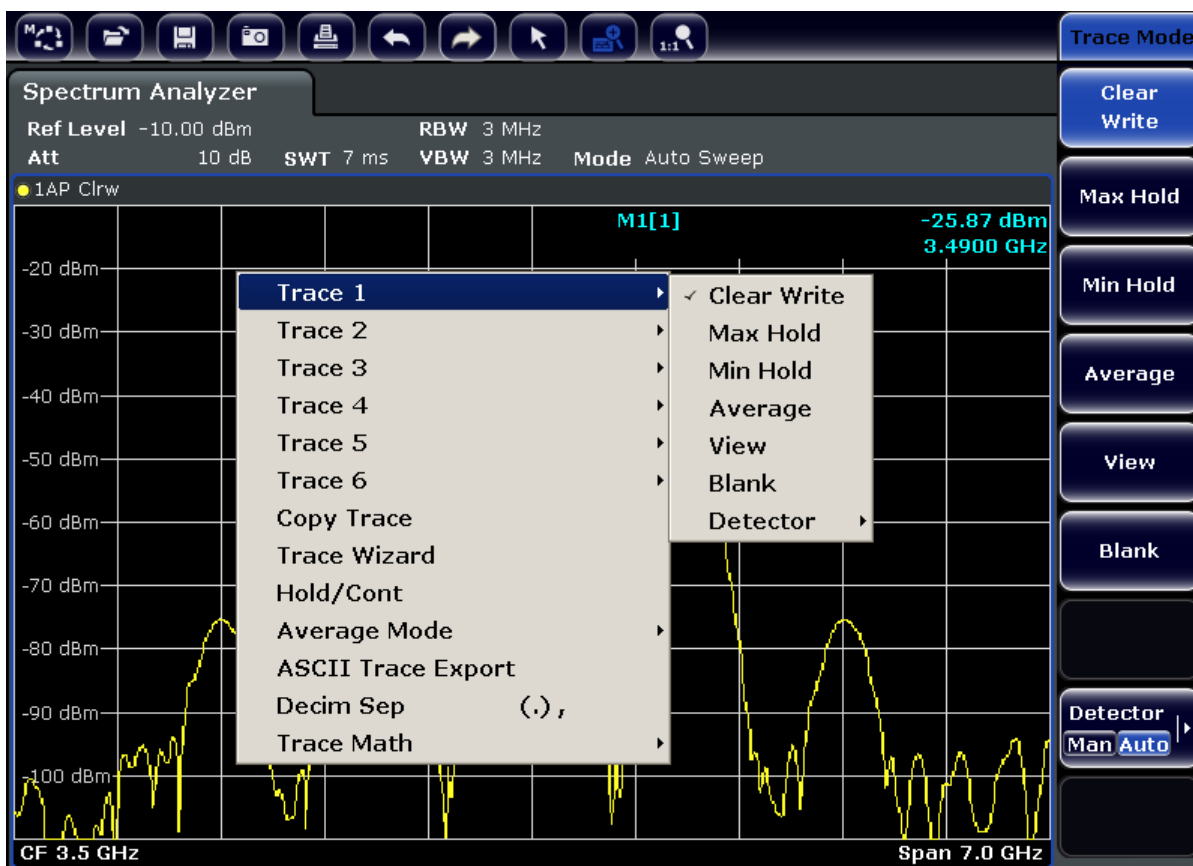
1. DISPLAY キーを押します。
2. “Display Settings” ダイアログ・ボックスで、“Softkey Bar State: Off” を選択します。
ソフトキーは表示されなくなります。

▶ ソフトキーを再度表示するには、“Softkey Bar State: On” を選択します。

リモート・コマンド： `DISP:SKEY:STAT OFF`

5.2.8 コンテキストメニュー

表示されているマーカやトレース、チャンネル・バーの情報は、コンテキストメニューを備えています。これらのエレメントを右クリック（または 1 秒間タッチ）すると、対応するソフトキーと同じ機能をまとめたメニューが表示されます。ソフトキーが非表示の場合（5.2.7, “ソフトキー”, (ページ 77) を参照）などに、このメニューが役に立ちます。



メニュー項目の右端に矢印があるときは、さらにサブメニューがあります。

- ▶ メニューを閉じるには、ESC キーを押すか、メニューの外側のどこかをクリックします。

5.2.9 ダイアログ・ボックス

本機のダイアログ・ボックスは多くの場合、数値を入力する形式になっています。文書の中でそれらは「編集ダイアログ・ボックス」と呼ばれています。単にパラメータを入力するためではなく、より複雑な構造のダイアログ・ボックスもあり、その場合は「ダイアログ・ボックス」と呼んでいます。Windows のダイアログ・ボックスの中での移動方法は、本機のダイアログ・ボックスでの方法とは異なる点もあります。詳細については、[5.3.3, “ダイアログ・ボックス内の移動”](#), (ページ 83) を参照してください。

次の図に、編集ダイアログ・ボックスの一例を示します。

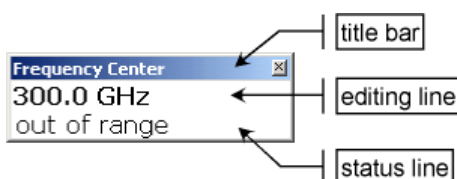


図 5-1: パラメータ入力用編集ダイアログ・ボックス

タイトル・バーには、選択したパラメータの名前が表示されています。入力は、編集行の中で行います。ダイアログ・ボックスが表示されたときに、編集行は入力できる状態になっていて、現在使用中のパラメータ値と単位が示されています。3行目が表示されている場合は、現在の入力項目に関するステータス・メッセージやエラー・メッセージが示されます。

5.3 パラメータの設定

このセクションでは、次のような内容で本機の基本的な作業方法を説明します。

- 5.3.1, “数値パラメータの入力”, (ページ 80)
- 5.3.2, “英数字パラメータの入力”, (ページ 81)
- 5.3.3, “ダイアログ・ボックス内の移動”, (ページ 83)

5.3.1 数値パラメータの入力

入力フィールドに数値のみの入力する場合、キーパッドは数値入力だけができる状態になります。

1. キーパッドを使用してパラメータ値を入力します。または、ロータリ・ノブを使用して現在使用しているパラメータ値を小さなステップ幅で変更するか、もしくは上向き／下向きの矢印キーを使用してパラメータ値を大きなステップ幅で変更します。
2. キーパッドで数値を入力した後は、対応する単位キーを押します。
入力値に単位を追加します。
3. 単位のないパラメータの場合には、ENTER キーまたは単位キーを押すと、入力した値を確定します。
編集行がハイライトされ、入力が確定します。

5.3.2 英数字パラメータの入力

入力欄に英数字の入力が必要な場合、オン・スクリーン・キーボードを使用して数字や（特殊）文字を入力することができます（5.2.3, “オン・スクリーン・キーボード”, (ページ 73) を参照）。



図 5-2: オン・スクリーン・キーボード

この代わりにキーパッドを使用することも可能です。各々の英数字キーからは、いくつかの文字および 1 つの数字が入力できます。小数点キー (.) からは特殊文字が入力され、マイナス符号キー (-) は大文字／小文字を切り替えます。各キーに割り当てられている文字や機能については、表 5-2 を参照してください。英数字パラメータの入力は、基本的に携帯電話でメールを書くときのように行います。

キーパッドからの数字と（特殊）文字の入力

1. キーを 1 回押して、最初の値を入力します。
2. そのキーで入力できるすべての文字がポップ・アップ表示されます。
3. このキーに割り当てられている別の値を選択するには、目的の値が表示されるまでキーを何度か押します。
4. キーを押すたびに、このキーで入力できる次の値が表示されます。一連の入力可能な値をすべて表示し終わると、再び最初の値から表示されてきます。一連の文字については、表 5-2 を参照してください。
5. 大文字／小文字を切り替えるには、マイナス符号キー (-) を押します。
6. 目的の値が現れたら、同じキーを再び使用するときは 2 秒待ってから再び入力しますが、別のキーを使用するときは連続して入力できます。

空白の入力

- ▶ スペース・バーを押すか、または「0」キーを押して 2 秒間待つかします。

入力の訂正

1. 矢印キーを使用して、削除したい箇所の右にカーソルを移動します。
2. BACKSPACE キーを押します。
3. カーソルの左にある文字が削除されます。
4. 訂正する新しい文字を入力します。

入力の完了確認

- ▶ ENTER キーを押すかロータリ・ノブを押します。

入力の中止

- ▶ ESC キーを押します。
設定内容はそのままに、ダイアログ・ボックスが閉じます。

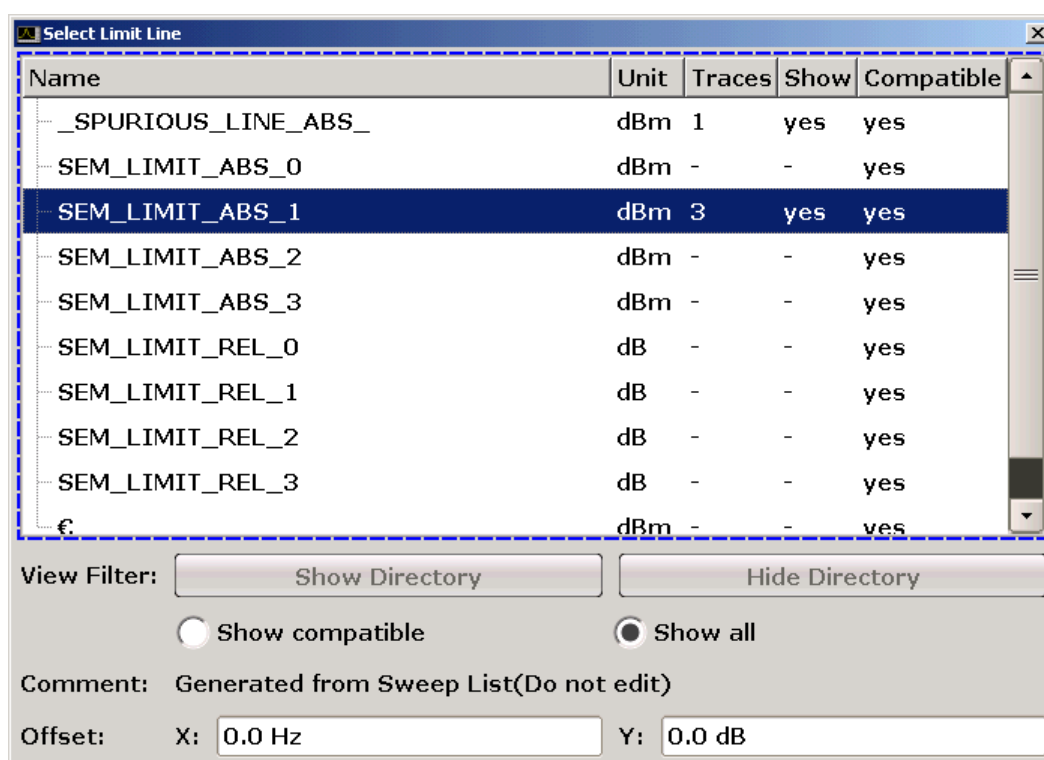
表 5-2: 英数字パラメータに対応するキーの一覧

キーの名前 (上段)	対応する一連の (特殊) 文字や数字
7	7 μ Ω ° € ¥ \$ ¢
8	A B C 8 Ä Å Ç
9	D E F 9 É
4	G H I 4
5	J K L 5
6	M N O 6 Ñ Ö
1	P Q R S 1
2	T U V 2 Ü
3	W X Y Z 3
0	<blank> 0 - @ + / ¥ < > = % &

キーの名前 (上段)	対応する一連の(特殊)文字や数字
.	. * : _ , ; " ' ? () #
-	<toggles between capital and small letters>

5.3.3 ダイアログ・ボックス内の移動

ダイアログ・ボックスによっては、パラメータの入力に使用するだけでなく、構造も複雑になっているものがあります。次の図に例を示します。



フォーカスの変更

グラフィカル・ユーザ・インタフェース上のフォーカスは、スクリーン上のエレメントを押したり、ロータリ・ノブを使用して移動します。フォーカスされている領域は、青色の枠で示されています（図 5-3 を参照）。この領域がオプションのリストやテーブルなどのように複数のエレメントで構成されている場合は、その内容を変更するにはまず編集モードに切り替える必要があります。編集モードのフォーカス領域は、青色の破線の枠で示されます（図 5-4 を参照）。

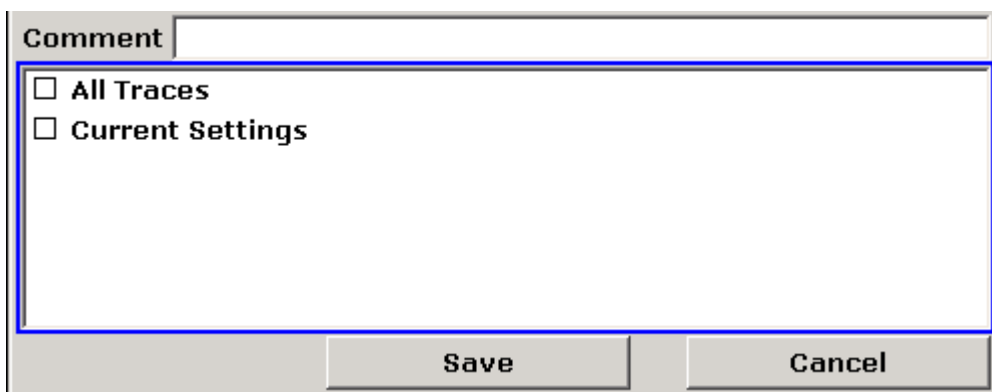


図 5-3: フォーカス領域

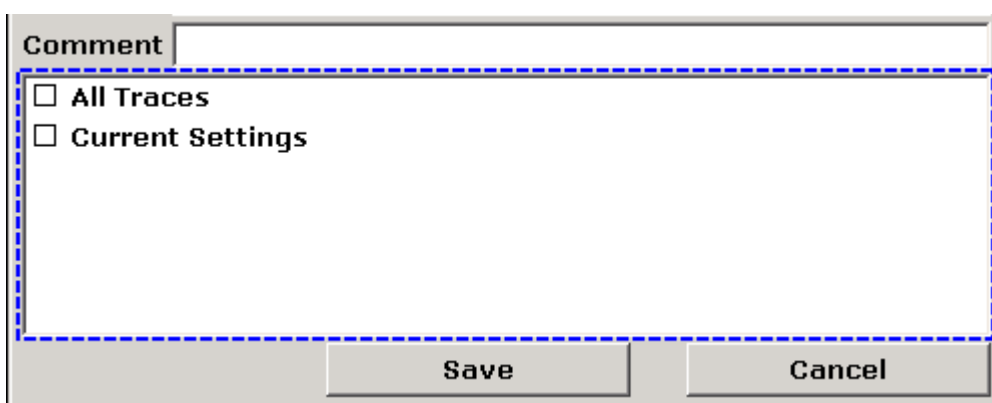


図 5-4: 編集モードのフォーカス領域



編集モード

タッチ・スクリーンからフォーカス領域に変更をかけるときは、すべてのフォーカス領域が自動的に編集モードに切り替わります（対応している場合）。自動的に切り替わらない場合は、手動で編集モードに切り替えなければなりません。

編集モードへの切り替え

1. ENTER キーを押します。
2. 編集モードを終了するには、ESC キーを押します。

ダイアログ・ボックス内の操作

- 英数字パラメータの編集には、キーパッドやオン・スクリーン・キーボードを使用します。詳細については、[5.3.1](#), “[数値パラメータの入力](#)”,

パラメータの設定

(ページ 80) および 5.3.2, “英数字パラメータの入力”, (ページ 81) を参照してください。 入力欄で編集をする場合は、タイプを始めると自動的に編集モードが起動します。

- フォーカスを次のインタフェース・エレメント（欄、オプション、リストなど）に移すには、そのエレメントをスクリーン上で押すかロータリ・ノブを回して選択します。
- オプションを選択するまたは選択解除するには、スクリーン上のそのオプションを押します。
また、次の方法も使用できます。
 - フォーカス領域が複数のオプションで構成され、編集モードが起動していない場合は、編集モードに切り替えます。
 - オプションのリストの中を矢印キーやロータリ・ノブを使ってスクロールしていき、起動または停止したい目的のオプションをハイライトします。
 - ロータリ・ノブまたは ENTER キーを押して、選択を確定します。
オプションが（そのときの設定状態に応じて）起動または停止されます。
 - 編集モードから抜け出るには、ESC キーを押します。
- ドロップダウン・リストを開くには、リスト横の矢印を押します。 または、ENTER キーもしくはロータリ・ノブを押します。 このとき開いたドロップダウン・リストは、編集モードになっています。
- ドロップダウン・リストを開かずに入力を選択するには、矢印キーを使ってリストの中から探し出して選択します。
- リスト項目を選択するには、スクリーン上でその項目を押します。
また、次の方法も使用できます。
 - 編集モードに入っていないければ、編集モードに切り替えます。
 - 矢印キーやロータリ・ノブを使用し、選択したいリスト項目がハイライトされるまでリストの中をスクロールします。
 - ロータリ・ノブまたは ENTER キーを押して、選択を確定します。
ドロップダウン・リストが開いていれば、自動的に閉じます。
- タブから次のタブに切り替えるには、スクリーン上のそのタブを押します。
- ダイアログ・ボックス内のボタンを押すには、スクリーン上のそのボタンを押します。
また、次の方法も使用できます。
 - ロータリ・ノブを使用して目的のボタンにフォーカスを当てます。
 - ロータリ・ノブまたは ENTER キーを押して、選択を確定します。
- ダイアログ・ボックスを閉じて変更内容を適用するには、「OK」ボタンを押します。

- 変更内容を適用しないでダイアログ・ボックスを閉じるには、ESC キーまたは「Cancel」ボタンを押します。


Windows のダイアログ・ボックスと本機のダイアログ・ボックスの違い

プリンタをインストールするときなどには、Windows 標準のダイアログ・ボックスを使用しますが、このときのダイアログ・ボックス内の移動方法は Windows と本機のアプリケーションとは異なります。主な相違点などは次の通りです。


- ロータリ・ノブとファンクション・キーは機能しないため、使用できません。代わりにタッチ・スクリーンを使用してください。

5.4 表示の変更

5.4.1 フォーカスの変更

	<p>スクリーン上に表示されているダイアグラムやテーブルの間でフォーカスを自由に移動することができます。それには、フロント・パネルの「change focus」ファンクション・キーを押します。フォーカスがダイアグラムから最初のテーブルに、またその次のテーブルにと移動し、最後には元の位置に戻ります。</p>
---	---

5.4.2 分割表示と最大表示との切り替え

	<p>測定モードによっては、マーカや測定結果のテーブルが測定したダイアグラムの下部に表示されます。ダイアグラムやテーブルを最大化して、詳細まで確認する場合に使用します。</p>
---	--

フロント・パネルの SPLIT/MAXIMIZE キーを押して、全画面表示と最大表示を切り替えます。最大表示では、フォーカスされているテーブルまたはダイアグラムが最大に表示されます。分割表示では、ダイアグラムやその他のテーブルが、1つの画面内に表示されます。

リモート・コマンド : DISP:WIND:SIZE
LARG

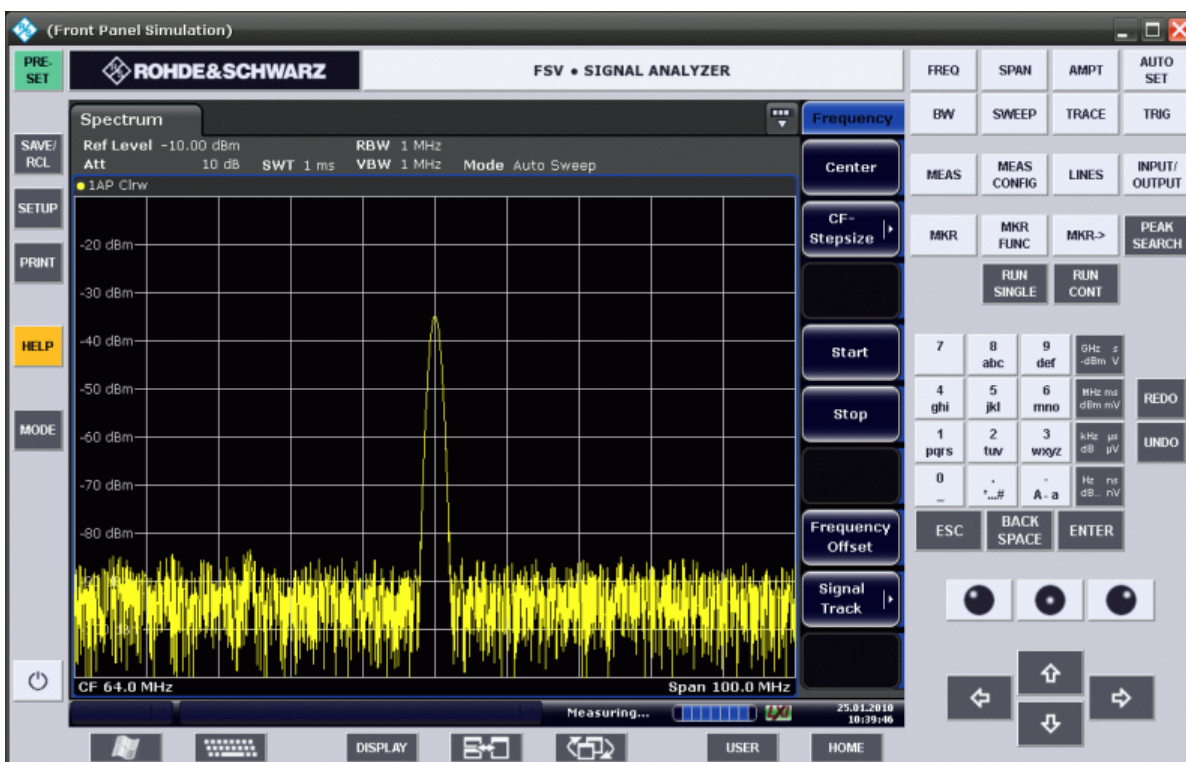
5.4.3 ソフト・フロントパネルとミニ・ソフト・フロントパネルの表示

本機を外部コンピュータからのリモート制御や外部モニタを接続して操作するとき、フロント・パネルのキーパッドやキーを使わずに、設定を行なう機能が「ソフト・フロントパネル」です。本機のフロント・パネル（外部機器との接続用コネクタ以外のすべて）をシミュレートします。通常の画面表示と拡張表示を切り替えることができます。拡張表示では、本機のキーやその他の設定エレメントが画面上にシミュレートされます。

ソフト・フロントパネルは使用したいが、測定結果の表示領域を小さくしたくない場合には、ミニ・ソフト・フロントパネルが利用できます。これは、主なファンクション・ハードキーのみで構成される別ウィンドウを表示領域に表示します。このウィンドウは、キーを押してクローズすることも、オープンのままにしておくこともできます。

ソフト・フロントパネル表示への切り替え方法

1. SETUP キーを押します。
2. 「General Setup」ソフトキーを押します。
3. 「More」ソフトキーを押します。
4. 「Soft Frontpanel」ソフトキーを押します。
また、次の方法もあります。
5. DISPLAY キーを押します。
6. 「Display Settings」ダイアログ・ボックスで、「SoftFrontPanel State: On」を選択します。
拡張表示が画面に表示されます。



フロントパネル表示は F6 キーでオン/オフを切り替えられます。

リモート・コマンド : SYST:DISP:FPAN:STAT
ON

ソフト・フロントパネルの操作方法

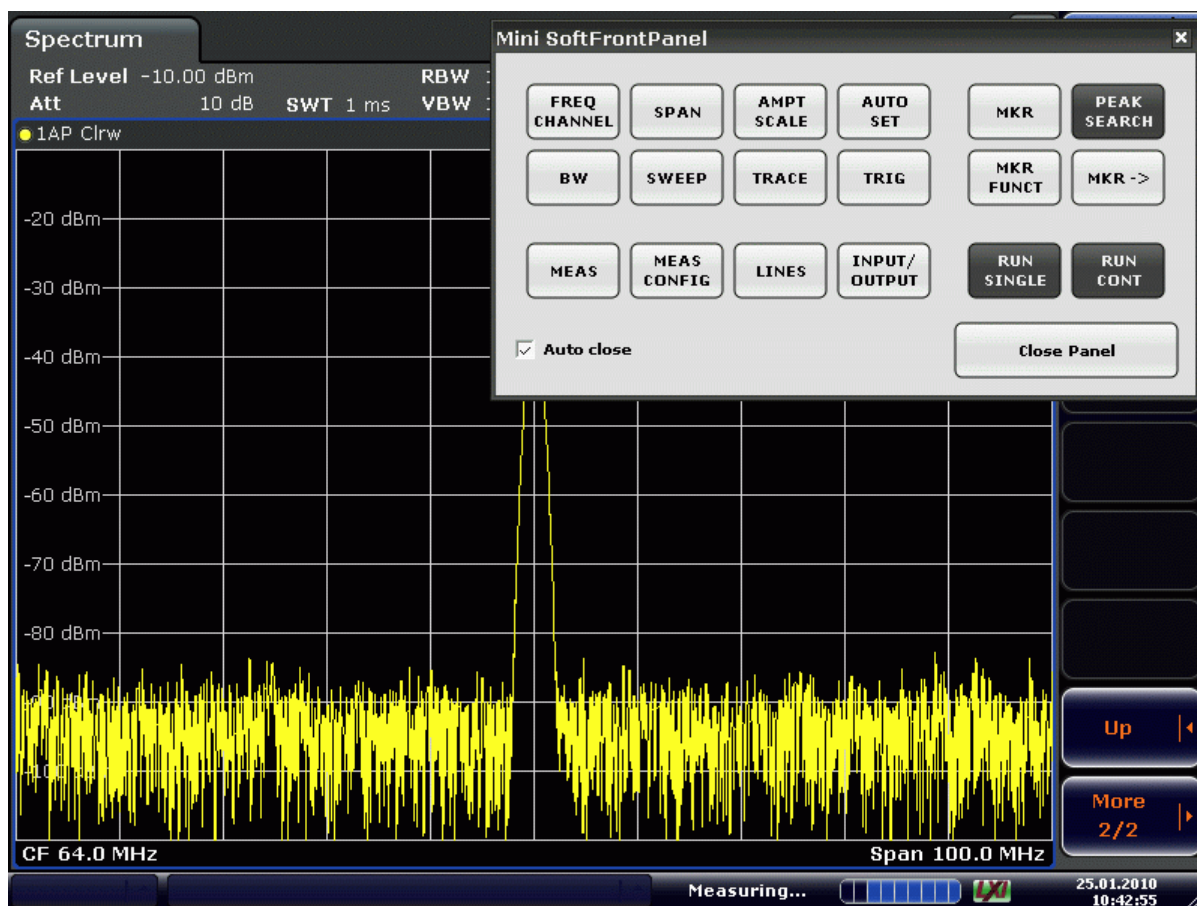
ソフト・フロントパネルの基本的な操作方法是通常の操作と同じです。キーを機能させるには、そのキーをタッチ・スクリーン上で押すか、マウス・ポインタでクリックします。ロータリ・ノブの使用をシミュレートするには、キーパッドと矢印キーの間に表示された追加キーを使って行います。

アイコン	機能
	左回転
	Enter
	右回転

ミニ・ソフト・フロントパネル表示への切り替え方法

1. DISPLAY キーを押します。

- 「Display Settings」ダイアログ・ボックスで、「Mini SoftFrontPanel State: On」を選択します。
「Mini SoftFrontPanel」ウィンドウが画面に表示されます。これは画面上のどこへでも移動できます。




オート・クローズ・オプション

デフォルトでは、「Auto close」オプションが有効のため、キーを選択するとミニ・ソフト・フロントパネルのウィンドウが自動的にクローズします。この設定は、フロント・パネルのファンクション・キーを1つだけ押せばよいときには便利な機能です。

このウィンドウを開いたままにしておきたい場合は、「Auto close」オプションを停止します。また、「Close Panel」をクリックして運動を手動でクローズすることもできます。

5.4.4 表示領域の拡大

	外部モニタまたは 5.4.3, “ソフト・フロントパネルとミニ・ソフト・フロントパネルの表示”, (ページ 87) を使用しているときは、画面の表示領域を拡大することができます。それには、ウィンドウの右下角をドラッグして必要なサイズに拡大します。標準サイズときには、画面の右下隅に小さいアイコンが表示されています。
---	---

5.4.5 ツールバーの表示

標準的なファイルの機能は、画面上部のツールバー上のアイコンを使用して実行できます (5.2.1, “ツールバー”, (ページ 71) を参照)。このツールバーは、デフォルトでは表示されません。

ツールバーの表示方法

1. DISPLAY キーを押します。
2. 「Select Tool Bar State」で「On」を選択します。
 - a) または、
 1. SETUP キーを押します。
 2. 「Display Setup」ソフトキーを押します。
 3. 「Tool Bar State On/Off」ソフトキーを押します。
ツールバーが画面上部に表示されます。

5.4.6 ダイアグラムのズーム・イン

ダイアグラムをズーム・インして、測定結果を詳細に観察することができます。タッチ・スクリーンまたはマウス・ポインタを使用し、拡大する領域を簡単に設定できます。




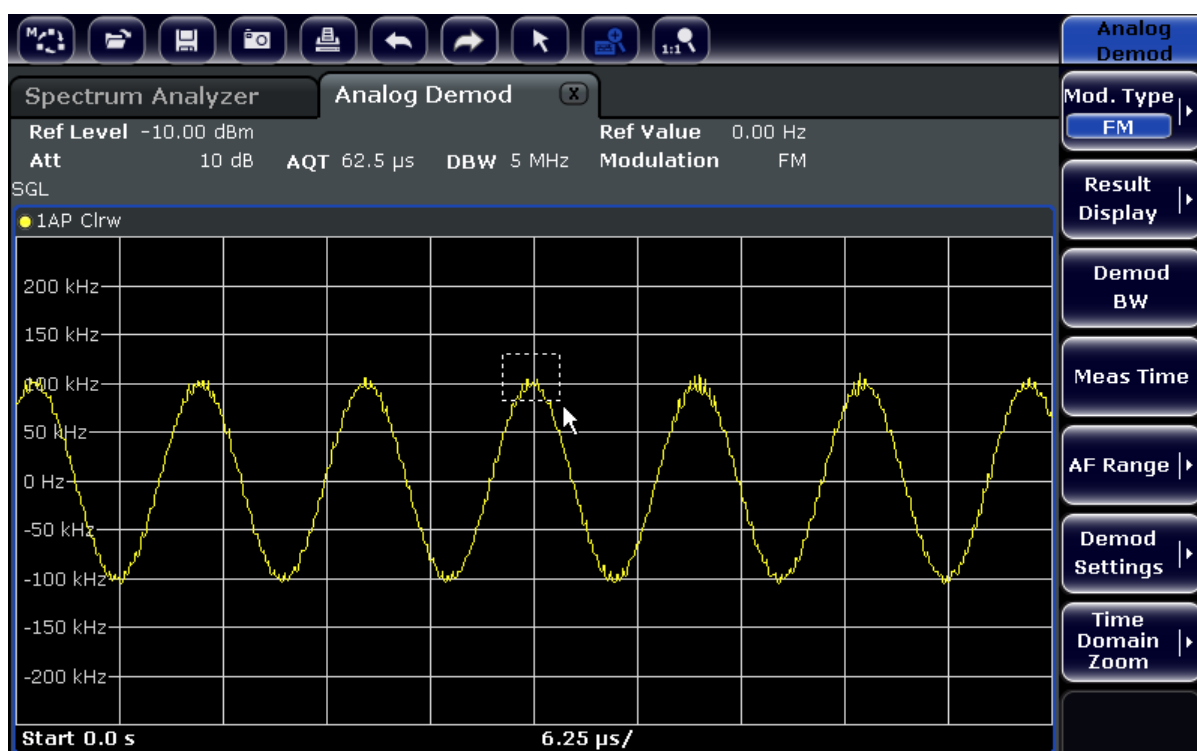
ズームと掃引ポイント数の関係

ズーム機能は、単に見え方を操作するツールで、掃引ポイント数などの測定条件を変更するものではありません。

ズームをかける前に掃引ポイント数を増やしてください。そうしないと、効果が得られない場合があります（オペレーティング・マニュアルおよびオンライン・ヘルプで説明している「Sweep Points」ソフトキーを参照してください）。

ダイアグラムのズーム・インの方法

1. [5.4.5, “ツールバーの表示”](#), (ページ 90) に従ってツールバーを表示します。
2.  ツールバーの中にある「Zoom On」アイコンをクリックします。点線の長方形がダイアグラムに表示されます。



3. この長方形の右下角をタッチ・スクリーンまたはマウス・ポインタの操作でドラッグし、拡大する領域を指定します。
4. 必要に応じてこの操作を繰り返すと、ダイアグラムがさらに拡大します。



ズーム表示内のスクロール

ダイアグラムの右辺と下辺にあるスクロール・バーを使用してダイアグラム領域をスクロールすれば、ダイアグラム全体を観察することができます。



ダイアグラムの中で選択モードに戻るには

ズーム・モード時には、画面にタッチするとズーム領域が変更されます。しかしマーカーやトレースを移動させるときは、選択モードに戻る必要があります。



- ▶ ツールバーの「Selection mode」アイコンをクリックします。

元の表示に戻るには



- ▶ ツールバーの「Zoom Off」アイコンをクリックします。
点線の長方形がダイアグラムに表示されます。

リモート・コマンド：

1. ズーム・モードの起動
DISP:ZOOM ON
2. ズーム領域の設定
DISP:ZOOM:AREA 5,30,20,100

3. 概要ウィンドウの表示消去

DISP:ZOOM:OVER OFF

5.4.7 ダイアグラム・ヘッダへのタイトルの追加

ダイアグラム・ヘッダのトレース情報にタイトルを追加できます。

1. SETUP キーを押します。
2. 「Display Setup」ソフトキーを押します。
3. 「Screen Title On/Off」ソフトキーを押します。
ダイアログ・ボックスが表示されます。
4. タイトルを入力し、「ENTER」を押します。
ダイアグラム・ヘッダの先頭にタイトルが表示されます。

5.4.8 ダイアグラム・フッタの削除

測定によっては、ダイアグラム・フッタにその測定に固有の情報が表示されます (5.1.4, “[ダイアグラムに関する情報とトレースの情報](#)”, (ページ 66) を参照)。このフッタは必要に応じて非表示にすることができます。

1. SETUP キーを押します。
2. 「Display Setup」ソフトキーを押します。
3. 「Annotation On/Off」ソフトキーを押します。
ダイアグラム下部のフッタの表示／非表示が切り替わります。

5.4.9 テーマの選択

画面表示のテーマを選択することができます。テーマとは、画面に表示される各種のキーやエレメントなどの色をセットとして定義したものです。デフォルトのテーマは「BlueOcean」に設定されています。

テーマの選択

1. SETUP キーを押します。
2. 「Display Setup」ソフトキーを押します。

3. 「More」ソフトキーを押します。
4. 「Theme Selection」ソフトキーを押します。利用可能なテーマの一覧が表示されます。
5. 一覧から希望するテーマを選択します。
選択したテーマに従って、画面表示が変更されます。

リモート・コマンド : DISPLAY:THEME:SElect

5.4.10 日付と時間の表示と設定

ダイアグラム・フッタにある日付と時間の表示／非表示を切り替えることができます。デフォルトでは表示されています。また表示形式として、欧州式か米国式を選択できます。

日付と時間の表示をオフにする方法

1. SETUP キーを押します。
2. 「Display Setup」ソフトキーを押します。
3. 「Time+Date」ソフトキーを押して「Off」にします。

表示形式の変更

1. SETUP キーを押します。
2. 「Display Setup」ソフトキーを押します。
3. 「Time+Date Format」ソフトキーを押し、希望する表示形式を選択します。

日付と時間の設定

日付と時間を設定するには、ダイアグラム・フッタに表示されている日付と時間の表示をクリックします。Windows 標準の「日付と時間のプロパティ」ダイアログが表示され、日付と時間を設定することができます。

5.4.11 表示更新頻度の変更

リモート制御時のデータ転送速度の低下など、性能が思わしくないときには、スクリーン表示の更新頻度を下げると効果がある場合があります。

表示更新頻度を下げるには

1. DISPLAY キーを押します。
“Display Settings” ダイアログ・ボックスが開きます。
2. “Display Update Rate” の下から “Slow” を選択します。
表示の更新頻度が低くなり、測定性能が向上します。データ転送の問題が解消されたら、同じ方法で更新頻度を “Fast” に戻すことができます。

6 基本的な測定例

この章では、基本的な測定例を紹介しながら本機の操作方法を説明します。高度な測定例については、CD に含まれているオペレーティング・マニュアルの「高度な測定例」の章を参照してください。オペレーティング・マニュアルには、次の測定例が説明してあります。

- 高調波の高感度測定
- 適切な分解能帯域幅の選択による信号の分離
- 相互変調の測定
- 雑音レベルに近い信号の測定
- 雑音パワー密度の測定
- 送信チャンネル内の雑音パワーの測定
- 位相雑音の測定
- チャンネル・パワーと隣接チャンネル・パワーの測定

基本的な操作の手順、たとえばメニューの選択やパラメータの設定については、5, “基本的な操作”, (ページ 62) を参照してください。

6.1 リアルタイム・アナライザの使用

この章では、リアルタイム・アナライザの機能について、測定例を用いて説明していきます。残光モード、スペクトログラム、周波数マスクトリガの各機能を紹介します。

測定例として、パルス信号の測定を行います。リアルタイム・アナライザの特徴の理解に役立ちます。

この例では、次の試験システムをベースにしています。

シグナル・ジェネレータの設定 (例 : R&S SMA100A)

- 中心周波数 : 1 GHz
- レベル : 0 dBm
- パルス設定 :
 - パルス周期 : 10 ms
 - パルス幅 : 100 μ s

- パルス遅延 : 10 ns
- デューティ・サイクル : 1%
- パルス・モード : シングル
- トリガ・モード : オート

リアルタイム・アナライザ R&S FSVR

- 中心周波数 : 1 GHz
- 基準レベル : 0 dBm
- スパン : 40 MHz
- 掃引時間 100 μ s
- 掃引モード : 連続掃引

6.1.1 パルス信号の測定

残光モードは、周波数の 2 次元ヒストグラムです。表示ピクセルごとの周波数とレベルの組み合わせの確率（ピクセルあたりのヒット数）を表すものです。

1. PRESET キーを押します。
本機のすべての設定がデフォルト値にリセットされます。
2. MODE キーを押します。
3. “Realtime Spectrum” ソフトキーを押します。
4. 設定値を適用します。
本機がリアルタイム・モードに切り替わります。
デフォルトでは、残光モードの結果表示がアクティブです。この表示には、次のような結果が示されます。

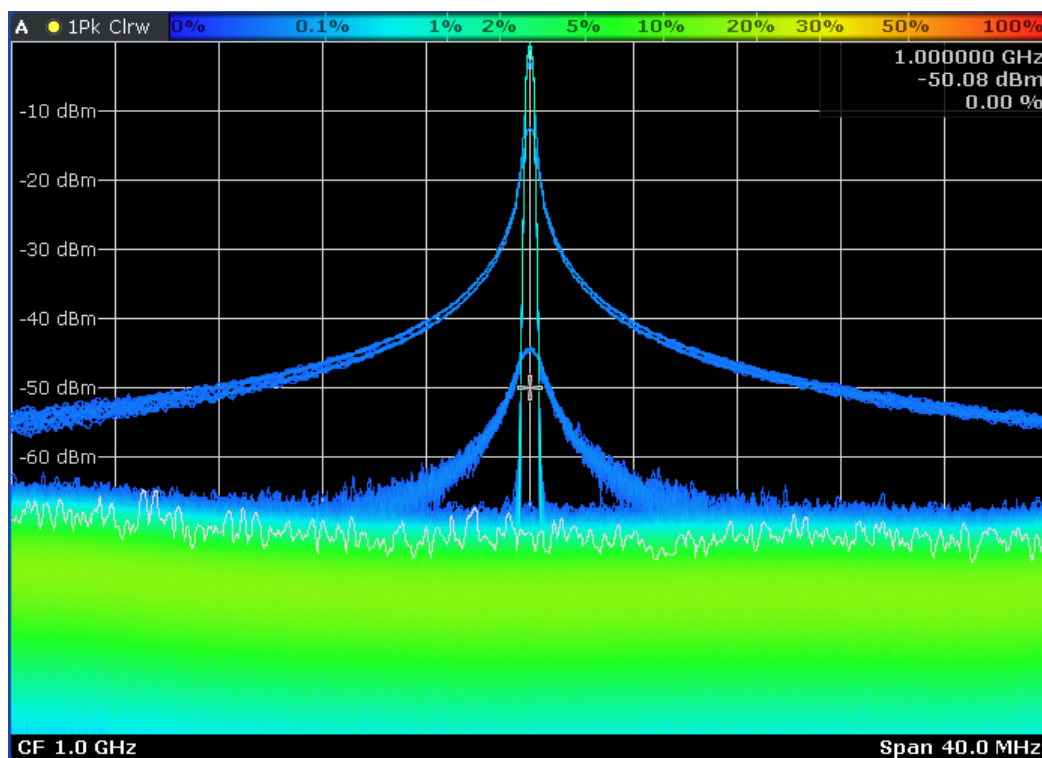


図 6-1: デフォルト状態の残光モード表示

上の図で、パルス信号のスロープが青色で示されています（広い部分）。ダイアグラム中心に見える信号の狭い部分は、パルスの内側部分です。デフォルトの色分けで青色は、信号とパルスが発生する統計的割合（確率）が低いことを意味します。

これに対し、ノイズ・フロアは緑色で示されます。つまり、これらのダイアグラム座標の確立が高いことを意味しています。

現在の表示では、色分布を最適化し、結果表示からスロープを削除することができます。

5. “Color Mapping” ソフトキーを押します。
 “Color Mapping” ダイアログが開きます。
 “Color Mapping” ダイアログ・ボックスで、スペクトラムの色設定を自由に調整することができます。デフォルトの状態では、ダイアログ・ボックスは次のように表示されます。

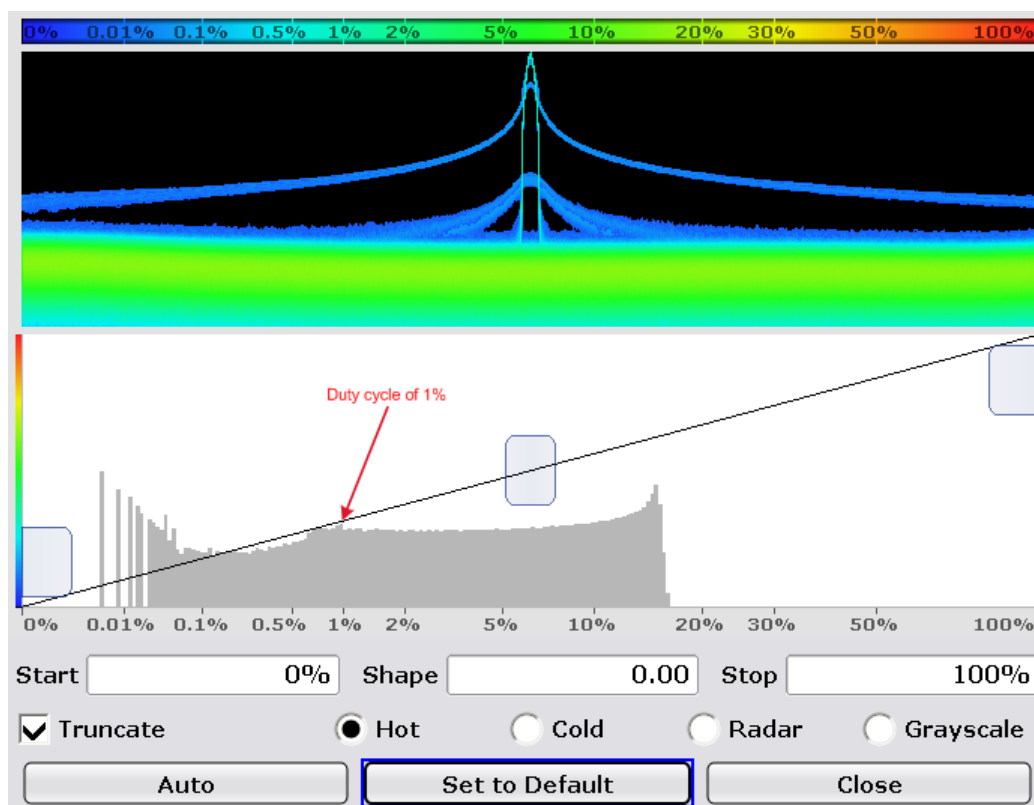


図 6-2: デフォルト設定時のカラー・マッピング・ダイアログ・ボックス

デフォルトのカラー・マップでは、20% 以上の割合が生じなくても、全範囲の割合（0% ~ 100%）を使用します。スペクトラムのプレビュー・ウィンドウの下にあるヒストグラムは、現在測定されている割合の分布を示しています。

- 左右にあるスライダを動かして値の範囲を絞り込み、実際に発生する割合だけがカラー・マップで使用されるようにします。
パルス信号の場合、最適の割合の範囲は約 0.1% から約 20% ということになります。

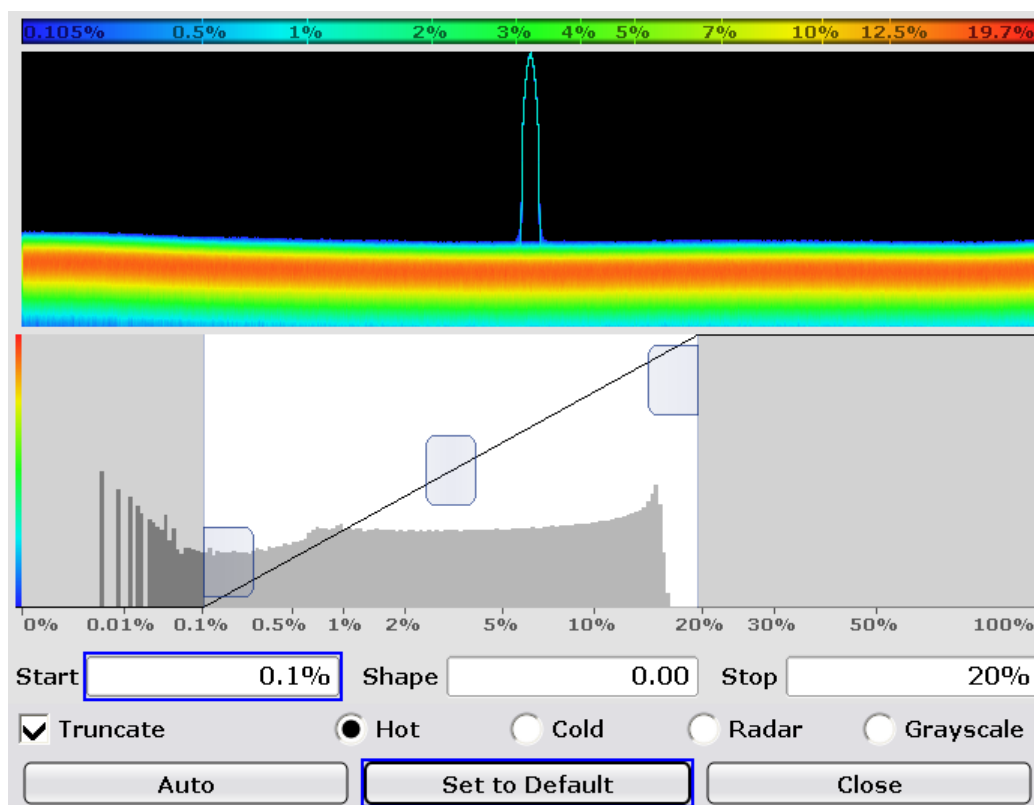


図 6-3: 開始点の割合と停止点の割合を調整したカラー・マップ・ダイアログ

これで、0.1% 以下の割合部分は、黒く表示されるようになりました。20% 以上の割合部分の表示色は赤色になります。0.1% ~ 20% の間で、色の範囲は均等に分布しています。

なお、デフォルトの“Hot”方式ではなく別のカラー方式を選択し、カラー曲線の形状を調整することもできます。詳細については、本機のオペレーティング・マニュアルを参照してください。

7. “Close” ボタンを押して、結果表示に戻ります。

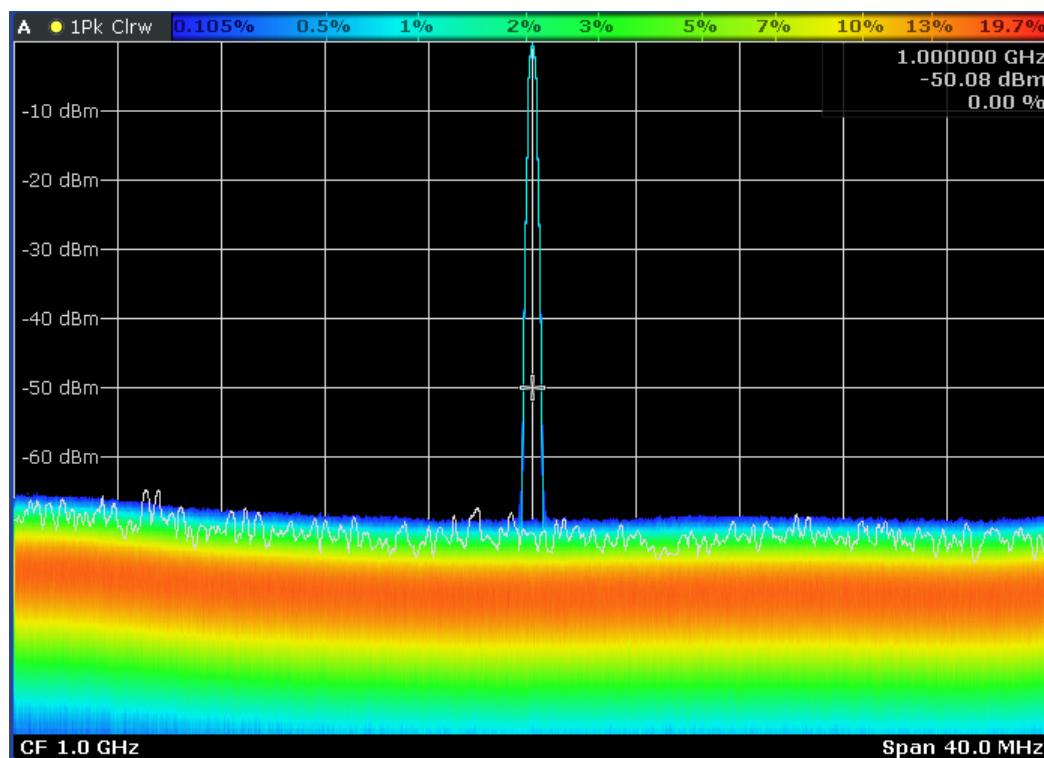



図 6-4: カラー・マップ調整後のスペクトラム

カラー・マップを手動で調整した後、パルス・スロープの表示が消えます。色分布の表示が、パルスのデューティ・サイクル（1%）に合わせて最適化されています。

6.1.2 パルス周期とパルス繰り返し率の測定

パルスの周期と繰り返し率の 2 つは、パルス信号に特有のパラメータです。しかし、これらをスペクトラムの結果表示から求めることは不可能です。

1. “Meas” ソフトキーを押します。
2. “Real-Time Spectrum” ソフトキーを押します。
リアルタイム・スペクトラムの結果表示が起動します。
3. 必ず前と同じ設定を使用してください。

4.  キーを押します。

本機が分割スクリーン・モードに切り替わります。

上側のスクリーン（スクリーン A）が、リアルタイム・スペクトラムの結果表示になります。下側のスクリーン（スクリーン B）は、スペクトログラムの結果表示になります。

リアルタイム・アナライザの使用

デフォルトでは、本機は連続掃引モードであるため、直ちにスペクトログラムを実行します。

“Display Config” ソフトキーおよび対応するダイアログ・ボックスを使用し、スクリーン・レイアウトを設定することもできます。

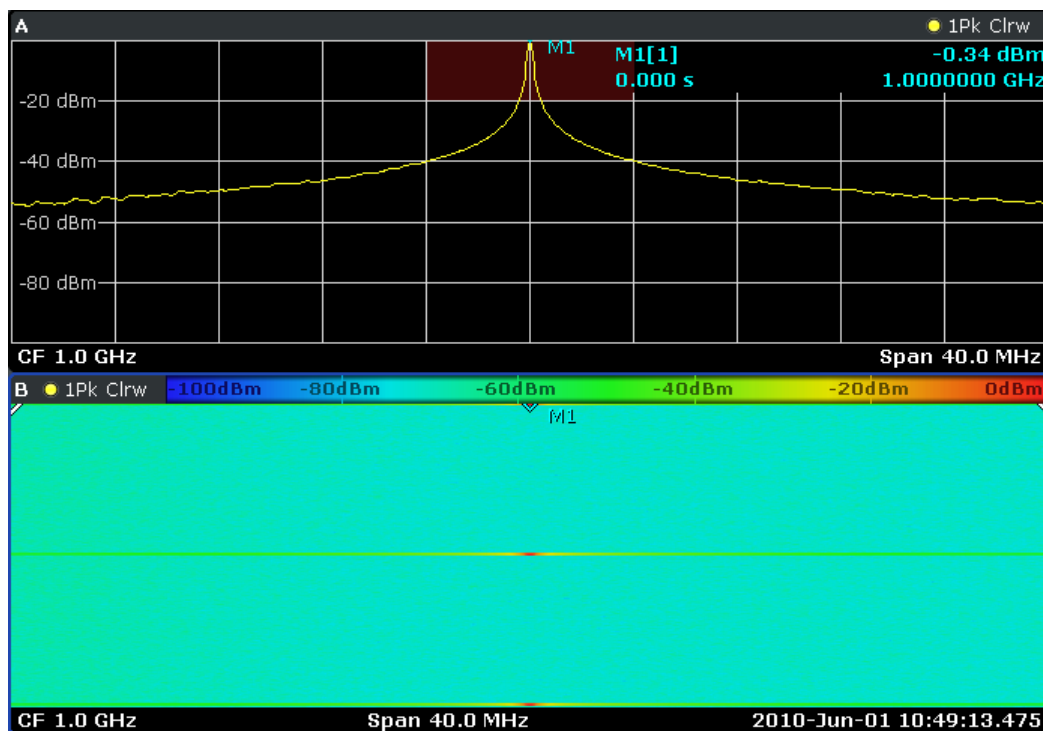


図 6-5: デフォルト状態でリアルタイム・スペクトラムにスペクトログラムを組み合わせた状態

パルスを受信すると、スペクトログラム上で色付きの直線としてパルスが表示されます。その他の時間では、ノイズ・フロアだけが測定されているため、スペクトログラムは単色表示になっています。リアルタイム・スペクトラムには、現在のスペクトログラムのスペクトラムが表示されます。スペクトログラムの中では、色も同じく重要な機能です。

5. “Color Mapping” ソフトキーを押します。
“Color Mapping” ダイアログ・ボックスが開きます。
6. ノイズ・フロアが表示されなくなるように色の範囲を絞り込みます。

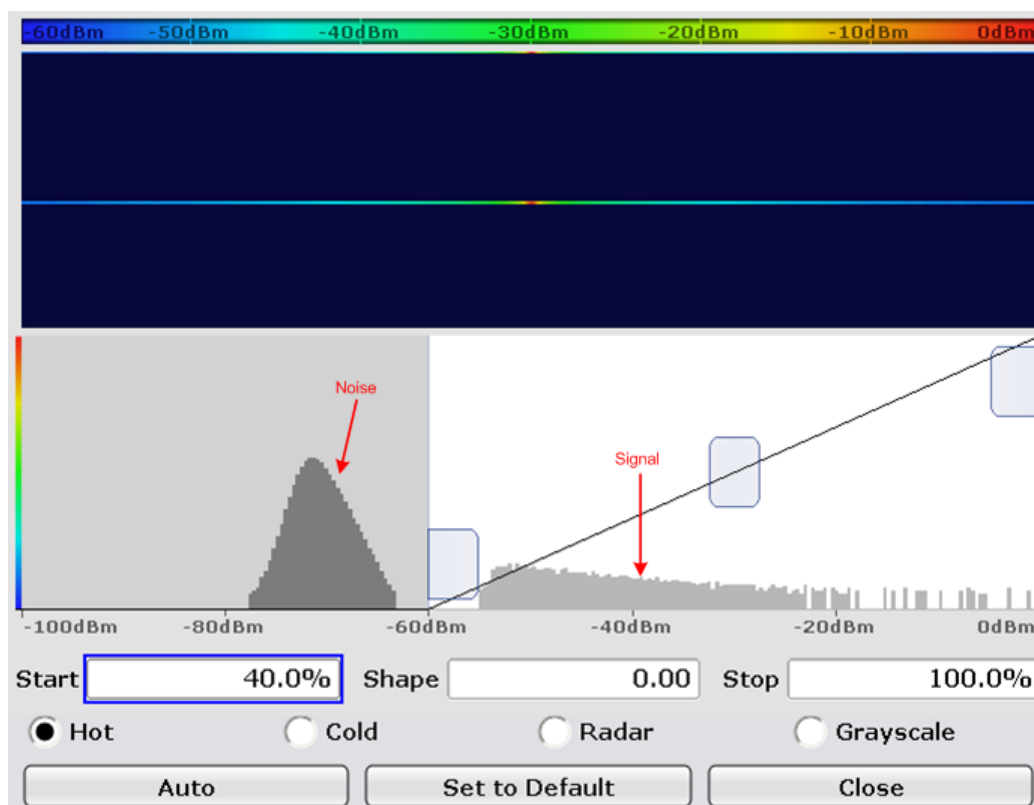


図 6-6: ノイズを除去する場合のカラー・マッピング・ダイアグラム

ノイズを除去すると、パルスは色付きで表示されています。ノイズ・フロアは、設定したカラー方式の左端の色（この例では濃い青）で表示されています。

7. “Close” ボタンを押して、結果表示に戻ります。

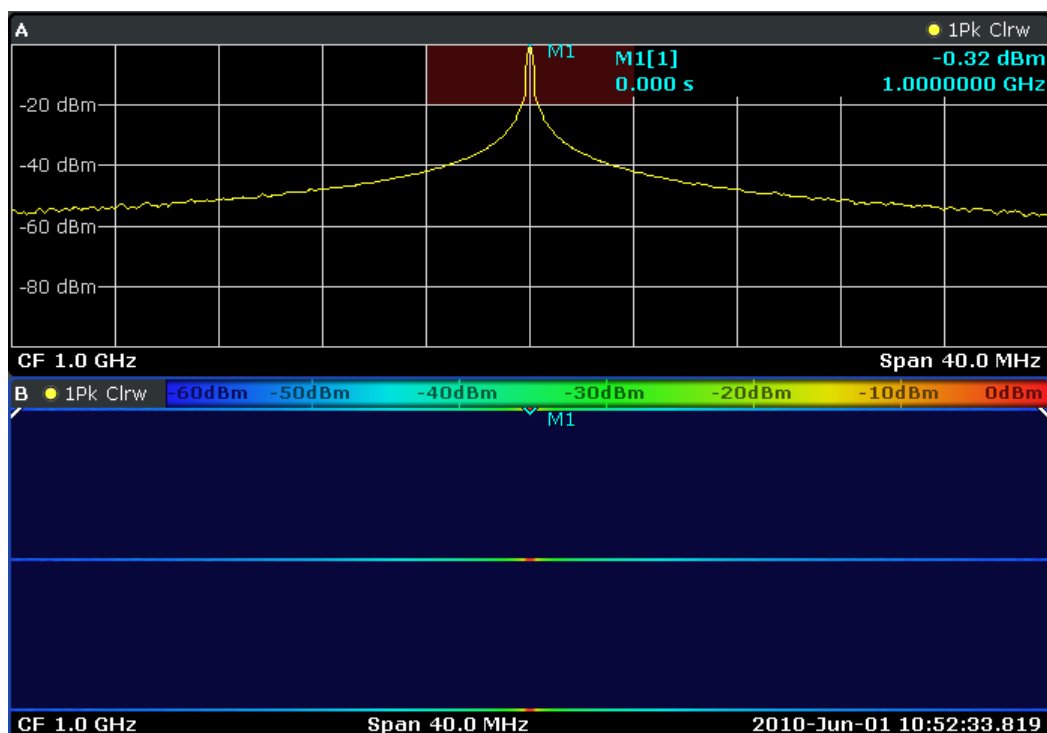


図 6-7: カラー・マップ調整後のスペクトログラム

トリガの設定

リアルタイム・モードには、周波数マスク・トリガを備えています。これは、周波数について定義した条件に合致した場合に測定をトリガする機能です。これを利用して、2 個の連続パルスをスペクトログラムで観察することができます。

1. TRIG キーを押します。
トリガ・メニューが開きます。
2. "Trigger Source" ソフトキーを押します。
3. "Frequency Mask" ソフトキーを押します。
周波数マスクを定義するダイアログ・ボックスが開きます。

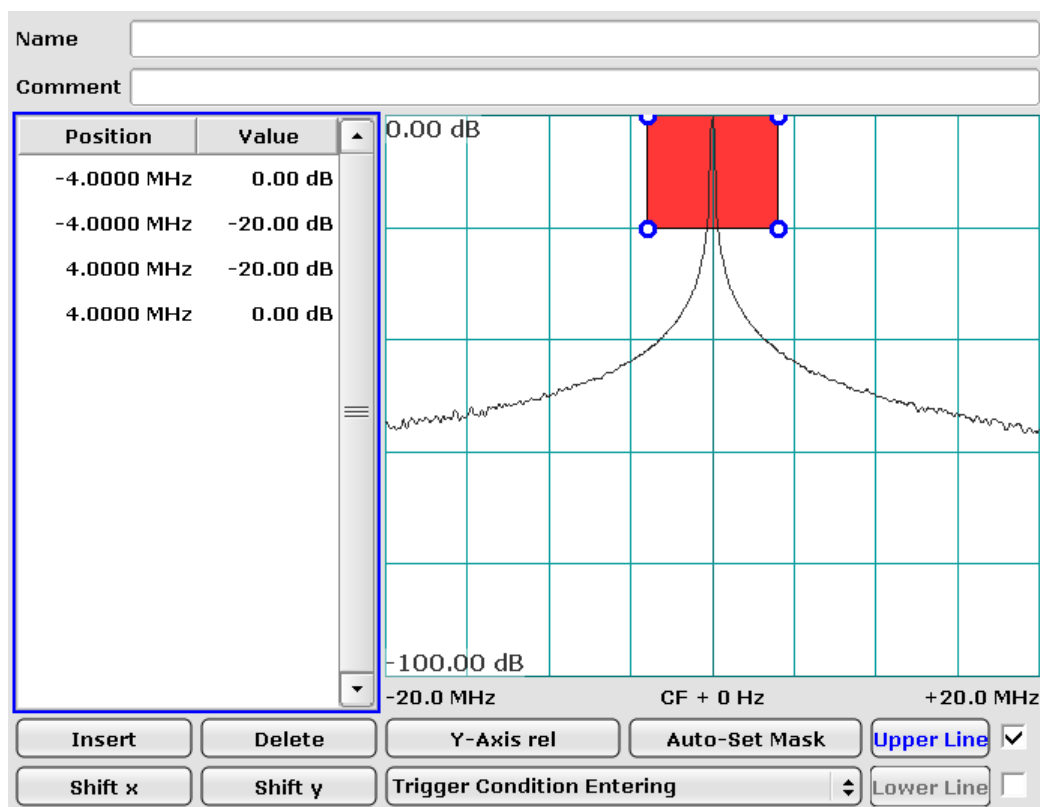


図 6-8: 周波数マスク・ダイアログ・ボックスで周波数マスクをカスタマイズ

上の図のようにマスク・ラインを設定します。この設定により、当初マスクの外側にあった信号が赤い領域に入った場合に、トリガ条件（入域）を満たします。

設定と同時に、現在測定されているスペクトラムもダイアログ・ボックスに示されています。現在のスペクトラムを表示により、スペクトラム周辺に周波数マスクを設定することが簡単になります。この例では、パルスのリアルタイム・スペクトラムが表示されています。

また、残光モードのスペクトラムを使用して周波数マスク・トリガを設定することもできます。その場合、ダイアログ・ボックスにはリアルタイム・スペクトラムではなく、残光モードのスペクトラムが表示されます。

ヒント：短パルス信号の場合には、周波数マスクを定義するときに残光モードのスペクトラムの方が効果的です。パルスが存在しないときにもその影が見えるからです。

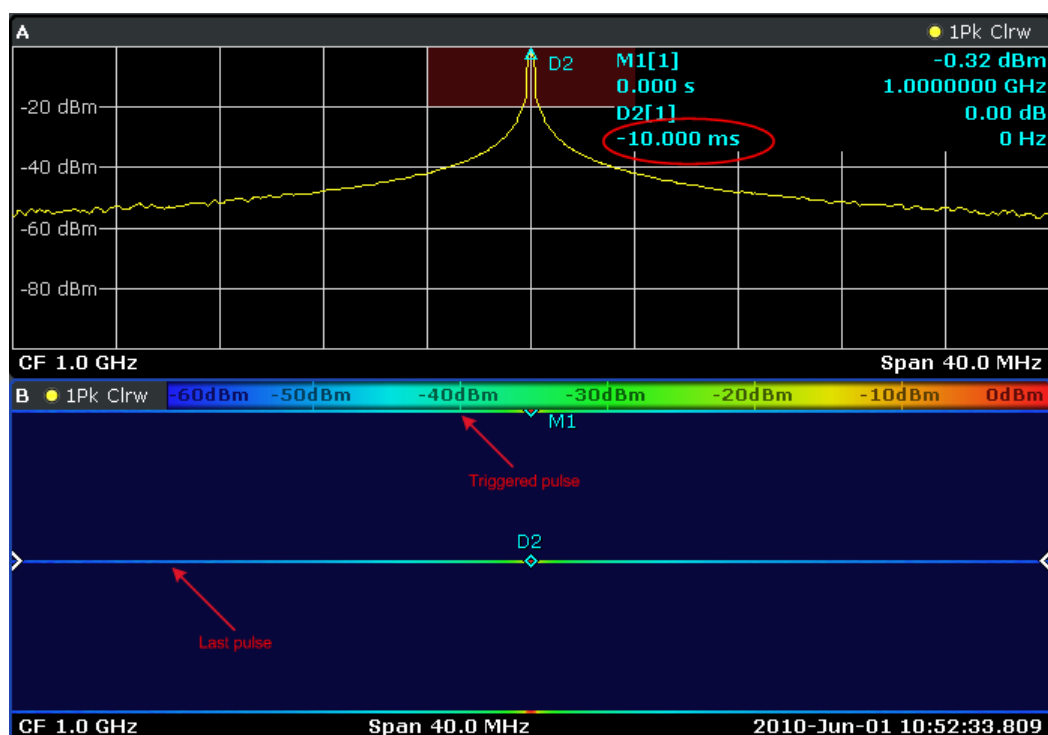
- ダイアログ・ボックスを閉じます。
周波数マスクが、アクティブのときには、リアルタイム・スペクトラムと残光モードのスペクトラム結果表示に濃い赤色で常に表示されます。
- TRIG キーを押します。

6. “Pretrigger” ソフトキーを押します。
7. 300ms のプリトリガを設定します。
プリトリガにより、トリガ・イベントの 300ms 直前のスペクトログラムを確実に記録することができます。
また、ポストトリガを設定することで、トリガ・イベント後に記録される期間を指定することも可能です。この場合、全記録時間は、プリトリガとポストトリガの合計になります。

パルス繰り返し時間の評価

確実なトリガをするためには、最初に信号が完全に周波数マスクの外側にあることが必要です。周波数マスクを定義した赤色の領域に信号が入ると、直ちに測定がトリガされます。

1. CONT キーを押します。
本機が測定を開始します。測定は、トリガ条件が満たされるまで続きます。測定が停止すると、スペクトログラムに 2 つのパルスが表示されます。
2. MKR キーを押します。
マーカが自動的に起動し、スペクトログラム・ラインのピークに配置されます。このラインは、直前に記録されたデータに相当します。
3. “Marker 2” ソフトキーを押します。
2 番目のマーカ（デルタ・マーカ）が起動します。
4. デルタ・マーカを 2 番目のパルスに移動します。
これで、2 つのマーカの時間差、すなわち 2 つのパルスの時間差がマーカ情報フィールドに表示されます。
なお、リアルタイム・スペクトラムの結果表示では、現在測定中のスペクトラム（マーカ 2 の位置に対応するスペクトラム）が表示範囲の外側にあります。



パルス長の測定

パルス長の測定方法は、パルス周期の測定方法と似ています。

観測しやすいように、シグナル・ジェネレータの設定を次のように調整しておきます。

シグナル・ジェネレータの設定

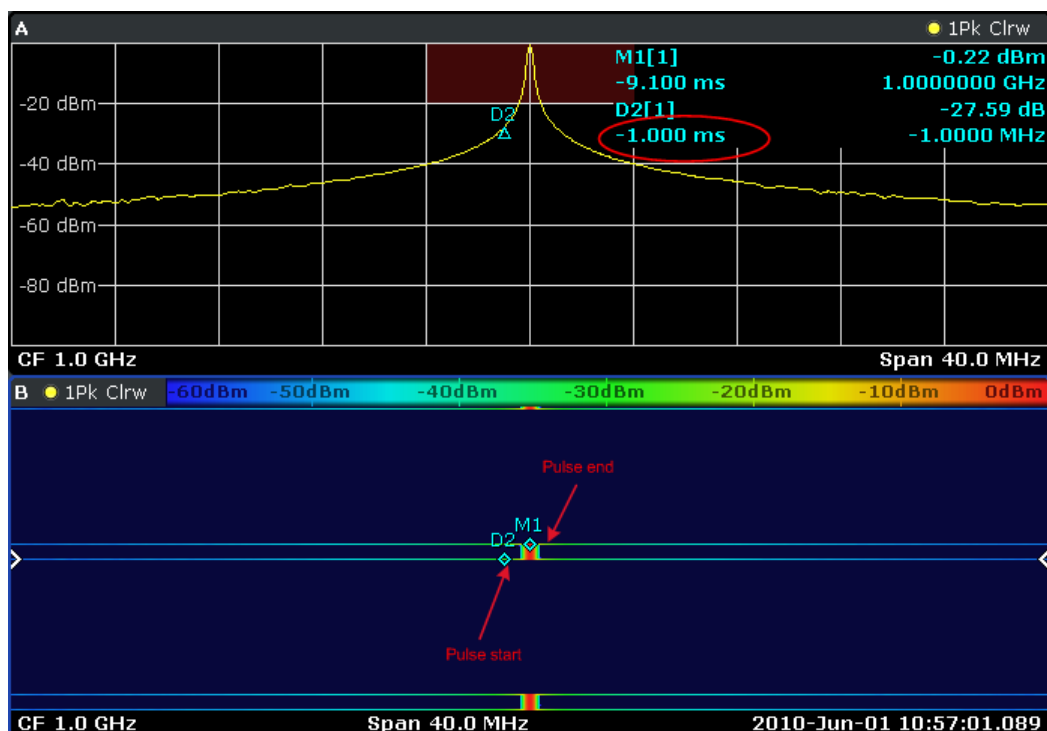
- 中心周波数 : 1 GHz
- レベル : 0 dBm
- パルス設定 :
 - パルス周期 : 10 ms
 - パルス幅 : 1 ms
 - パルス遅延 : 10 ns
 - パルス・モード : シングル
 - トリガ・モード : オート

ポスト・トリガが設定されていないため、パルスの直後に測定が中止されます。パルスの開始点は、スペクトログラムのピークになります。

1. MKR キーを押します。
マーカが起動します。

正弦波信号の測定

2. マーカの位置を、完全に記録されたパルスの終点に置きます。
3. MKR キーをもう一度押します。
デルタ・マーカが起動します。
4. デルタ・マーカの位置を、完全に記録されたパルスの始点に置きます。
マーカ 1 とデルタ・マーカ 2 の距離より、1ms と分かります。



6.2 正弦波信号の測定

シグナル・アナライザを最も利用する測定作業は、信号のレベルと周波数の測定です。未知の信号を測定するときには、通常はプリセットの測定条件で開始します。

警告**大パワーの入力信号**

レベルが +30dBm (=1W) を超える可能性がある場合には、本機の RF 入力の前段に、パワー・アッテネータを接続しなければなりません。信号レベルが +30dBm を超えた場合に、本機の RF アッテネータや入力ミキサが損傷することがあります。入力されるすべての信号のパワーの合計が +30dBm を超えないように注意してください。

試験セットアップ

- シグナル・ジェネレータの RF 出力を本機の RF 入力に接続します。

表 6-1: シグナル・ジェネレータの設定 (例: R&S SMU)

周波数	128 MHz
レベル	-30 dBm

6.2.1 マーカを使用したレベルと周波数の測定

正弦波信号のレベルと周波数は、マーカ機能を使用して簡単に測定することができます。本機では、マーカが置かれた位置の信号の振幅と周波数を常に表示します。周波数の測定確度は、本機の基準周波数、マーカ周波数表示の分解能、掃引ポイント数（細かさ）によって決まります。

1. PRESET キーを押して本機をリセットします。
2. 測定する信号を、本機のフロント・パネルにあるアナライザ入力 *RF INPUT* に接続します。
3. 中心周波数を *128MHz* に設定します。
 - a) FREQ キーを押します。
中心周波数を入力するためのダイアログ・ボックスが表示されます。
 - b) ダイアログ・ボックスの中で、テンキーから *128* を入力し、MHz キーで入力を確定します。
4. 周波数スパンを *1MHz* に設定します。
 - a) SPAN キーを押します。
 - b) ダイアログ・ボックスの中で、テンキーから *1* を入力し、MHz キーを押して *1MHz* の入力を確定します。

正弦波信号の測定

メモ： 設定の連動。周波数スパンを設定すると、分解能帯域幅、ビデオ帯域幅、掃引時間が、自動的に調整されます。プリセット設定の中でこれらの値が連動関数として定義されているためです。

5. MKR キーを押して、マーカによるレベルと周波数の測定を実行します。マーカが起動しトレースのレベルのピークに自動的にセットされ、そのレベルと周波数を測定します。マーカによって測定されたレベルと周波数の値は、画面上辺のマーカフィールドに表示されます。これが測定結果になります。

M1 [1]	-30.00 dBm
	128.00000 MHz

このフィールドのヘッダはマーカの番号 (Marker 1) を示し、カッコ内の数字はトレースの番号 ([1] =Trace 1) を示しています。

メモ： ピーク・サーチの実行。マーカは、起動時に、自動的にピーク・サーチ機能を実行します (上の例を参照)。

既にマーカが起動している場合は、フロント・パネルの PEAK SEARCH キーまたは MKR > メニューの "Peak" ソフトキーを押してください。現在アクティブなマーカをピークに移動します。

6.2.1.1 周波数分解能の向上

マーカの周波数分解能は、トレースのピクセル分解能により決定されています。トレースは 691 ピクセルを使用しています。周波数スパンが 1MHz ならば、ピクセル 1 個が約 1.4kHz のスパンに相当し、最大不確かさは +/-0.7kHz となります。

トレースのピクセル分解能は、周波数スパンを狭くすることで向上させることができます。

周波数スパンを 10kHz に設定する方法

1. SPAN キーを押します。
2. ダイアログ・ボックスの中でテンキーを使用して 10 を入力し、kHz キーを使用して 10kHz の入力を確定します。

これで 10kHz スパンでの測定が行われます。このときのトレースのピクセル分解能は約 14Hz になります (10kHz スパン ÷ 691 ピクセル)。したがって、マーカ点の周波数表示の精度は約 ±7Hz になります。

6.2.1.2 基準レベルの設定

シグナル・アナライザの場合、基準レベルとは、ダイアグラムの上限の表示レベルをいいます。スペクトラム測定のためにダイナミック・レンジをできるだけ広くとるためには、シグナル・アナライザのレベル範囲全体を有効に利用してください。入力信号の最大のレベルが、ダイアグラムの上端（基準レベル）またはそのすぐ下に位置するように設定するのが最適です。



基準レベルが低いとき

選択した基準レベルが入力信号の最大レベルより低いと、本機の内部回路がオーバーロード状態になってしまいます。

このときには、エラー・メッセージの表示欄に“IF0VL”が表示されます。

プリセットの設定では、基準レベルは -10dBm です。もし入力信号が -30dBm であるならば、基準レベルを 20dB 下げて -30dBm としてもオーバーロードにならずにダイナミックレンジを最大にすることができます。

基準レベルを 20dB 下げる方法

1. AMPT キーを押します。
振幅メニューが表示されます。“Ref Level” ソフトキーが赤色でハイライトされ、データ入力を待っている状態を示します。このとき基準レベルのダイアログ・ボックスも開きます。
2. テンキーを使用して 30 を入力し $-\text{dBm}$ を押して -30dBm の入力を確定します。
これで基準レベルが -30dBm に設定されました。トレースの最大レベルが本機の基準レベルとほぼ同じ位置にあります。しかし、雑音の表示はそれほど増えません。その結果、信号のピーク・レベルと雑音表示の差、すなわちダイナミック・レンジが大きくなりました。

基準レベルをマーカ・レベルと同じに設定する方法

マーカを使用して、トレースのピーク値をダイアグラムの上端にシフトすることができます。マーカがトレースのピーク・レベルにあるときには、次の手順によって、基準レベルをマーカ・レベルに変更することができます。

1. MKR キーを押します。
2. “Ref Lvl = Mkr Lvl” ソフトキーを押します。

基準レベルが、マーカがセットされている測定値のレベルに一致しました。

2 回のキー・ストロークで基準レベルの設定ができます。

6.2.2 周波数カウンタを使用した信号周波数の測定

内蔵の周波数カウンタを使用すれば、マーカによる周波数の測定よりも正確に周波数を測定することができます。マーカ位置で周波数掃引を停止し、本機マーカ位置の信号の周波数を測定します。

次の例では、128MHz に設定されたシグナル・ジェネレータの出力の周波数をマーカを使用して表示します。

事前準備

この例では、高確度な周波数測定を行います。シグナル・ジェネレータの“Ref OUT” コネクタを本機の“Ref IN” コネクタに接続してください。

1. 本機をデフォルトの状態にするために、PRESET キーを押します。
本機がデフォルトの状態になります。
2. 中心周波数とスパンを設定します。
 - a) FREQ キーを押し、128 MHz と入力します。
これで本機の中心周波数が 128MHz に設定されました。
 - b) SPAN キーを押し、1 MHz と入力します。
これで周波数スパンが 1MHz に設定されました。
3. “Setup” メニューから、“Reference Ext” を選択します。
4. MKR キーを押してマーカを起動します。
マーカが起動して、信号レベルの最大値の位置に移動します。そのマーカ点の周波数とレベルの値が、マーカ・フィールド（ダイアグラム・ヘッダまたはマーカ・テーブル）に表示されます。
5. “MKR FUNC” メニューの中の“Sig Count On/Off” ソフトキーを押して周波数カウンタを起動します。
周波数カウンタでの測定結果が、選択した分解能でマーカ・フィールドに表示されます。

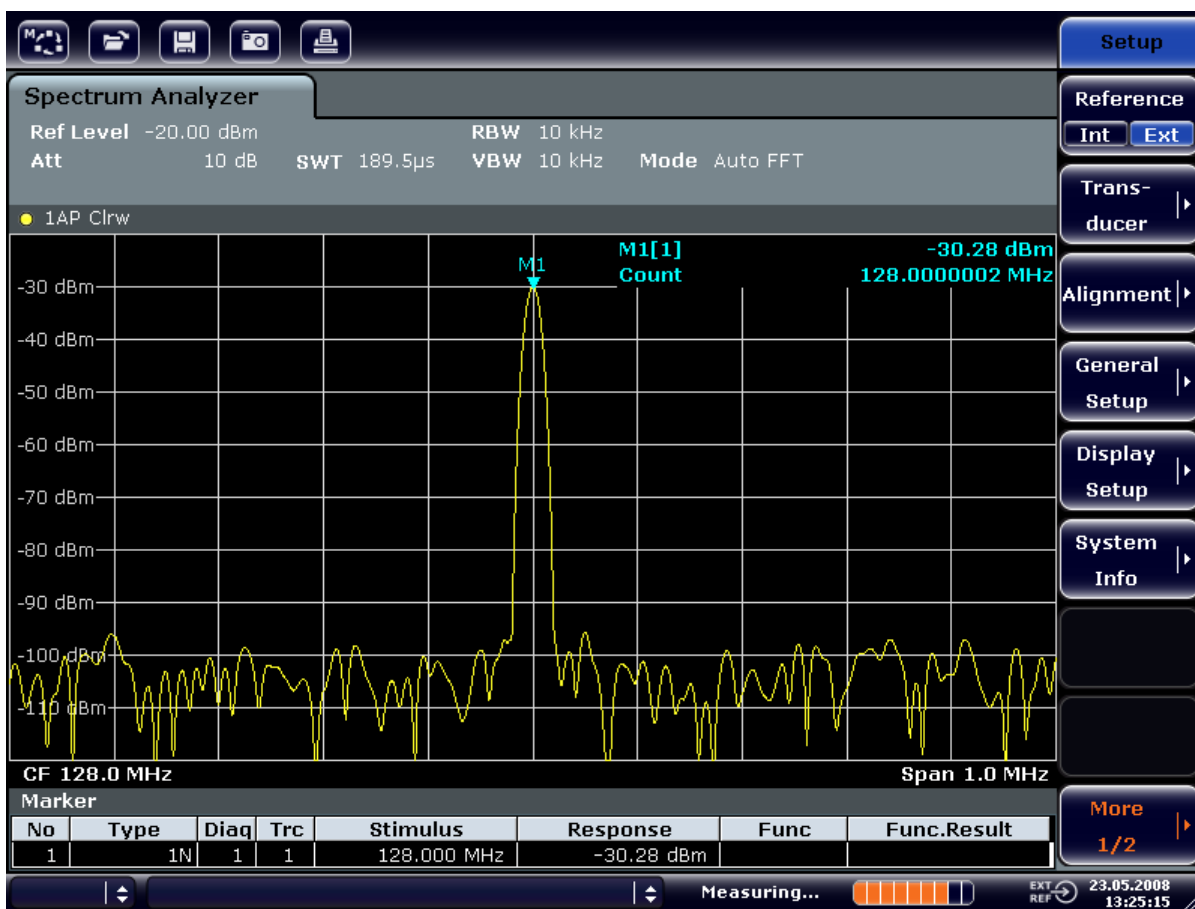


図 6-9: 周波数カウンタによる周波数の測定



内部周波数カウンタを使用するための事前準備

内蔵の周波数カウンタを使用して正確な測定結果を得るためには、被測定信号には RF 正弦波信号またはスペクトル線を使用してください。また、規定の測定確度を確保するためには、マーカはノイズ・レベルから 25dB 以上高く設定してください。

6.3 正弦波信号の高調波測定

信号の高調波測定は、シグナル・アナライザの真価が発揮される測定です。

次の例では、前の例と同じく 128MHz、-20dBm のシグナル・ジェネレータの出力信号を使用します。

正弦波信号の高調波測定

入力信号の第 1 次高調波と第 2 次高調波の抑圧度の測定

1. 本機をデフォルトの状態にするために、PRESET キーを押します。
本機がデフォルトの状態になります。
2. スタート周波数を 100MHz、ストップ周波数を 400MHz に設定します。
 - a) FREQ キーを押します。
 - b) "Start" ソフトキーを押し、100MHz と入力します。
 - c) "Start" ソフトキーを押し、400 MHz と入力します。
本機に入力信号の基本波、および第 1 次と第 2 次の高調波が表示されます。
3. 雑音をアベレージング（スムージング）するために、ビデオ帯域幅を狭くします。
 - a) BW キーを押します。
 - b) "Video BW Manual" ソフトキーを押し、100 kHz と入力します。
4. アッテネータを 0dB にセットします。
 - a) AMPT キーを押します。
 - b) "RF Atten Manual" ソフトキーを押します。
 - c) 編集ダイアログ・ボックスに 0dB と入力します。
5. MKR キーを押してマーカを起動します。
"Marker 1" が起動し、測定している信号（128MHz の基本波）のピーク・レベルに設定されます。このマーカ点のレベルと周波数が、マーカ・フィールドに表示されます。
6. デルタ・マーカを起動し、高調波の抑圧度を測定します。
 - a) "MKR" メニューの中の "Marker 2" ソフトキーを押します。
"Marker 2" がデルタ・マーカとして起動します ("D2 [1]"). このマーカは、一番レベルの高い高調波信号に自動的に設定されます。マーカ 1 からの周波数オフセットとレベル・オフセットが、チャンネル情報バーに表示されます。
 - b) "MKR" メニューの中の "Marker 3" ソフトキーを押します。
"Marker 3" がデルタ・マーカとして起動します ("D3 [1]"). このマーカは、レベルの高さが 2 番目の高調波信号に自動的に設定されます。基本波上のマーカ 1 からの周波数オフセットとレベル・オフセットが、チャンネル情報バーに表示されます (図 6-10 を参照)。

正弦波信号の高調波測定

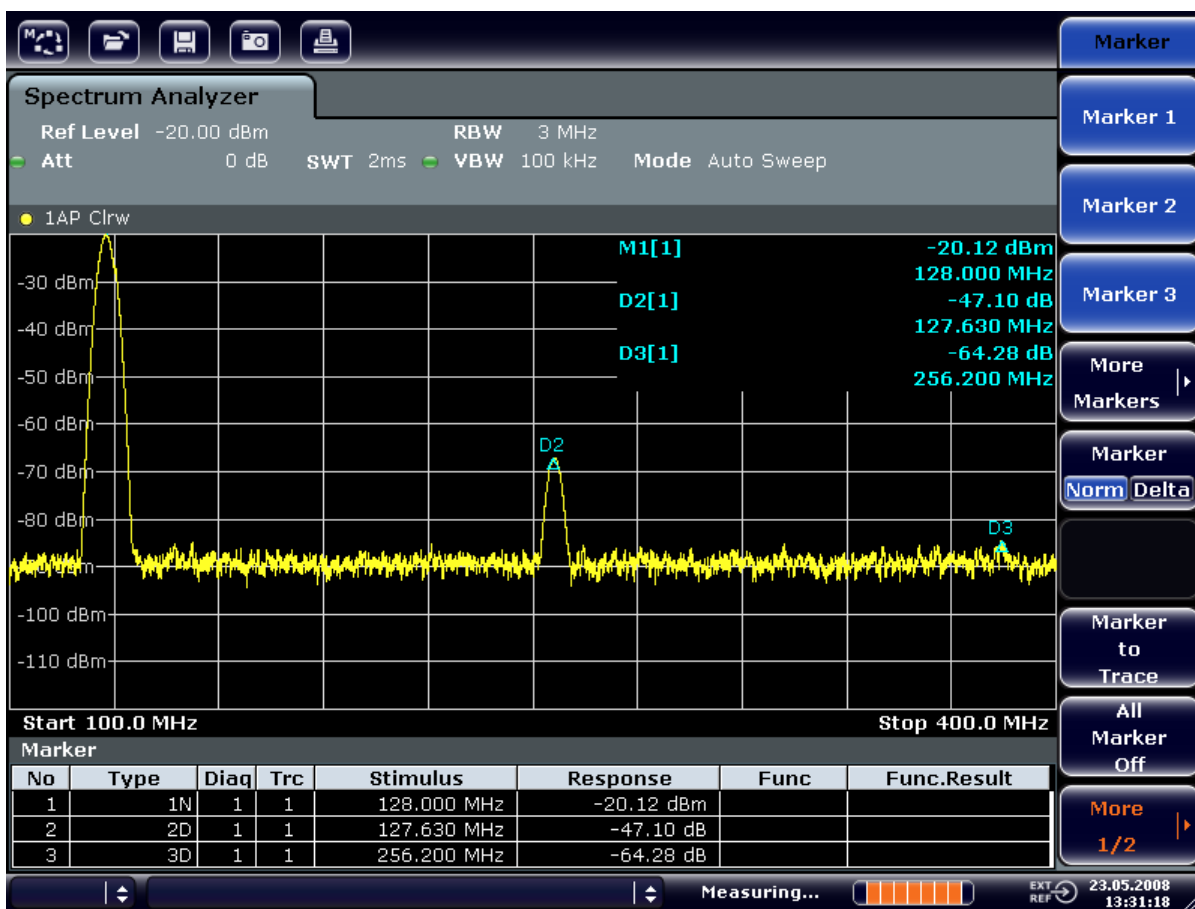


図 6-10: 内部基準信号の高調波の抑圧度測定

デルタ・マーカ D2 [1] と D3 [1] が、基本波に対する第 1 次と第 2 次の高調波のオフセット値を示しています。

雑音の低減

本機には、信号の高調波を雑音から効果的に識別するために、次の 3 種類の方法が用意されています。

- ビデオ帯域幅を狭くする方法
- トレースをアベレーシングする方法
- 分解能帯域幅を狭くする方法

ビデオ帯域幅を狭くし、トレースをアベレーシングすることによって、本機または被測定物に起因する雑音のいずれかが大きい方が抑圧されます。この雑音抑圧により測定信号が雑音から分離されるため、特に S/N 比が小さい場合には、測定誤差が小さくなります。

正弦波信号の高調波測定

ビデオ帯域幅を狭めて雑音を減少させる方法

1. BW キーを押します。
2. “Video BW Manual” ソフトキーを押します。
3. ビデオ帯域幅を狭めます。この例では、1kHz に狭めるために 1kHz と入力します。

これにより雑音は大幅にスムージングされますが、掃引時間が 200ms と長くなります。つまり測定時間が大幅に長くなります。表示されているビデオ帯域幅には丸印が表示されて、分解能帯域幅との連動が解除されていることを表示します（図 6-11 を参照）。



図 6-11: ビデオ帯域幅の縮小による高調波測定時の雑音を抑圧

4. ビデオ帯域幅が分解能帯域幅に連動するように戻します。
 - a) BW キーを押します。
 - b) “Video BW Auto” ソフトキーを押します。

複数の信号のスペクトラムの測定

トレースのアベレージングで雑音を減少させる方法

1. TRACE キーを押します。
2. “Trace Wizard” ソフトキーを押します。
3. “Trace 1” に対しては “Trace Mode” カラムの中のボタンを押し、リストから “Average” を選択します。
連続 10 回のトレース結果をアベレージングし、トレースの雑音成分が抑圧されます。
4. トレースのアベレージングをオフにします。“Trace Mode” カラムの中のボタンを押し、リストから “Clear Write” を選択するとオフになります。

測定帯域幅を狭めて雑音を減少させる方法

分解能帯域幅を狭くすると雑音は帯域幅に比例して減少します。分解能帯域幅を 1/10 に縮小すると、雑音も 1/10 (10dB に相当) に減少します。分解能帯域幅を縮小しても、正弦波信号の振幅は変わりません。

1. 分解能帯域幅を 10kHz に設定します。
 - a) BW キーを押します。
 - b) “Res BW Manual” ソフトキーを押し、*10 kHz* と入力します。
直前の設定に比べて雑音は 25dB ほど減少します。ビデオ帯域幅は分解能帯域幅と連動しているため、分解能帯域幅に比例して 30kHz に狭められます。その結果、掃引時間は 3 秒になります。
2. “BW” メニューの “Res BW Auto” ソフトキーを押して、分解能帯域幅（スパンに連動した設定）をリセットします。

6.4 複数の信号のスペクトラムの測定

6.4.1 分解能帯域幅の選択による信号の分離

本機の基本的な機能の 1 つは、複数の信号が混在している中からスペクトラム成分を分離できることです。個々の成分を分離することができる分解能は、分解能帯域幅によって決まります。分解能帯域幅をあまり大きく設定すると、個々のスペクトラム成分を分離することができなくなり、全体が 1 つの成分として表示されてしまいます。

複数の信号のスペクトラムの測定

RF 正弦波信号の測定値は、設定された RBW フィルタの通過域特性によって決まります。このフィルタの帯域幅は、3dB 帯域幅で定義されています。

入力する信号が、同じ振幅で周波数が異なるが 2 つの信号の場合には、分解能帯域幅を 2 つの信号の周波数間隔よりも狭くすることによって、分離することができます。分解能帯域幅が周波数間隔と等しい場合には、スペクトラム表示において 2 つの信号の中央にレベルが 3dB 減衰した点が示されます。分解能帯域幅を狭くするにつれ、中央のレベルの減衰が大きくなり、個々の信号が明確になります。

スパンは同じままで掃引時間を長くすると、分解能帯域幅が狭くなり、スペクトラムの分解能を上げることができます。分解能帯域幅を 1/3 に狭めると、掃引時間は 9 倍になります。

例：

2 つの信号の分離

2 つの信号のレベルが -30dBm で周波数が 30kHz 離れている場合

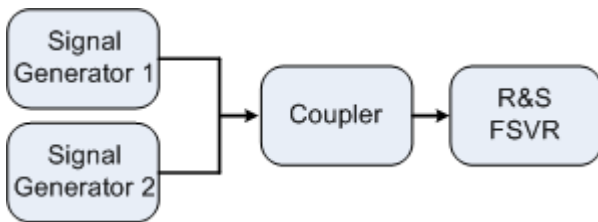


表 6-2: シグナル・ジェネレータの設定 (例: R&S SMU)

	レベル	周波数
シグナル・ジェネレータ 1	-30 dBm	128,00 MHz
シグナル・ジェネレータ 2	-30 dBm	128,03 MHz

1. 本機をデフォルトの状態にするために、PRESET キーを押します。
本機がデフォルトの状態になります。
2. 中心周波数を 128.015MHz に、周波数スパンを 300kHz に設定します。
 - a) FREQ キーを押し、128.015 MHz と入力します。
 - b) SPAN キーを押し、300 kHz と入力します。
3. 分解能帯域幅を 30kHz に、ビデオ帯域幅を 1kHz に設定します。
 - a) BW キーを押します。
 - b) "Res BW Manual" ソフトキーを押し、30 kHz と入力します。
 - c) "Video BW Manual" ソフトキーを押し、1 kHz と入力します。

複数の信号のスペクトラムの測定

メモ： ビデオ帯域幅が広すぎる場合。2つの信号の中央にあるレベルの減衰が明確に表示されるように、ビデオ帯域幅を 1kHz に設定します。ビデオ帯域幅がこれより大きいと、エンベロープ検波によって生じるビデオ電圧が十分に抑圧されません。その結果、余分な電圧が印加され、トレース上で 2 信号間の遷移領域に現れます。

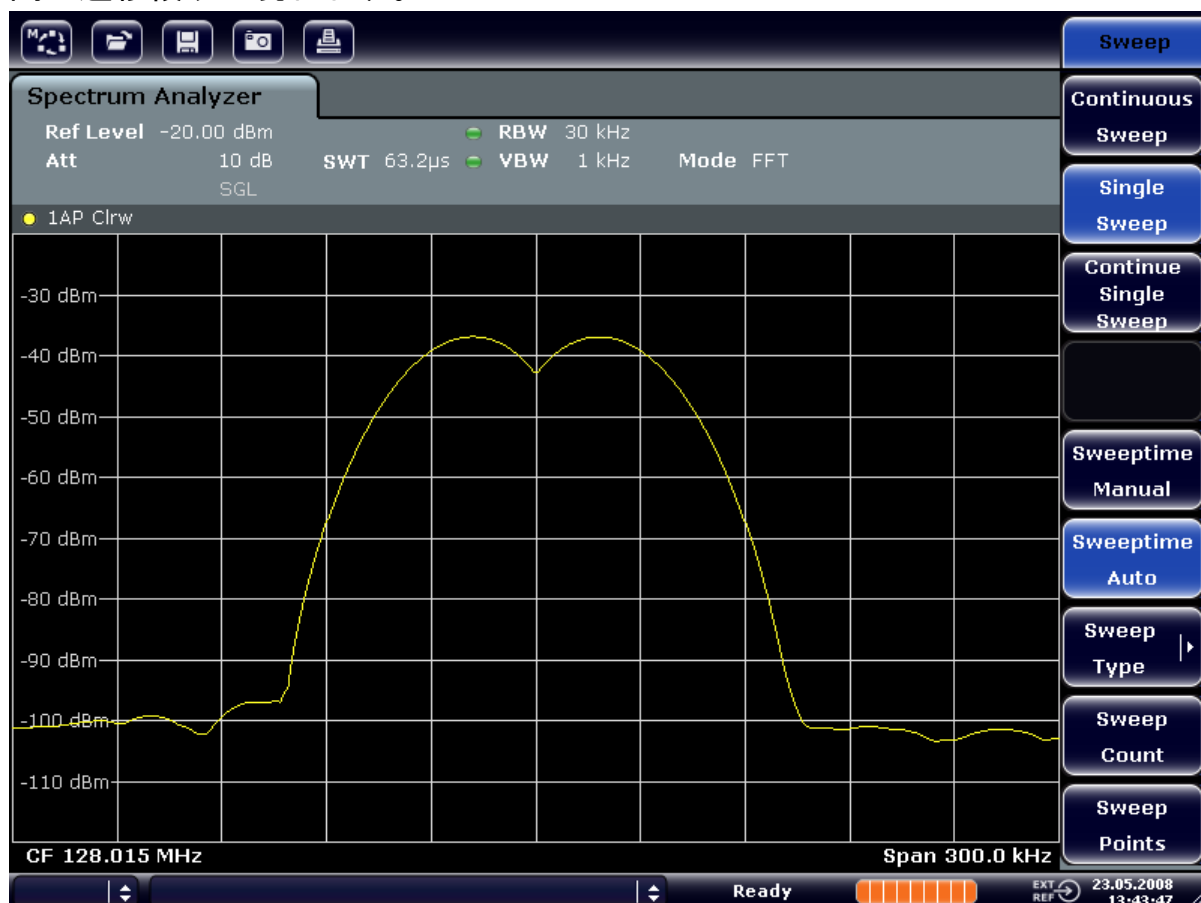


図 6-12: 同じレベルの 2 つの RF 正弦波信号を、信号の周波数間隔と同じ分解能帯域幅で測定した結果

シグナル・ジェネレータと本機の周波数の一致

シグナル・ジェネレータの周波数が本機の周波数表示と完全に一致するときには、レベルの減衰点が画面の中央に表示されます。正確に一致させるためには、シグナル・ジェネレータと本機の周波数を同期させる必要があります。

4. 分解能帯域幅を 100 kHz に設定します。それには、帯域幅メニューの中で “Res BW Manual” ソフトキーを押し、100 kHz と入力します。この結果、2 つのシグナル・ジェネレータの出力を区別することができなくなりました。

複数の信号のスペクトラムの測定



図 6-13: 同じレベルの 2 つの RF 正弦波信号を、信号の周波数間隔より広い分解能帯域幅で測定した結果

メモ： 分解能帯域幅を狭くする方法。分解能帯域幅 (RBW) は、ロータリ・ノブを半時計方向に回してさらに狭くすることができます。RBW が狭いほど、周波数分解能が向上します。

5. 分解能帯域幅を 1 kHz に設定します。帯域幅メニューの中で “Res BW Manual” ソフトキーを押し、1 kHz と入力します。
シグナル・ジェネレータの 2 つの信号が、高分解能で表示されます。ただし、掃引時間は長くなります。帯域幅を狭くすると、同時に雑音レベルの表示も低くなります (帯域幅を 1/10 に狭めるとノイズ・フロアが 10dB だけ下がります)。

複数の信号のスペクトラムの測定

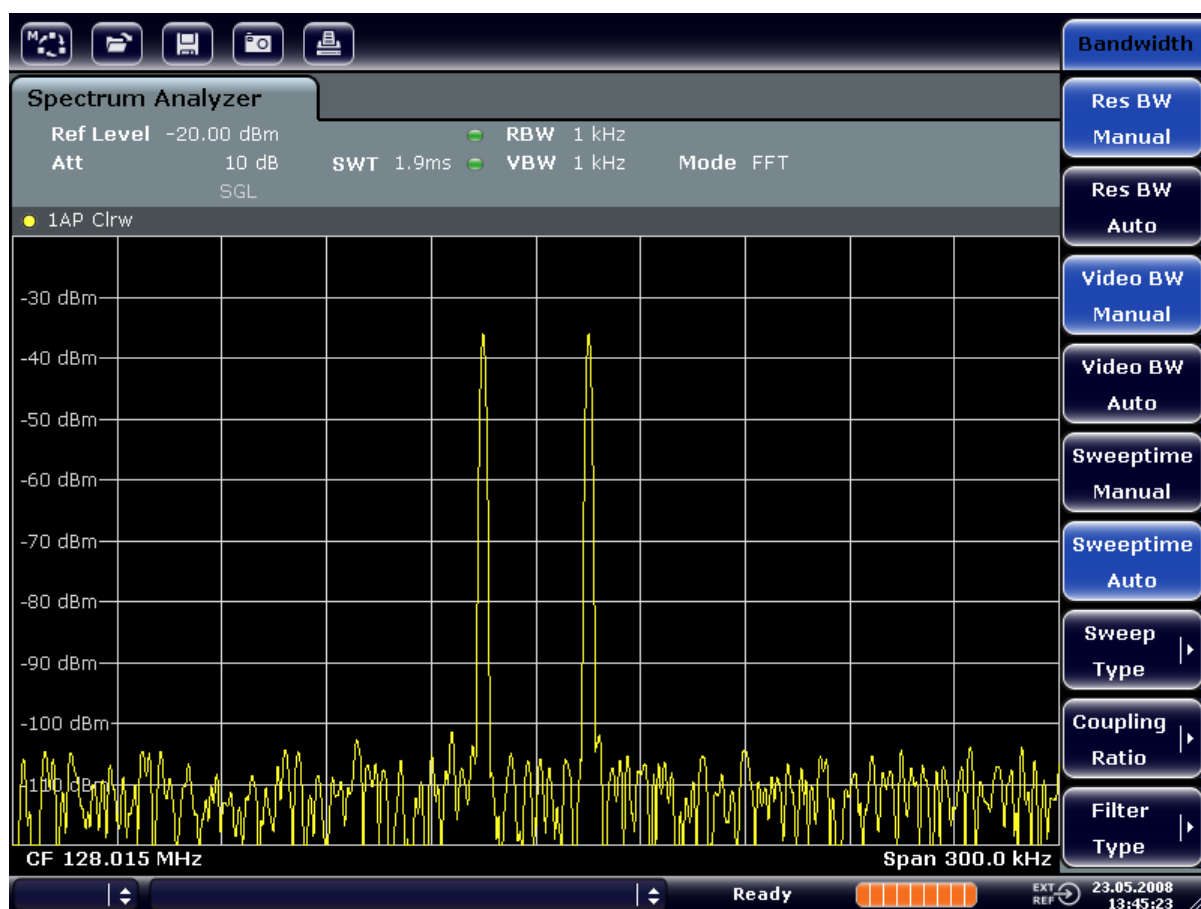
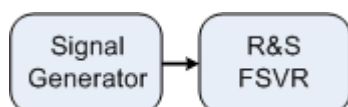


図 6-14: 同じレベルの 2 つの RF 正弦波信号を、信号の周波数間隔より狭い分解能帯域幅 (1kHz) で測定した結果

6.4.2 振幅変調 (AM) された搬送波の変調度測定 (スパン > 0)

周波数の表示において、分解能帯域幅を狭めて AM の側帯波を測定し、搬送波と変調波とを分離して表示することができます。これにより、正弦波によって変調をかけた搬送波の変調度の測定が可能になります。本機のダイナミック・レンジは非常に広いために、浅い変調がかかった信号の変調度も正確に測定できます。本機には、変調度の測定値を % 単位の数値で表示する測定ルーチンが組み込まれています。

試験セットアップ



複数の信号のスペクトラムの測定

表 6-3: シグナル・ジェネレータの設定 (例: R&S SMU)

周波数	128 MHz
レベル	-30dBm
変調	50 % AM, 10 kHz AF

1. 本機をデフォルトの状態にするために、PRESET キーを押します。
本機がデフォルトの状態になります。
2. 中心周波数を 128MHz に、スパンを 50kHz に設定します。
 - a) FREQ キーを押し、128 MHz と入力します。
 - b) SPAN キーを押し、50 kHz と入力します。
3. AM 変調度を測定するためのマーカ機能を起動します。
 - a) MEAS キーを押します。
 - b) "More" キーを押します。
 - c) "AM Mod Depth" ソフトキーを押します。

ダイアグラムの中央にある搬送波にマーカが自動的に設定され、さらに AM 変調波の上側帯波と下側帯波のそれぞれにデルタ・マーカが設定されます。本機では、これらのデルタ・マーカと中央に位置しているセンター・マーカのレベルの違いから AM 変調度を計算し、結果を数値としてマーカ・フィールドに出力します。

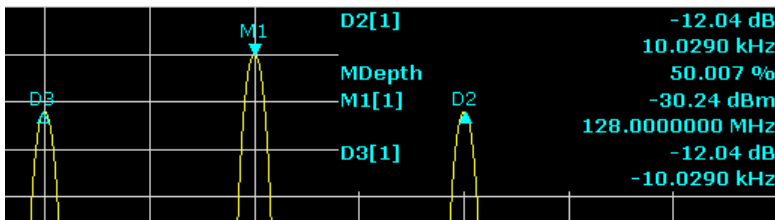


図 6-15: AM 変調度の測定

変調度は "MDepth" で表示されます。AF 信号の周波数は、デルタ・マーカの周波数表示で確認できます。

6.4.3 AM 変調された信号の測定

本機では、RF 入力信号を整流し、振幅スペクトラムとして表示します。また、この整流機能により AM 変調された信号を復調します。変調側帯波が分解能帯域幅内にある場合には、ゼロ・スパン・モードに設定すると AF 電圧を表示することができます。

複数の信号のスペクトラムの測定

AM 変調された信号の AF の表示 (ゼロ・スパン)

試験セットアップ

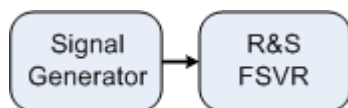


表 6-4: シグナル・ジェネレータの設定 (例: R&S SMU)

周波数	128 MHz
レベル	-30dBm
変調	50 % AM, 1 kHz AF

1. 本機をデフォルトの状態にするために、PRESET キーを押します。
本機がデフォルトの状態になります。
2. 中心周波数を 128 MHz に、スパンを 0 Hz に設定します。
 - a) FREQ キーを押し、128 MHz と入力します。
 - b) SPAN キーを押して 0Hz と入力するか、“Zero Span” ソフトキーを押します。
3. 掃引時間を 2.5ms に設定します。
 - a) SWEEP キーを押します。
 - b) “SweepTime Manual” ソフトキーを押します。
 - c) 2.5ms と入力します。
4. 基準レベルを +6dBm に設定し、表示レンジの設定をリニアにします。
 - a) AMPT キーを押し、6dBm と入力します。
 - b) “Range” ソフトキーを押します。
 - c) “Range Linear %” ソフトキーを押します。
5. 画像を静止させるために、ビデオ・トリガ機能を使用して AF 信号でトリガがかかるように設定します。
 - a) TRIG キーを押します。
 - b) “Trg/Gate Source” ソフトキーを押し、矢印キーを使用して “Video” を選択します。
 - c) “Trg/Gate Level” ソフトキーを押し、50% と入力します。
トリガ・レベルは、測定ダイアグラム全体を横切る水平方向のラインで表示されます。1kHz の AF 信号がゼロ・スパンの静止画像として表示されます。ヘッド・セットを使用してこの AF を聞くことができます。
6. 内蔵 AM 復調器を起動します。
 - a) MKR FUNC キーを押します。

ゼロ・スパンでの測定

- b) “Marker Demod” ソフトキーを押します。
AM オーディオ復調器が自動的にオンになり、1kHz のトーンをヘッド・セットで聞くことができます。必要に応じ、フロント・パネルの AF 出力のボリューム・コントロール・ノブで音量を調整します。

6.5 ゼロ・スパンでの測定

TDMA 方式を用いる GSM や IS136 などの無線送信システムでは、スペクトラム特性だけでなくゼロ・スパンでの特性が送信品質に影響を与えます。複数のユーザが同一の周波数を共有するため、各ユーザにタイム・スロットが割り当てられます。すべてのユーザが、割り当てられたタイム・スロット内で動作した場合のみ、円滑な運用が保証されます。

送信時のパワー、TDMA バーストのタイミングやその長さ、バーストの立ち上り／立ち下りの時間などが重要です。

6.5.1 バースト信号の電力特性の測定

本機には、ゼロ・スパン・モードでパワーを測定するときに、あらかじめ定義された時間でパワーを測定する簡単で便利な機能があります。

6.5.1.1 GSM バースト信号のタイム・スロット内のパワー測定

試験セットアップ

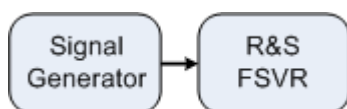


表 6-5: シグナル・ジェネレータの設定 (例: R&S SMU)

周波数	890 MHz
レベル	0dBm
変調	GSM ; 1 個のタイム・スロットがアクティブ

1. 本機をデフォルトの状態にするために、PRESET キーを押します。
本機がデフォルトの状態になります。
2. 中心周波数を 890MHz に、スパンを 0Hz に、分解能帯域幅を 1MHz に、それぞれ設定します。

ゼロ・スパンでの測定

- a) FREQ キーを押し、*890 MHz* と入力します。
 - b) SPAN キーを押し、*0Hz* と入力するか、“Zero Span” ソフトキーを押します。
3. 本機の基準レベルを +10dBm (=シグナル・ジェネレータの出力レベル +10dB) に設定し、アッテネーションを 20dB に設定します。
 - a) AMPT キーを押します。
 - b) *10dBm* と入力します。
 - c) “Rf Atten Manual” ソフトキーを押します。
 - d) *20dB* と入力します。
 4. 掃引時間を 1ms に設定します。
 - a) SWEEP キーを押します。
 - b) “SweepTime Manual” ソフトキーを押し、*2ms* と入力します。
本機の表示全体にわたり、GSM バーストが連続的に表示されます。
 5. ビデオ・トリガを使用し、バーストの立ち上がりエッジにトリガを設定します。
 - a) TRIG キーを押します。
 - b) “Trg/Gate Source” ソフトキーを押し、矢印キーを使用して “Video” を選択します。
 - c) “Trg/Gate Level” ソフトキーを押し、*70%* と入力します。
トレースの開始点に、GSM バーストの静止画像が表示されます。トリガ・レベルは、トリガ閾値の絶対値レベルが示された水平方向のラインとして、測定ダイアグラムに表示されます。
 6. ゼロ・スパンでのパワー測定を設定します。
 - a) MEAS キーを押します。
 - b) “Time Domain Power” ソフトキーを押し、サブメニューを開きます。
 - c) “Limits” ソフトキーを “On” に切り替えます。
 - d) “Left Limit” ソフトキーを押します。
 - e) ロータリ・ノブを時計方向に回して、垂直線をバーストの始点に合わせます。
 - f) “Right Limit” ソフトキーを押します。
 - g) ロータリ・ノブを反時計方向に回して、2 番目の垂直線をバーストの終点に合わせます。

これでバースト・オン時の平均パワーが表示されます。

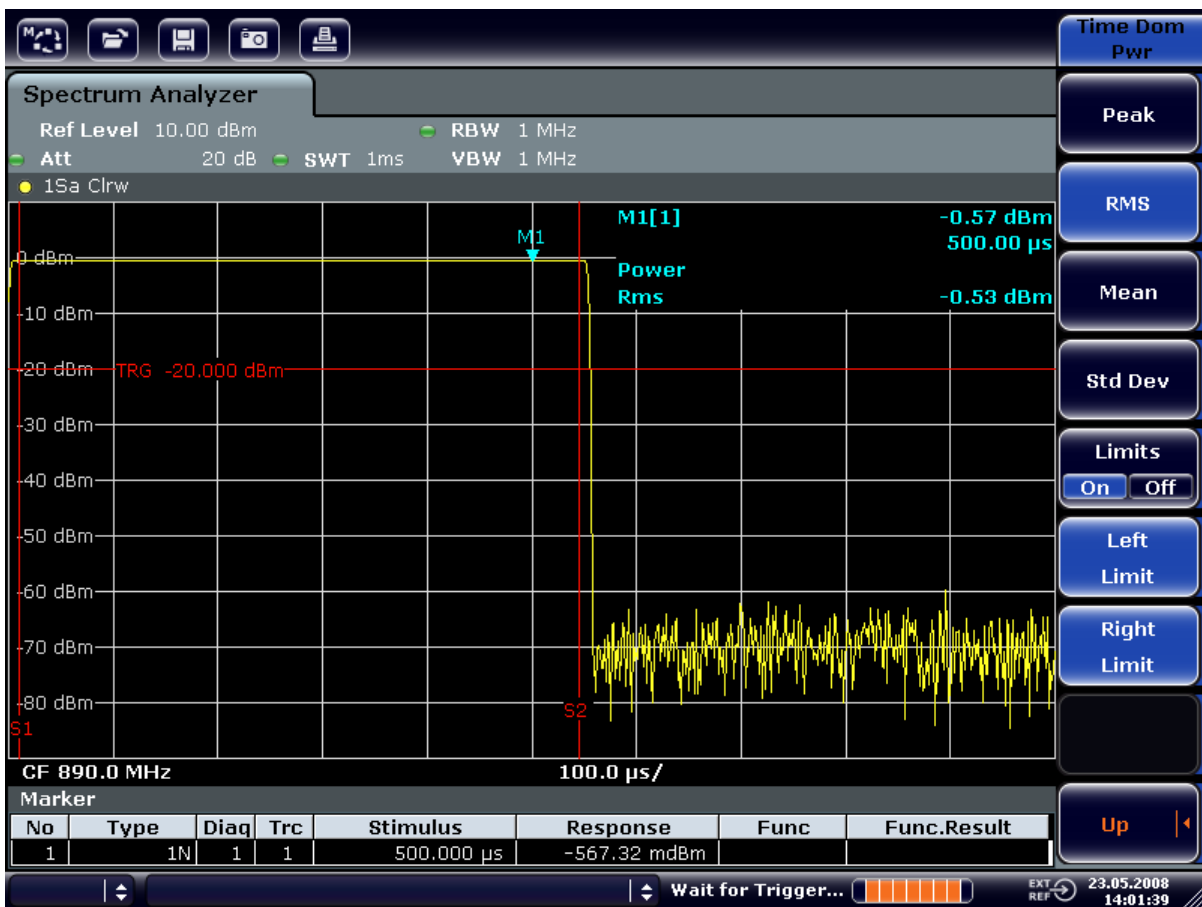


図 6-16: GSM バースト信号の平均パワー測定

6.5.1.2 高い時間分解能での GSM バーストのエッジの測定

本機では、ゼロスパンで高い時間分解能が設定できるため、TDMA バーストのエッジを正確に測定することができます。トリガ・オフセットを使用して、エッジを画面の領域内に移動させ、見やすくできます。

試験セットアップ

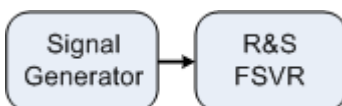


表 6-6: シグナル・ジェネレータの設定 (例: R&S SMU)

周波数	890 MHz
レベル	0dBm
変調	GSM ; 1 個のタイム・スロットがアクティブ

ゼロ・スパンでの測定

この測定は、前の例で使用した GSM バースト信号のタイム・スロット内のパワー測定の設定を使用します。

1. パワー測定をオフにします。
 - a) MEAS キーを押します。
 - b) "All Functions Off" ソフトキーを押します。
2. 時間分解能を 100 μ s に設定します。
 - a) SWEEP キーを押します。
 - b) "Sweeptime Manual" ソフトキーを押し、100 μ s と入力します。
3. トリガ・ソフトキーを使用して、GSM バーストの立ち上がりエッジを画面の中心に移動します。
 - a) TRIG キーを押します。
 - b) "Trigger Offset" ソフトキーを押します。
 - c) ロータリ・ノブを反時計方向に回し、バーストのエッジが画面中央に来るまでトリガ・オフセットを移動します。または、-50 μ s と入力して画面中央に移動します。

GSM バーストの立ち上がりエッジが表示されました。

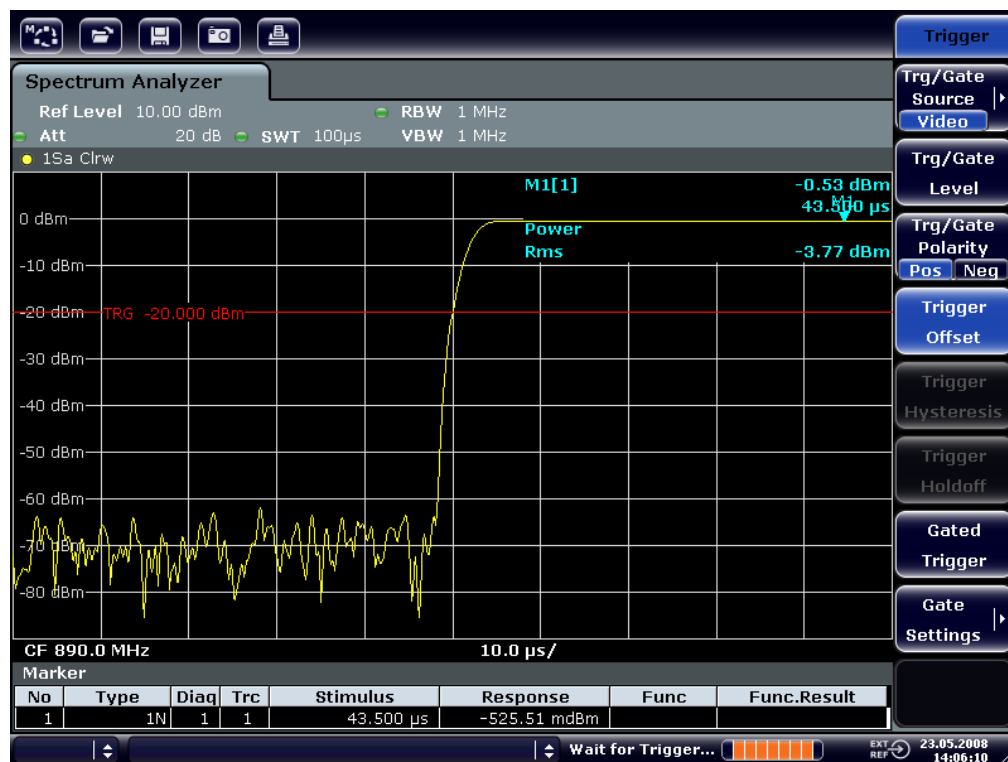


図 6-17: 時間分解能を上げて GSM バーストの立ち上がりエッジを表示

4. トリガ・オフセットを使用して、バーストの立ち下りエッジを画面の中央に移動します。"Trg/Gate Polarity" ソフトキーを "Neg" に切り替えます。

GSM バーストの立ち下がリエッジが表示されました。



図 6-18: 時間分解能を上げて GSM バーストの立ち下がリエッジを表示

6.5.2 バースト信号の S/N 比の測定

TDMA 方式が使用されている場合には、送信バーストのバースト・オン時とバースト・オフ時のパワー値を比較することによって、S/N 比またはバースト・オフ時のダイナミック・レンジを測定することができます。本機には、ゼロ・スパン・モードで絶対パワーと相対パワーを測定する機能があります。次の例では、GSM バーストを使用して測定を実行します。

GSM 信号の S/N 比の測定

試験セットアップ

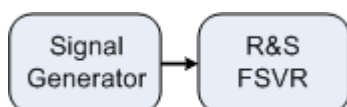


表 6-7: シグナル・ジェネレータの設定 (例: R&S SMU)

周波数	890 MHz
レベル	0dBm
変調	GSM ; 1 個のタイム・スロットがアクティブ

1. 本機をデフォルトの状態にするために、PRESET キーを押します。
本機がデフォルトの状態になります。
2. 中心周波数を 890MHz に、スパンを 0Hz に、分解能帯域幅を 1MHz に、それぞれ設定します。
 - a) FREQ キーを押し、*890 MHz* と入力します。
 - b) SPAN キーを押し、0Hz と入力するか、“Zero Span” ソフトキーを押します。
 - c) BW キーを押します。
 - d) “Res BW Manual” ソフトキーを押し、*1 MHz* と入力します。
3. 本機の基準レベルを 0dBm (=シグナル・ジェネレータでのレベル) に設定するために、AMPT キーを押し、*0dBm* と入力します。
4. 掃引時間を 2ms にセットします。
 - a) SWEEP キーを押します。
 - b) “SweepTime Manual” ソフトキーを押し、*2ms* と入力します。
本機の表示全体にわたり、GSM バーストが連続的に表示されます。
5. トリガ・ソースを “Video” に設定し、トリガの極性を “Pos” に設定して、バーストの立ち上がりエッジでトリガをかけ、バーストの始点を画面の中央に移動させます。
 - a) TRIG キーを押します。
 - b) “Trg/Gate Source” ソフトキーを押し、矢印キーを使用して “Video” を選択します。
 - c) “Trg/Gate Level” ソフトキーを押し、*70%* と入力します。
トレースの開始点に、GSM バーストの静止画像が表示されます。
 - d) “Trigger Offset” ソフトキーを押し、*-1ms* と入力します。
測定ダイアグラムの右半分に GSM バーストが表示されます。
6. ゼロ・スパンでのパワー測定を設定します。
 - a) MEAS キーを押します。
 - b) “Time Domain Power” ソフトキーを押し、サブメニューを開きます。
 - c) “Limits” ソフトキーを “On” に切り替えます。
 - d) “Left Limit” ソフトキーを押します。
 - e) ロータリ・ノブを使用して、垂直のラインをバーストの始点に設定します。

ゼロ・スパンでの測定

- f) "Right Limit" ソフトキーを押します。
 g) ロータリ・ノブを使用し、2 番目の垂直ラインをバーストの終点に設定します。
 これでバースト・オン時のパワーが表示されます。

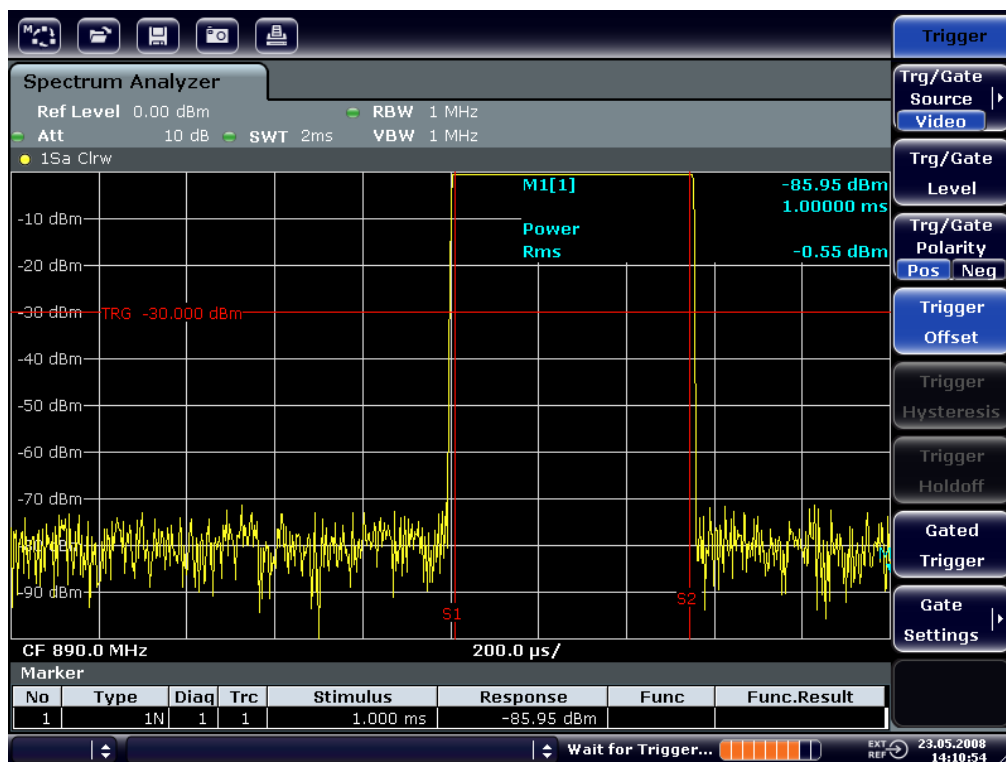


図 6-19: バースト・オン時のパワー測定

7. バースト・オフ時のパワーを測定します。
 a) TRIG キーを押します。

ゼロ・スパンでの測定

- b) “Trg/Gate Polarity” ソフトキーを押して “Neg” に切り替えます。バーストの立ち下がりエッジに反応してトリガをかける動作を開始します。これにより、バーストは測定ダイアグラムの左半分に移動します。バースト・オフ時のパワーが測定されます。バーストの始点が画面の中心に移動し、オフ状態のパワーが測定されます。

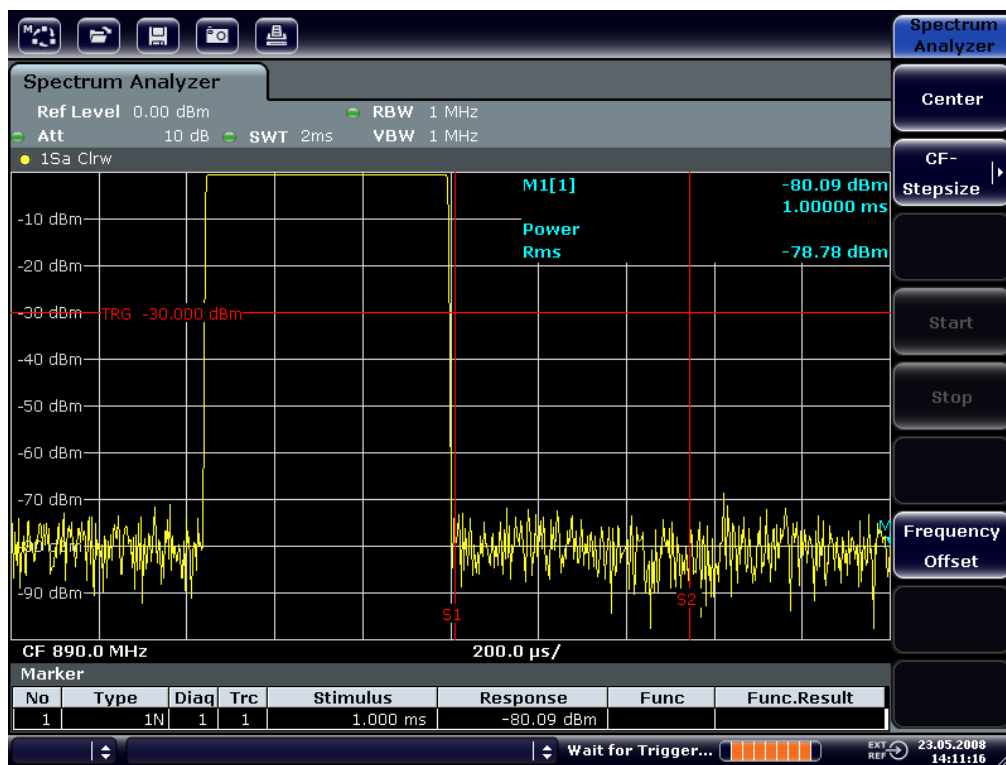


図 6-20: ゼロ・スパンでの GSM バースト信号の S/N 測定

6.5.3 周波数変調 (FM) された信号の測定

本機では、エンベロープ検波器を使用して測定信号の振幅だけを表示することができます。しかし、振幅変調 (AM) された信号の場合とは異なり、周波数変調 (FM) された信号の変調度を直接測定することはできません。FM 変調された信号の場合、信号の周波数偏差が使用する RBW フィルタの通過域のフラットな部分内にある限り、エンベロープ検波器の出力の電圧は一定です。振幅が変化するの、遷移周波数がフィルタの減衰曲線の立ち下りエッジに及ぶ瞬間だけです。この原理を利用して、FM 変調された信号を復調することができます。測定信号の公称周波数がフィルタ・エッジ上に (中心周波数の左または右) に来るように、本機の中心周波数を設定します。また分解能帯域幅と周波数オフセットは、遷移周波数がフィルタ・エッジの線形部に来るように、それぞれ選択しなければなりません。このように設定すれば、FM 変調された信号の周波数の変化が振幅の変化に変換され、ゼロ・スパン・モードの画面に表示できるようになります。

FM 変調された搬送波の AF の表示

試験セットアップ

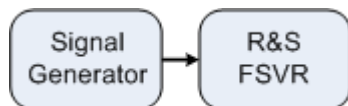


表 6-8: シグナル・ジェネレータの設定 (例: R&S SMU)

周波数	128 MHz
レベル	-20dBm
変調	FM 0kHz 偏移 (すなわち FM 変調はオフ)、1kHz AF

1. 本機をデフォルトの状態にするために、PRESET キーを押します。
本機がデフォルトの状態になります。
2. 中心周波数を 127.50MHz に、スパンを 300kHz に設定します。
 - a) FREQ キーを押し、*127.50 MHz* と入力します。
 - b) SPAN キーを押し、*300 kHz* と入力します。
3. 分解能帯域幅を 300 kHz に設定します。
 - a) BW キーを押します。
 - b) "Res BW Manual" ソフトキーを押し、*300 kHz* と入力します。
 - c) "Video BW Manual" ソフトキーを押し、*30 kHz* と入力します。
4. 表示範囲を 20dB に設定し、フィルタのトレースを画面中央に移動させます。
 - a) AMPT キーを押します。
 - b) "Range" ソフトキーを押します。
 - c) "Range Log Manual" ソフトキーを押し、*20dB* と入力します。
 - d) "Up ↑" ソフトキーを押します。
 - e) "More" ソフトキーを押します。
 - f) "Grid" ソフトキーを "Rel" に切り替えます。
 - g) "Up ↑" ソフトキーを押します。
 - h) "Ref Level" ソフトキーを押します。

ゼロ・スパンでの測定

- i) ロータリ・ノブを使用し、中心周波数の位置でフィルタ・エッジが -10dB レベルのラインと交差するように、基準レベルを設定します。
 300kHz のフィルタ・エッジが表示されます。このエッジは、約 $18\text{dB}/140\text{kHz}$ の峻度（スロープ）であって、FM 信号を復調する時の復調器の特性と同じです。このことは、マーカとデルタ・マーカを使用して確認することができます。

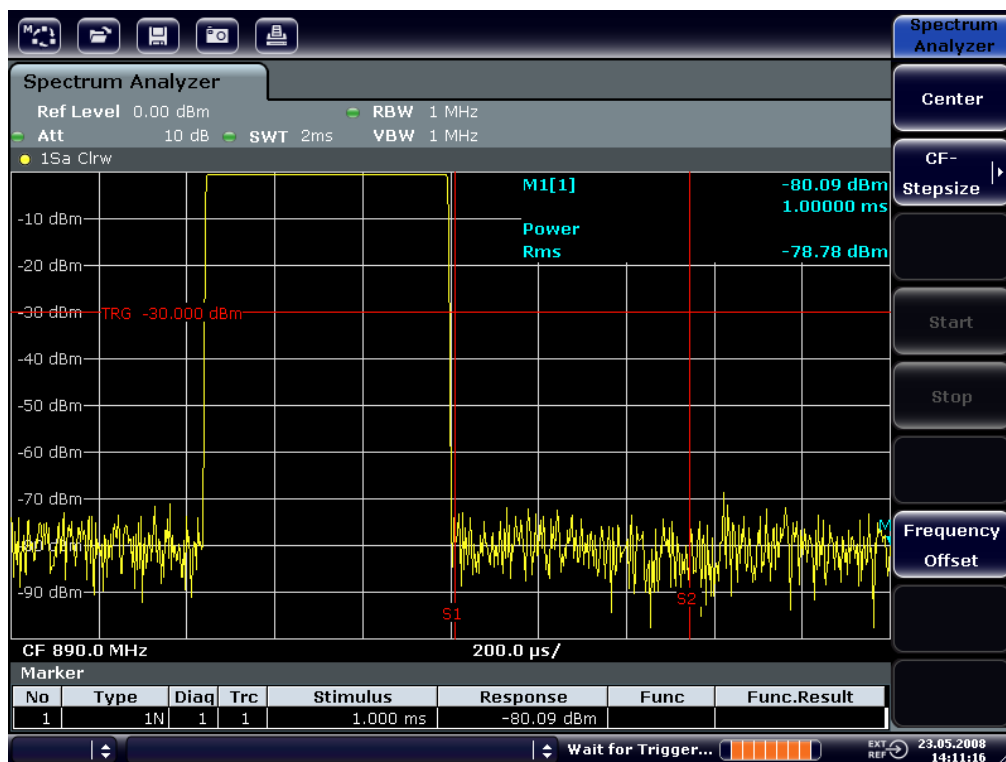


図 6-21: FM 弁別器として用いた 300kHz フィルタのフィルタ・エッジの特性を表示

5. シグナル・ジェネレータの FM 偏移を 50kHz に設定します。
6. 本機の掃引スパンを 0Hz に設定します。
 - a) SPAN キーを押します。
 - b) “Zero Span” ソフトキーを押します。
 復調された FM 信号が画面に連続的に表示されます。
7. ビデオ・トリガをかけて表示を安定させます。
 - a) TRIG キーを押します。
 - b) “Trg/Gate Source” ソフトキーを押し、矢印キーを使用して “Video” を選択します。

ゼロ・スパンでの測定

- c) "Trg/Gate Level" ソフトキーを押し、50% と入力します。
 AF 信号で FM 変調された信号の静止画像が表示されます。
 結果：(-10±5) dB。この値は、復調器のスロープの特性が 5dB/100kHz のときに周波数偏移が 100kHz であることを示しています。

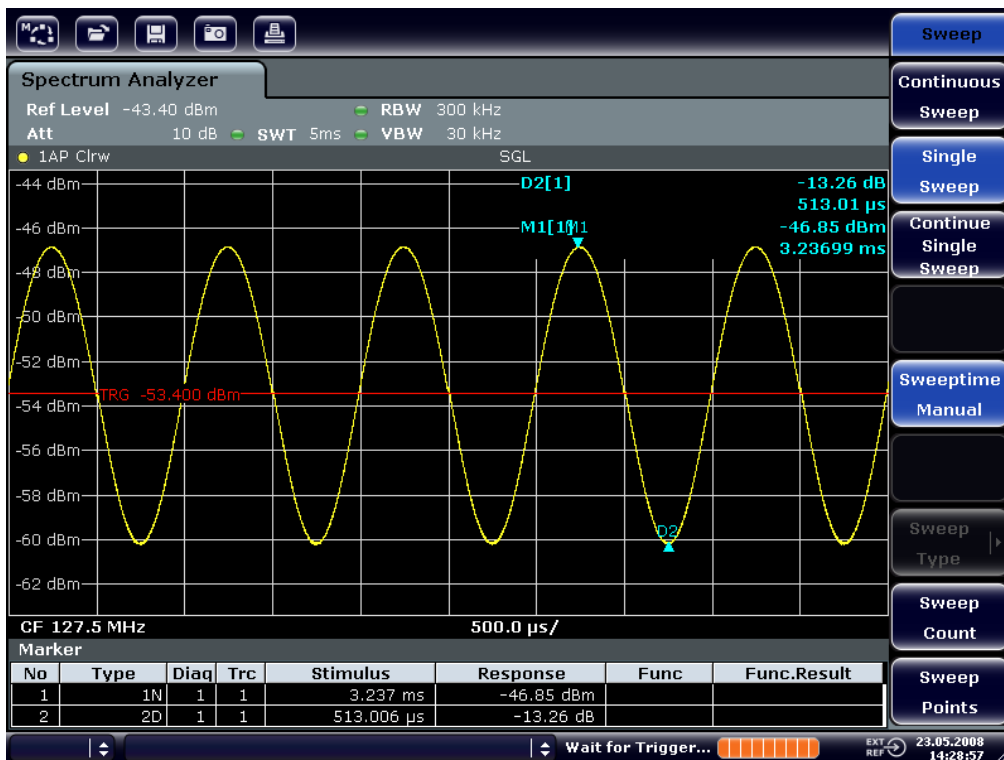


図 6-22: 復調された FM 信号

8. 周波数偏移を求めます。
- MKR キーを押します。
Marker 1 が起動し、曲線のピークに置かれます。
 - "Marker 2" ソフトキーを押します。
 - MKR キーを押します。
 - "More" ソフトキーを押します。
 - "Min" ソフトキーを押します。
マーカ 2 (デルタ・マーカ) が曲線の最小値点に置かれます。このマーカとマーカのレベルの差は 13.3dB で、これがピーク・ピーク偏移に相当します。フィルタのスロープが 18dB/140kHz の場合には、次の演算式で周波数偏移が計算できます。

$$\text{deviation} = \frac{1}{2} \times \frac{13.3 \times 140}{18} \text{ kHz} = \frac{1}{2} \times 103 \text{ kHz} = 51.7 \text{ kHz}$$

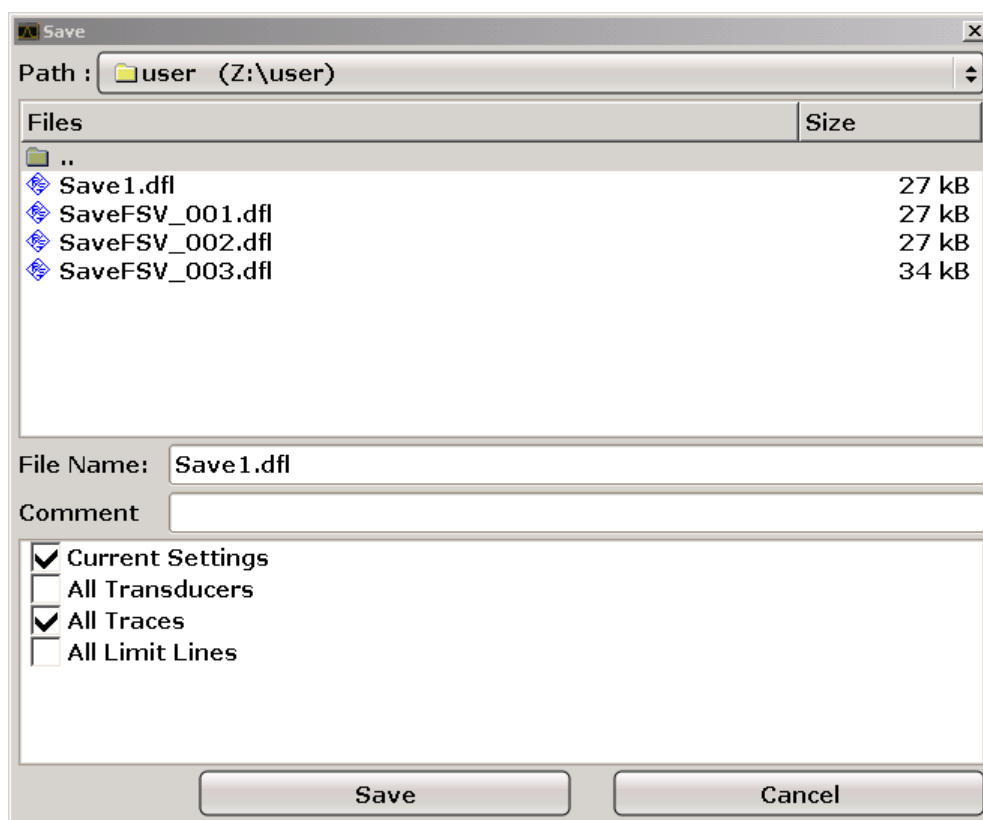
6.6 本機の設定情報のセーブ／リコール

本機は、設定の構成情報を測定データとともに、設定ファイルとしてセーブすることができます。これらのデータの保存場所は内蔵のハード・ディスクですが、ほかに USB メモリ、またはネットワーク・ドライブを選択することもできます。内蔵ハードディスクのドライブ名は C: です。

デフォルトの状態では、その時の設定情報がセーブされます。これには、測定機能の設定やリミット・ライン、トランスデュー係数などが含まれます。

6.6.1 装置設定情報のセーブ（トレースは対象外）

1. SAVE/RCL キーを押します。
2. “Save” ソフトキーを押します。
本機の設定に関するダイアログ・ボックスが表示されます。File Name フィールドは編集モードになり、新しいファイル名のデフォルト案が表示されています。



本機の設定情報のセーブ／リコール

3. 名前のデフォルトを変更したいときは、新しい名前に変更して設定ファイルをセーブします。
この名前は文字と数字の組み合わせで入力します。入力方法の詳細については、[5.3.2, “英数字パラメータの入力”](#), (ページ 81) を参照してください。
4. デフォルトの状態とは異なるディレクトリにファイルをセーブするときは、Files エリアからパスを選択します。
このパスを変更しない場合は、デフォルトのパス (C:\R_S\Instr\user) を使用します。
メモ：ここで選択したディレクトリは、以降のセーブやリコールの際に自動的に使用します。
5. “Save File” ソフトキーを押します。
設定ファイルがセーブされ、ダイアログ・ボックスが閉じます。

6.6.2 トレースのセーブ

トレースをセーブするときは、まず対応する項目を選択する必要があります。次の手順に従ってください。

1. SAVE/RCL キーを押します。
2. “Save” ソフトキーを押します。
3. 候補案の名前を変更したいときは、新しい名前を入力します。
4. “All Traces” オプションを選択します。
5. “SAVE” ボタンを押します。

6.6.3 トレース情報を含んだ設定情報のリコール

1. SAVE/RCL キーを押します。
2. “Recall” ソフトキーを押します。
3. 必要ならば、リコールするファイルのパスを選択します。
4. 次のいずれかの方法で、リコールする設定ファイルを指定します。
 - File Name フィールドをクリックし、キーボードまたはキーパッドでファイル名を入力します。

本機の設定情報のセーブ／リコール

- タッチ・スクリーンまたはマウスを使用して選択リストからファイルを選択します。
- また、次の方法もあります。
- a) “Select File” ソフトキーを押します。
ファイル・リストにフォーカスを合わせます。
 - b) ロータリ・ノブまたは矢印キーを使用して、リコールする設定ファイルにフォーカスを合わせ、ロータリ・ノブまたは ENTER キーを押して選択を確定します。
5. トレースをリコールするときは、“All Traces” オプションを選択します。
メモ：“All Traces” オプションは、選択したファイルにトレースが含まれている場合のみ使用可能です。
 6. ダイアログ・ボックスの “Recall” ボタンまたは “Recall File” ソフトキーを押します。
設定ファイルがリコールされます。リコールと同時に、選択したファイルに含まれている設定項目を検出し、使用不可能な項目については無視します。

6.6.4 自動リコールの設定

工場出荷時のデフォルト状態では、本機の電源を入れると前回電源を切ったときの装置設定がリコールされます（ただし、フロント・パネルの ON/OFF キーで電源を切った場合に限ります。3.1.6, “電源のオン／オフ”, (ページ 28) を参照)。もし本機がプリセットされていれば、再起動時にもそのプリセットがリコールされます。

設定内容を変更し、リコールする設定ファイルを指定することができます。それには、以下の手順を実行する必要があります。なお、ここで選択した設定ファイルは、ブート時にもプリセット時にもリコールされます。

1. SAVE/RCL キーを押します。
2. “Startup Recall” ソフトキーを押します。
3. “Startup Recall (On/Off)” ソフトキーを押して再呼び出し機能を起動します。
4. “Select Dataset” ソフトキーを押します。
“Startup Recall” ダイアログ・ボックスが表示されます。
5. 必要ならば、リコールするファイルのパスを選択します。
6. リコールする設定ファイル (DFL ファイル) を選択します。

7. ダイアログ・ボックスで “Select” ボタンを押します。

7 リモート制御の概要

本機は、ネットワーク（LAN インタフェース）を介してリモート制御することができます。LAN インタフェースの設定については 3.6, “ネットワーク（LAN）接続の設定”,（ページ 45）を参照ください。

GPIB インタフェースの設定については、3.8, “GPIB インタフェースの設定”,（ページ 54）を参照ください。

この章で紹介するプログラミングの各例は階層構造的に記述されています。すなわち、始めの例を基にして後ろの例を記述しています。そのため、プログラムの例で示した各モジュールを使用することで、的確に機能するプログラムを容易に組み立てられるようになっています。さらに複雑な例については、オペレーティング・マニュアルの「リモート制御のプログラミングの例」の章に紹介されていますので、そちらを参照してください。

7.1 リモート制御プログラミングの基本ステップ

以下の各例では本機のプログラム作成方法を説明し、それを基に高度なプログラム作成作業に対応していただけるようになっています。

使用したプログラミング言語は Visual Basic です。ただし、他の言語でもプログラムを実装することができます。



バック・スラッシュの使い方

C、C++ などに代表されるプログラミング言語や、MATLAB、NI Interactive Control といったプログラムでは、バック・スラッシュ記号はエスケープ・シーケンスの開始を示します（例えば「\n」で新しい行を開始します）。このようなプログラミング言語やプログラムの場合、リモート・コマンドでは 1 個のバック・スラッシュの代わりに 2 連のバック・スラッシュを使用する必要があります。例えば 7.2.4.1, “本機の設定情報のセーブ”,（ページ 157）では、

```
MMEM:STOR:STAT 1、「C:\USER\DATA\TEST1」という記述に代えて
```

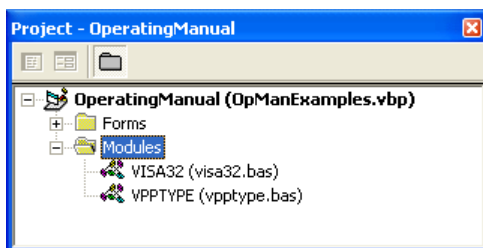
```
MMEM:STOR:STAT 1、「C:\\USER\\DATA\\TEST1」と記述します。
```

7.1.1 Visual Basic 対応のリモート制御ライブラリのリンク

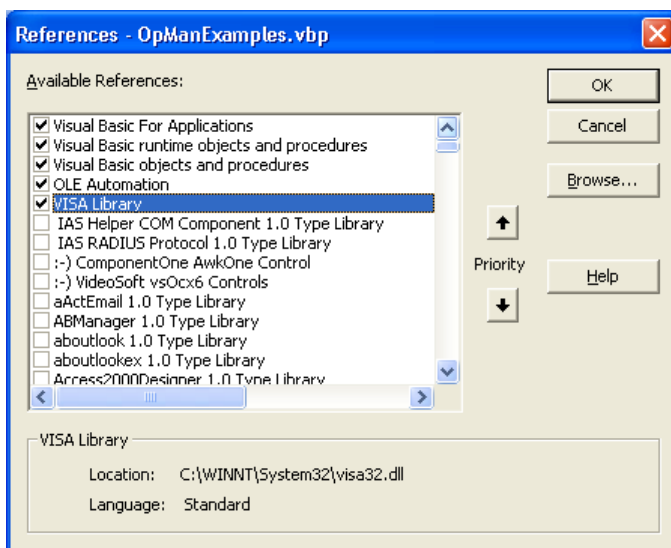
プログラミング・ノート：

- **プリント機能を使用したテキストの出力**
 下の例は、プリント・メソッドを使用し、Visual Basic 開発環境の“Immediate” ウィンドウに MyVar 変数の値を表示するものです。なお、プリント・メソッドはテキストを表示できるオブジェクトにのみ適用されます。

```
Debug.Print MyVar
```
- **VISA32.DLL の関数へのアクセス**
 ユーザが Visual Basic でコントロール・アプリケーションを作成できるようにするためには、プロジェクトには VISA32.BAS ファイルを必ず追加してください。それにより、VISA32.DLL の関数を呼び出すことが可能になります。さらに、VPPTYPE.BAS ファイルもプロジェクトに必ず加えてください。このファイルには、エラー処理、タイムアウトなどに関する定数と定義が含まれています。



visa32.bas モジュールと C:\vpptype.bas モジュールは、<VXIpnPath>\WinNT\include (通常は C:\VXIpnPath\WinNt\include) にあります。また、VISA32.DLL への参照をプロジェクトに追加する方法もあります。



リモート制御プログラミングの基本ステップ

- 応答バッファの作成

DLL は応答にゼロ終端文字列を含めて返すため、InstrRead() 関数と ilrd() 関数を呼び出す前に十分な長さの文字列を作成しておく必要があります。すなわち Visual Basic では文字列の前にその長さ指定子が挿入され、これが DLL では更新されないからです。文字列の長さ指定子を作成する手段として、次の 2 種類が提供されています。

```
Dim Rd as String * 100
Dim Rd as String
Rd = Space$(100)
```

- 読み書きのラッパー・プロシージャの作成

“VISA” 関数では、コマンド文字列と応答文字列、およびそれぞれの長さが 2 つの個別のパラメータとして要求されるため、その読み書き関数をカプセル化するとメイン・プログラム・コードの読み取りも保守も容易になります。下の例で、プロシージャ InstrWrite() では viWrite() 関数をカプセル化し、InstrRead() では viRead() をカプセル化しています。加えて、これらのラッパーにステータス・チェックも入れてあります。

```
Public Sub InstrWrite(ByVal vi As Long, ByVal Cmd As String)
Dim status As Long
Dim retCount As Long
    'Send command to instrument and check for status
status = viWrite(vi, Cmd, Len(Cmd), retCount)
    'Check for errors - this will raise an error if status is not VI_SUCCESS
CALL CheckError(vi, status)
End Sub

Public Sub InstrRead(ByVal vi As Long, Response As String, _
    ByVal count As Long, retCount As Long)
Dim status As Long
'Initialize response string
Response = Space(count)
    '...and read
status = viRead(vi, Response, count, retCount)
    'Check for errors - this will raise an error if status is not VI_SUCCESS
CALL CheckError(vi, status)
    'adjust string length
Response = Left(Response, retCount)
End Sub
```

次の関数は、ステータス／エラー・チェックを示すものです。VISA エラーが発生したときに、プロシージャで例外を発生させます。

```
Public Sub CheckError(ByVal vi As Long, status As Long)
Dim ErrorMessage As String * 1024
```

リモート制御プログラミングの基本ステップ

```
'Initialize error message string
ErrorMessage = ""
If (status < 0) Then
    'Query the error message from VISA
    If (viStatusDesc(vi, status, ErrorMessage) = VI_SUCCESS) Then
        Err.Description = ErrorMessage
    End If
    Err.Raise (status)
End If
End Sub
```

7.1.2 初期化とデフォルト状態

個々のプログラムの先頭には、すべてのサブルーチンで使用されるグローバル変数を作成する必要があります。その後、リモート制御の設定と本機の設定情報に変更を加えてデフォルトの状態を定義します。このために、InitController と InitDevice の 2 つのサブルーチンが使用されます。

7.1.2.1 グローバル変数の作成

Visual Basic では、グローバル変数はモジュール（データ拡張子 .BAS）の中にセーブされます。そのため、少なくとも 1 つのモジュール（例えば GLOBALS.BAS）を作成する必要があります。このモジュールに、すべてのサブルーチンで使用する変数（例えばリモート制御ドライバが使用するデバイス・アドレスの変数）を入れておきます。

以下に示すすべてのプログラムについて、ファイルに次の命令を含める必要があります。

```
Global analyzer As Long
Global defaultRM As Long
```

7.1.2.2 リモート制御セッションの初期化

```
REM ----- Initializing the remote control session -----
Public SUB Initialize()
    Dim status As Long
    'CALL viOpenDefaultRM to get the resource manager handle
    'Store this handle in defaultRM. The function viStatusDesc
    'returns a text description of the status code returned by viOpenDefaultRM
    status = viOpenDefaultRM(defaultRM)
    status = viStatusDesc(defaultRM, status, Response)
```

リモート制御プログラミングの基本ステップ

```
'Open the connection to the device and store the handle
'Note: The timeout value in viOpen() applies only for opening the interface
'For setting the communication timeout, set the VI_ATTR_TMO_VALUE attribute
'timeout values are in milliseconds
'This example assumes the instrument IP address 10.0.0.10
'If the network provides a name resolution mechanism, the hostname of
'the instrument can be used instead of the numeric IP address
'the resource string for GPIB would be "GPIB::20::INSTR"
status = viOpen(defaultRM, "TCPIP::10.0.0.10::INSTR", 0, 1000, analyzer)
'status = viOpen(defaultRM, "TCPIP::<hostname>::INSTR", 0, 1000, analyzer)
'status = viOpen(defaultRM, "GPIB::20::INSTR", 0, 1000, analyzer)
'Set timeout value - here 5s
status = viSetAttribute(vi, VI_ATTR_TMO_VALUE, 5000)
END SUB
REM *****
```

7.1.2.3 本機の初期化

リモート制御ステータス・レジスタ、および本機の設定情報を、デフォルト状態にセットします。

```
REM ----- Initializing the instrument -----
Public SUB InitDevice()
CALL InstrWrite(analyzer, "*CLS")      'Reset status register
CALL InstrWrite(analyzer, "*RST")     'Reset instrument
END SUB
REM*****
```

7.1.2.4 スクリーン表示のオン／オフ切り替え

デフォルト設定では、最適な測定時間を確保するために、すべてのリモート制御コマンドはスクリーンに表示されることなく実行されます。ただし、リモート制御プログラムの開発段階において、設定内容のプログラミング状況や測定結果を目視確認するためには、スクリーン表示が必要になります。

リモート制御の操作時にスクリーン表示のオン／オフを切り替えるための関数を、次の例に示します。

```
REM ----- Switching on the screen display -----
Public SUB DisplayOn()
CALL InstrWrite(analyzer, "SYST:DISP:UPD ON")
      'Switch on screen display
END SUB
REM*****
REM ----- Switching off the screen display -----
```

リモート制御プログラミングの基本ステップ

```
Public SUB DisplayOff()
CALL InstrWrite(analyzer, "SYST:DISP:UPD OFF")
    'Switch off screen display
END SUB
REM*****
```

7.1.2.5 ディスプレイのパワー・セーブ機能の設定

リモート制御で動作させているとき、測定結果をスクリーン表示しなくてもよい場合があります。SYSTEM:DISPlay:UPDate OFF コマンドを使用すると、測定結果の表示がオフとなり、リモート制御の動作速度が大きく向上します。ただし、ディスプレイの表示自体およびバックグラウンド照明はオン状態を維持しています。

表示全体もオフにしたい場合は、パワー・セーブ機能を使用する必要があります。そのときは、この機能を起動する（表示をオフにする）までの時間を設定しておきます。



表示がオフの状態フロント・パネルのいずれかのキーを押すと、ディスプレイは直ちに表示モードに切り替わります。

```
Public SUB PowerSave()
CALL InstrWrite(analyzer, "DISPlay:PSAVe:HOLDoff 1")
    'Set response time to 1 minute
CALL InstrWrite(analyzer, "DISPlay:PSAVe ON")
    'Switch on Power Save function
```

7.1.3 簡単な装置設定コマンドの送信

この例では、本機を中心周波数、スパン、および基準レベルの設定方法を示します。

```
REM ----- Instrument setting commands -----
PUBLIC SUB SimpleSettings()
CALL InstrWrite(analyzer, "FREQUENCY:CENTER 128MHz")
    'Center frequency 128 MHz
CALL InstrWrite(analyzer, "FREQUENCY:SPAN 10MHZ")
    'Set span to 10 MHz
CALL InstrWrite(analyzer, "DISPLAY:TRACE:Y:RLEVEL -10dBm")
    'Set reference level to -10dBm
END SUB
REM *****
```

リモート制御プログラミングの基本ステップ

7.1.4 手動操作への切り替え

```

REM ----- Switching instrument to manual operation -----
CALL viGpibControlREN(analyzer, VI_GPIB_REN_ADDRESS_GTL)
    'Set instrument to Local state
REM *****

```

7.1.5 本機の設定情報の読み出し

設定した情報を読み出せるようにします。それには、省略形のコマンドを使用します。

```

REM ----- Reading out instrument settings -----
PUBLIC SUB ReadSettings()
Dim retCount as Long
CFfrequency$ = SPACE$(20)    'Provide text variable (20 characters)
CALL InstrWrite(analyzer, "FREQ:CENT?")
    'Request center frequency
CALL InstrRead(analyzer, CFfrequency$, 20, retCount)
    'Read value
CR&S FSVan$ = SPACE$(20)    'Provide text variable (20 characters)
CALL InstrWrite(analyzer, "FREQ:SPAN?")
    'Request span
CALL InstrRead(analyzer, CR&S FSVan$, 20, retCount)
    'Read value
RLlevel$ = SPACE$(20)    'Provide text variable (20 characters)
CALL InstrWrite(analyzer, "DISP:TRAC:Y:RLEV?")
    'Request ref level setting
CALL InstrRead(analyzer, RLlevel$, 20, retCount)
    'Read value
REM ----- Displaying values in the Immediate window -----
Debug.Print "Center frequency: "; CFfrequency$,
Debug.Print "Span:                "; CR&S FSVan$,
Debug.Print "Reference level:    "; RLlevel$,
END SUB
REM *****

```

7.1.6 マーカの位置決めとマーカ位置の読み出し

```

REM ----- Example of marker function -----
PUBLIC SUB ReadMarker()
Dim retCount as Long
CALL InstrWrite(analyzer, "CALC:MARKER ON;MARKER:MAX")
    'Activate marker 1 and search for peak

```

リモート制御プログラミングの基本ステップ

```

MKmark$ = SPACE$(30)      'Provide text variable (30 characters)
CALL InstrWrite(analyzer, "CALC:MARK:X?;Y?")
    'Query frequency and level
CALL InstrRead(analyzer, MKmark$, 30, retCount)
    'Read value
REM ----- Displaying values in the Immediate window -----
Debug.Print "Marker frequency/level "; MKmark$,
END SUB
REM *****

```

7.1.7 コマンドの同期化

次のプログラム例に示す同期メソッドについては、CD 版のオペレーティング・マニュアル（英文）の「Remote Control - Basics」の章の「Command Sequence and Command Synchronization」セクションに詳述されています。

```

REM ----- Commands for command synchronization -----
PUBLIC SUB SweepSync()
Dim retCount as Long
Dim SRQWaitTimeout As Long
Dim eventType As Long
Dim eventVi As Long
REM The command INITiate[:IMMEDIATE] starts a single sweep if the
REM command INIT:CONT OFF has already been sent. The next command
REM must not be carried out until a full sweep has been completed.
CALL InstrWrite(analyzer, "INIT:CONT OFF")
REM ----- First method: Using *WAI -----
CALL InstrWrite(analyzer, "ABOR;INIT:IMM; *WAI")
REM ----- Second method: Using *OPC? -----
OpcOk$ = SPACE$(2)      'Provide space for *OPC? response
CALL InstrWrite(analyzer, "ABOR;INIT:IMM; *OPC?")
REM ----- In this case, the controller can use other instruments -----
CALL InstrRead(analyzer, OpcOk$, 2, retCount)
    'Wait for "1" from *OPC?
REM ----- Third method: Using *OPC -----
REM In order for the Service Request function to be used with a GPIB
REM driver from National Instruments, the setting "Disable
REM Auto Serial Poll" must be set to "yes" with IBCONF!
CALL InstrWrite(analyzer, "*SRE 32")      'Enable Service Request for ESR
CALL InstrWrite(analyzer, "*ESE 1")      'Set event enable bit for operation
    'complete bit
CALL viEnableEvent(vi, VI_EVENT_SERVICE_REQ, VI_QUEUE, 0)
    'Enable the event for service request
CALL InstrWrite(analyzer, "ABOR;INIT:IMM; *OPC")
    'Start sweep with Synchronization to OPC

```


プログラミングの詳細例

```

SRQWaitTimeout = 5000      'Allow 5s for sweep completion
'Now wait for the service request
CALL viWaitOnEvent(vi, VI_EVENT_SERVICE_REQ, SRQWaitTimeout, _
    eventType, eventVi)
CALL viClose(eventVi)      'Close the context before continuing
CALL viDisableEvent(vi, VI_EVENT_SERVICE_REQ, VI_QUEUE)
    'Disable subsequent events
REM Resume main program here.
END SUB
REM *****

```

7.1.7.1 出カバッファの読み出し

```

REM ----- Subroutine for the individual STB bits -----
Public SUB OutputQueue()    'Reading the output queue
Dim retCount as Long
result$ = SPACE$(100)      'Create space for response
CALL InstrRead(analyzer, result$, 100, retCount)
Debug.Print "Contents of Output Queue : "; result$
END SUB
REM *****

```

7.1.7.2 エラー・メッセージの読み出し

```

REM ----- Subroutine for evaluating the error queue -----
Public SUB ErrorQueueHandler()
Dim retCount as Long
ERROR$ = SPACE$(100)      Subroutine for evaluating the error queue
CALL InstrWrite(analyzer, "SYSTEM:ERROR?")
CALL InstrRead(analyzer, ERROR$, 100, retCount)
Debug.Print "Error Description : "; ERROR$
END SUB
REM *****

```

7.2 プログラミングの詳細例

以下の各セクションでは、測定に関するパラメータや機能の設定、一般的な設定、プリントアウト、データ管理などのプログラミングの例を示します。

7.2.1 本機のデフォルト設定

以下の例では、本機のデフォルト設定内容を変更する代表的な方法を示します。

なお、ここに示す適用例のうち、実際に必要になる設定は一部だけです。例えば、分解能帯域幅や、ビデオ帯域幅、掃引時間は設定の必要がありません。これらは、デフォルトでスパンの設定にリンクして自動的に計算されるからです。同様に入力アッテネーションも、デフォルトで基準レベルに従って自動的に計算されます。またレベル検出器は、デフォルトでトレース・モードの選択にリンクしています。

デフォルトで自動計算される設定項目は、各プログラム例の中でアスタリスク(*)を付けて示してあります。

7.2.1.1 リモート制御ステータス・レジスタの設定

```
REM *****
Public Sub SetupStatusReg()

'----- IEEE 488.2 status register -----
CALL InstrWrite(analyzer,"*CLS")      'Reset status registers
CALL InstrWrite(analyzer,"*SRE 168")  'Enable Service Request for
    'STAT:OPER-,STAT:QUES- and ESR-Register
CALL InstrWrite(analyzer,"*ESE 61")   'Set event enable bit for:
    'operation complete 'command-, execution-,
    'device dependent- and query error
'----- SCPI status register -----
CALL InstrWrite(analyzer,"STAT:OPER:ENAB 0")
    'Disable OPERation Status reg
CALL InstrWrite(analyzer,"STAT:QUES:ENAB 0")
    'Disable questionable Statusreg
End Sub
REM *****
```

7.2.1.2 測定に関するデフォルト設定

```
REM *****
Public Sub SetupInstrument()

'----- Default setting f the R&S FSV -----
CALL SetupStatusReg      'Configure status registers
CALL InstrWrite(analyzer,"*RST")      'Reset instrument
CALL InstrWrite(analyzer,"SYST:DISP:UPD ON")
    'ON: screen display on
    'OFF: off (improved performance)
```

プログラミングの詳細例

```
CALL InstrWrite(analyzer,"INIT:CONT OFF")
    'Single sweep mode
'----- Frequency setting -----
CALL InstrWrite(analyzer,"FREQUENCY:CENTER 100MHz")
    'Center frequency
CALL InstrWrite(analyzer,"FREQ:SPAN 1 MHz")
    'Span
'----- Level setting -----
CALL InstrWrite(analyzer,"DISP:WIND:TRAC:Y:RLEV -20dBm")
    'Reference level
CALL InstrWrite(analyzer,"INP:ATT 10dB")
    'Input attenuation (*)
'----- Level scaling -----
CALL InstrWrite(analyzer,"DISP:WIND:TRAC:Y:SPAC LOG")
    'Log level axis
CALL InstrWrite(analyzer,"DISP:WIND:TRAC:Y:SCAL 100dB")
    'Level range
CALL InstrWrite(analyzer,"DISP:WIND:TRAC:Y:SCAL:MODE ABS")
    'Absolute scaling
CALL InstrWrite(analyzer,"CALC:UNIT:POW DBM")
    'y meas. unit
'----- Trace and detector setting -----
CALL InstrWrite(analyzer,"DISP:TRAC1:MODE AVER")
    'Trace1 average
CALL InstrWrite(analyzer,"AVER:TYPE VID")
    'Average mode video; "LIN" for linear
CALL InstrWrite(analyzer,"SWE:COUN 10")
    'Sweep count
CALL InstrWrite(analyzer,"DISP:TRAC2 OFF")
    'Trace2 blank
CALL InstrWrite(analyzer,"DISP:TRAC3 OFF")
    'Trace3 blank
CALL InstrWrite(analyzer,"DISP:TRAC4 OFF")
    'Trace4 blank
CALL InstrWrite(analyzer,"DISP:TRAC5 OFF")
    'Trace5 blank
CALL InstrWrite(analyzer,"DISP:TRAC6 OFF")
    'Trace6 blank
CALL InstrWrite(analyzer,"CALC:MATH:STAT OFF")
    'Trace difference off
CALL InstrWrite(analyzer,"DET1 RMS")
    'Detector Trace1 (*)
CALL InstrWrite(analyzer,"DET2:AUTO ON")
    'Detector Trace2 (*)
CALL InstrWrite(analyzer,"DET3:AUTO ON")
    'Detector Trace3 (*)
```

```
CALL InstrWrite(analyzer,"DET4:AUTO ON")
'Detector Trace4  (*)
CALL InstrWrite(analyzer,"DET5:AUTO ON")
'Detector Trace5  (*)
CALL InstrWrite(analyzer,"DET6:AUTO ON")
'Detector Trace6  (*)
'----- Bandwidths and sweep time -----
CALL InstrWrite(analyzer,"BAND:RES 100KHz")
'Resolution bandwidth (*)
CALL InstrWrite(analyzer,"BAND:VID 1MHz")
'Video bandwidth  (*)
CALL InstrWrite(analyzer,"SWE:TIME 100ms")
'Sweep time  (*)
END SUB
```

7.2.2 マーカとデルタ・マーカの使用

マーカは、トレース上のポイントを指し示すために置かれ、その点の測定値を読み取ったり、表示領域をすばやく選択するために使用します。

7.2.2.1 マーカ・サーチ機能、およびサーチ範囲の制限

下の例は、100MHz の AM 変調をかけた、次のような特性の信号を基にしていません。

搬送波レベル	-30dBm
AF 周波数	100 kHz
変調度	50 %

マーカ 1 とデルタ・マーカ 2 が、トレース内のレベルのピーク점에セットされます。次に、その周波数とレベルが読み取られます。次に示す測定では、本機のデフォルト設定 (SetupInstrument) を測定に使用できます。

```
REM *****
Public Sub MarkerSearch()
Dim retCount as Long
result$ = Space$(100)
CALL SetupInstrument 'Default Setting
'----- Peak search without search range limits-----
CALL InstrWrite(analyzer,"INIT:CONT OFF")
'Switch to single sweep
CALL InstrWrite(analyzer,"CALC:MARK:PEXC 6DB")
```

プログラミングの詳細例

```

'Define peak excursion
CALL InstrWrite(analyzer,"CALC:MARK:STAT ON")
'Enable marker 1
CALL InstrWrite(analyzer,"CALC:MARK:TRAC 1")
'Set marker 1 to trace 1
CALL InstrWrite(analyzer,"INIT;*WAI")      'Perform sweep with sync
CALL InstrWrite(analyzer,"CALC:MARK:MAX;X?;Y?")
'Marker to peak; read frequency and level
CALL InstrRead(analyzer, result$, 100, retCount)
Debug.Print "Marker 1: ";result$
CALL InstrWrite(analyzer,"CALC:DELT2:STAT ON;MAX;MAX:LEFT")
'Activate delta marker 2,
'Set to peak and then to next peak left
CALL InstrWrite(analyzer,"CALC:DELT2:X?;Y?")
'Read delta marker 2 frequency and level
result$ = Space$(100)
CALL InstrRead(analyzer, result$, 100, retCount)
Debug.Print "Delta 2: ";result$
'----- Peak search with search range limit in x direction -----
CALL InstrWrite(analyzer,"CALC:MARK:X:SLIM:STAT ON;LEFT _
0Hz;RIGHT 100.05MHz")
'Activate search limit,
'set at right below AF
CALL InstrWrite(analyzer,"CALC:DELT3:STAT ON;MAX;MAX:RIGHT")
'Activate delta marker 3,
'set to peak and then to next peak right
CALL InstrWrite(analyzer,"CALC:DELT3:X:REL?;;CALC:DELT3:Y?")
'Read delta marker 3 frequency and level;
'both must have a value of 0
result$ = Space$(100)
CALL InstrRead(analyzer, result$, 100, retCount)
Print "Delta 3: ";result$
'----- Peak search with search range limit in y direction -----
CALL InstrWrite(analyzer,"CALC:THR:STAT ON")
CALL InstrWrite(analyzer,"CALC:THR -35DBM")
'Activate threshold and set it above the AF
CALL InstrWrite(analyzer,"CALC:DELT3:STAT ON;MAX;MAX:NEXT")
'Activate delta marker 3,
'set to peak and then to next peak
'=> is not found
CALL InstrWrite(analyzer,"CALC:DELT3:X:REL?;;CALC:DELT3:Y?")
'Query and read delta marker 3
'frequency and level;
'both must have a value of 0
result$ = Space$(100)
CALL InstrRead(analyzer, result$, 100, retCount)

```

```

Debug.Print "Delta 3: ";result$
'----- Setting center frequency and reference level with markers -----
CALL InstrWrite(analyzer,"CALC:MARK2:FUNC:CENT")
    'Delta marker 2 -> marker and
    'center frequency = marker 2
CALL InstrWrite(analyzer,"CALC:MARK2:FUNC:REF")
    'Ref level = marker 2
CALL InstrWrite(analyzer,"INIT;*WAI")      'Sweep with sync
END SUB
REM *****

```

7.2.2.2 周波数のカウント

次の例は、レベルが -30dBm で 100MHz の信号を基にしています。ここでも、本機のデフォルト設定 (SetupInstrument) が使用できます。周波数カウントの目的は、 100MHz の信号の正確な周波数を決定することです。

```

REM *****
Public Sub MarkerCount()
Dim retCount as Long
CALL SetupInstrument      'Default setting
'----- Defining signal frequency with frequency counter -----
CALL InstrWrite(analyzer,"INIT:CONT OFF")
    'Switch to single sweep
CALL InstrWrite(analyzer,"CALC:MARK:PEXC 6DB")
    'Define peak excursion
CALL InstrWrite(analyzer,"CALC:MARK:STAT ON")
    'Activate marker 1
CALL InstrWrite(analyzer,"CALC:MARK:TRAC 1")
    'Set marker 1 to trace 1
CALL InstrWrite(analyzer,"CALC:MARK:X 100MHz")
    'Set marker 1 to 100 MHz
CALL InstrWrite(analyzer,"CALC:MARK:COUNT ON")
    'Activate frequency counter
CALL InstrWrite(analyzer,"INIT;*WAI")      'Perform sweep with sync
CALL InstrWrite(analyzer,"CALC:MARK:COUNT:FREQ?")
    'Query and read measured frequency
result$ = Space$(100)
CALL InstrRead(analyzer, result$, 100, retCount)
Debug.Print "Marker Count Freq: ";result$
END SUB
REM *****

```

7.2.2.3 固定基準点を用いた作業

次の例は、レベルが -20dBm で 100MHz の信号を基にしています。したがって、高調波成分は 200MHz 、 300MHz 、などにあります。高品質の信号源では、これらの高調波成分は本機のダイナミック・レンジから外れてしまうことがあります。とは言え、高調波の抑圧度を測定するためには、高調波を測定するときに基準レベルの設定をより高感度にする必要があります。その場合、搬送波をノッチ・フィルタで抑圧して、本機の入力回路がオーバーロード状態にならないようにする必要があります。

そのため次の例では、それぞれ異なる基準レベルを設定して 2 つの測定を実行しています。まず搬送波に対して基準レベルを高く設定し、次に 3 次高調波の周波数に対して基準レベルを低く設定しています。

測定の開始時には、ここでも本機のデフォルト設定 (“SetupInstrument”) を使用し、測定に合わせて調整を行います。

```
REM *****
Public Sub RefFixed()
Dim retCount as Long
CALL SetupInstrument 'Default setting
'----- Measuring the reference point -----
CALL InstrWrite(analyzer,"INIT:CONT OFF")
'Switch to single sweep
CALL InstrWrite(analyzer,"CALC:MARK:PEXC 6DB")
'Define peak excursion
CALL InstrWrite(analyzer,"CALC:MARK:STAT ON")
'Activate marker 1
CALL InstrWrite(analyzer,"CALC:MARK:TRAC 1")
'Set marker 1 to trace 1
CALL InstrWrite(analyzer,"INIT;*WAI") 'Perform sweep with sync
CALL InstrWrite(analyzer,"CALC:MARK:MAX")
'Set marker 1 to 100 MHz
CALL InstrWrite(analyzer,"CALC:DELT:FUNC:FIX ON")
'Define reference point
'----- Setting frequency, level and bandwidth for measuring harmonics -----
CALL InstrWrite(analyzer,"FREQ:CENT 400MHz;Span 1MHz")
'Set freq of 3rd harmonic
CALL InstrWrite(analyzer,"BAND:RES 1kHz")
'Set suitable RBW
CALL InstrWrite(analyzer,"SWEEP:TIME:AUTO ON")
'Couple sweep time
CALL InstrWrite(analyzer,"INP:ATT:AUTO ON")
'Select more sensitive level setting
CALL InstrWrite(analyzer,"DISP:WIND:TRAC:Y:RLEV -50dBm")
CALL InstrWrite(analyzer,"INIT;*WAI") 'Perform sweep with sync
```

プログラミングの詳細例

```
CALL InstrWrite(analyzer,"CALC:DELT:MAX;X:REL?;Y?")
    'Read delta marker
result$ = Space$(100)
CALL InstrRead(analyzer, result$, 100, retCount)
    'Read frequency and level
Debug.Print "Deltamarker 1: "; result$
END SUB
REM *****
```

7.2.2.4 雑音と位相雑音の測定

位相雑音を測定するときに、1Hz の帯域幅に換算した雑音電力が搬送波に隣接する信号の電力単位として設定されます。測定対象の周波数と搬送波の間のオフセットとしては、10kHz が一般に使用されます。

雑音の測定では、その雑音の絶対値レベルは帯域幅 1Hz に換算されて表示されます。

次の例でも同じく、レベルが -30dBm で 100MHz の信号を基にしています。搬送波から 10kHz 離れた位相雑音と雑音のそれぞれを識別するために、2 つのマーカーを使用しています。

```
REM *****
Public Sub Noise()
Dim retCount as Long
'----- Default setting of the R&S FSV -----
CALL SetupStatusReg    'Configure status register
CALL InstrWrite(analyzer,"*RST")    'Reset instrument
CALL InstrWrite(analyzer,"INIT:CONT OFF")
    'Single sweep mode
'----- Setting the frequency -----
CALL InstrWrite(analyzer,"FREQUENCY:CENTER 100MHz")
    'Center frequency
CALL InstrWrite(analyzer,"FREQ:SPAN 100 kHz")
    'Span
'----- Setting the level -----
CALL InstrWrite(analyzer,"DISP:WIND:TRAC:Y:RLEV -20dBm")
    'Reference level
CALL InstrWrite(analyzer,"INIT;*WAI")    'Perform sweep with sync
'----- Setting the reference point -----
CALL InstrWrite(analyzer,"CALC:MARK:PEXC 6DB")
    'Define peak excursion
CALL InstrWrite(analyzer,"CALC:MARK:STAT ON")
    'Activate marker 1
CALL InstrWrite(analyzer,"CALC:MARK:TRAC 1")
    'Set marker 1 to trace 1
```



```

CALL InstrWrite(analyzer,"CALC:MARK:MAX")
    'Set marker 1 to 100 MHz
CALL InstrWrite(analyzer,"CALC:DELT:FUNC:PNO ON")
    'Define reference point for phase noise
'----- Measuring the phase noise -----
CALL InstrWrite(analyzer,"CALC:DELT:X 10kHz")
    'Position delta marker
CALL InstrWrite(analyzer,"CALC:DELT:FUNC:PNO:RES?")
    'Query and output phase noise result
result$ = Space$(100)
CALL InstrRead(analyzer, result$, 100, retCount)
Debug.Print "Phase Noise [dBc/Hz]: "; result$
'----- Measuring the noise -----
CALL InstrWrite(analyzer,"CALC:MARK:X 99.96MHz")
    'Position marker 1
CALL InstrWrite(analyzer,"CALC:MARK:FUNC:NOIS:RES?")
    'Query and output result
result$ = Space$(100)
CALL InstrRead(analyzer, result$, 100, retCount)
Print "Noise [dBm/Hz]: "; result$
END SUB
REM *****

```

7.2.3 トレース・データの読み出し

次に示す例では、デフォルト設定で取得したトレース・データを本機から読み出し、スクリーン上にリスト表示します。データの読み出しは、最初にバイナリ形式で、次に ASCII 形式で行われます。それぞれ $\text{span} > 0$ と $\text{span} = 0$ に対応しています。

バイナリ形式については、データ長識別子を持ったメッセージのヘッダを評価し、X 軸の値の計算に使用します。

ASCII 形式では、単にレベル値のリストが出力されます。

バイナリ・データは次の 3 ステップで読み出されます。

1. データ長指定子の桁数を読み出す。
2. データ長指定子自体を読み出す。
3. トレース・データ自体を読み出す。

プログラミングの詳細例

この手順は、同じ型のデータ型（Visual Basic などでの配列）を持つ構造のみをサポートするプログラミング言語の場合に必要なになります。バイナリ・データではヘッダとデータ部分のデータ型が異なるからです。

“VISA” ライブラリでは、文字列バッファに読み込むためのアルゴリズムのみを提供しています。データを単精度値の配列に変換するためには、文字列の内容をそのデータ型のバッファにコピーする必要があります。次の例では、このコピー処理にオペレーティング・システムの関数を使用しています。関数宣言を次のようにモジュール（.bas）に追加する必要があります。



配列の大きさ

測定データ用の配列は、本機のトレース・データ（691 個の測定ポイント）を扱うのに十分なスペースが確保されるサイズになっています。

```
REM *****
Public Sub ReadTrace()
'----- Creating variables -----
Dim traceData(1400) As Single      'Buffer for floating point binary data
Dim digits As Byte                'Number of characters in
    'length specification
Dim traceBytes As Integer         'Len. of trace data in bytes
Dim traceValues As Integer       'No. of meas. values in buff.
Dim BinBuffer as String * 5600   'String buffer for binary data
Dim retCount as Long
asciiResult$ = Space$(28000)     'Buffer for ASCII trace data
result$ = Space$(100)           'Buffer for simple results
startFreq$ = Space$(100)       'Buffer for start frequency
span$ = Space$(100)            'Buffer for span
'----- Default setting of the R&S FSV -----
CALL SetupInstrument             'Default setting
CALL InstrWrite(analyzer,"INIT:CONT OFF")
    'Switch to single sweep
CALL InstrWrite(analyzer,"INIT;*WAI")      'Perform sweep with sync
'----- Defining the frequency range for output -----
CALL InstrWrite(analyzer,"FREQ:START?")    'Read start frequency
CALL InstrRead(analyzer,startFreq$, 100, retCount)
startFreq = Val(startFreq$)
CALL InstrWrite(analyzer,"FREQ:SPAN?")     'Read span
CALL InstrRead(analyzer,span$, 100, retCount)
span = Val(span$)
'----- Reading out in binary format -----
CALL InstrWrite(analyzer, "FORMAT REAL,32")
    'Set binary format
CALL InstrWrite(analyzer, "TRAC1? TRACE1")
```

```

'Read trace 1
CALL InstrRead(analyzer, result$, 2, retCount)
'Read and store length
digits = Val(Mid$(result$, 2, 1)) 'spec. for number of characters
result$ = Space$(100) 'Reinitialize buffer
CALL InstrRead(analyzer, result$, digits, retCount)
'Read and store length
traceBytes = Val(Left$(result$, digits))
'specification
CALL InstrRead(analyzer, BinBuffer, traceBytes, retCount)
'Read trace data into buffer
CopyMemory traceData(0), ByVal BinBuffer, traceBytes
'Copy data into float array
'----- Outputting binary data as frequency/level pairs -----
traceValues = traceBytes/4 'Single precision = 4 bytes
stepsize = span/traceValues 'Calculate frequency step size
For i = 0 To traceValues - 1
Debug.Print "Value["; i; "] = "; startFreq+stepsize*i; ", "; traceData(i)
Next i
'----- Default setting of zero span -----
CALL InstrWrite(analyzer, "FREQ:SPAN 0Hz")
'Switch to zero span
CALL InstrWrite(analyzer, "INIT;*WAI") 'Perform sweep with sync
'----- Reading out in ASCII format -----
CALL InstrWrite(analyzer, "FORMAT ASCII")
'Set ASCII format
CALL InstrWrite(analyzer, "TRAC1? TRACE1")
'Read and output
CALL InstrRead(analyzer, asciiResult$)
Print "Contents of Trac1: ", asciiResult$ 'trace 1
END SUB
REM *****

```

7.2.4 本機の設定情報のセーブ／リコール

測定条件の設定とそれによる測定値のデータは、セーブしておいて再度リコールすることができます。本機を起動またはプリセットするときどのデータ・セッ トをリコールするかを指定することができます。

7.2.4.1 本機の設定情報のセーブ

次に示す例では、セーブする設定と測定データを最初に定義しますが、そのときにハードウェアの設定のみがセーブされます。ただし完全を期すために、その他

の設定項目用の選択コマンドは“OFF”状態を付けて指定し、他と区別していません。

```

REM *****
Public Sub StoreSettings()
'This subroutine selects the settings to be stored and creates the
'data record "TEST1" in the directory C:\R_S\Instr\user. It uses the default
'setting and resets the instrument after the setting is stored.
'----- Default settings of the R&S FSV -----
CALL SetupInstrument
CALL InstrWrite(analyzer,"INIT:CONT OFF")
    'Change to single sweep
CALL InstrWrite(analyzer,"INIT;*WAI")      'Perform sweep with sync
'----- Selection of settings to be stored -----
CALL InstrWrite(analyzer,"MMEM:SEL:HWS ON")
    'Store hardware settings
CALL InstrWrite(analyzer,"MMEM:SEL:TRAC OFF")
    'Do not store any traces
CALL InstrWrite(analyzer,"MMEM:SEL:LIN:ALL OFF")
    'Store only the activated limit lines
'----- Storing on the instrument -----
CALL InstrWrite(analyzer,"MMEM:STOR:STAT 1,'C:\R_S\Instr\user\TEST1'")
'----- Resetting the instrument -----
CALL InstrWrite(analyzer,"*RST")
END SUB
REM *****

```

7.2.4.2 本機の設定情報のリコール

次の例では、C:\R_S\Instr\user にセーブされている TEST1 データ・レコードが本機にリコールされます。

```

REM *****
Public Sub LoadSettings()
'This subroutine loads the TEST1 data record in the directory
'C:\R_S\Instr\user.
'----- Default setting of the status register -----
CALL SetupStatusReg      'Configure status register
'----- Loading the data record -----
CALL InstrWrite(analyzer,"MMEM:LOAD:STAT 1,'C:\R_S\Instr\user\TEST1'")
'----- Perform measurement using loaded data record -----
CALL InstrWrite(analyzer,"DISP:TRAC1:MODE WRIT")
    'Set trace to Clr/Write
CALL InstrWrite(analyzer,"INIT;*WAI")      'Start sweep

```

```
END SUB
REM *****
```

7.2.4.3 起動時再呼出し用データ・レコードの設定

次に示す例では、まず最初に本機をデフォルトの状態にします。その次に、C:\R_S\Instr\user 以下にセーブされている TEST1 データ・レコードが、起動時再呼出し関数用に選択されます。つまり、*RST プリセットが実行されるごと、および本機が起動されるごとに、データ・レコードが設定されるようになります。この例はデモンストレーション用であるため、再び *RST によってリセットされています。

```
REM *****
Public Sub StartupRecallSettings()
'----- Resetting the R&S FSV -----
CALL InstrWrite(analyzer,"*RST")
'----- Default setting of the status register -----
CALL SetupStatusReg 'Configure status register
'----- Selecting the startup recall data record -----
CALL InstrWrite(analyzer,"MEM:LOAD:AUTO 1,'C:\R_S\Instr\user\TEST1'")
'----- Activating the startup recall data record -----
CALL InstrWrite(analyzer,"*RST")
END SUB
REM *****
```

7.2.5 プリントアウトの設定および起動

次の例は、測定スクリーンをプリントアウトするために出力形式と出力デバイスを設定する方法を示しています。手順は次の通りです。

1. プリントアウトしたい測定を設定します。
2. どの出力デバイスが本機で使用できるのかをチェックします。
3. 出力デバイスを選択します。
4. 出力インターフェースを選択します
5. 出力形式を設定します。
6. 測定の終了に同期してプリントアウトを開始します。

プログラミングの詳細例

ここでは、100MHz で -20dBm の信号を測定する条件を仮定しています。また、リストされている使用可能なプリンタのうち 6 番目のプリンタを選び、測定値の出力をまずそのプリンタに送り、次にファイルにセーブします。

```

REM *****
Public Sub HCopy()
Dim retCount as Long
Dim SRQWaitTimeout As Long
Dim eventType As Long
Dim eventVi As Long
Dim statusSRQ As Long
DIM Devices(100) as string      'Create buffer for printer name
FOR i = 0 TO 49
    Devices$(i) = Space$(50)    'Preallocate buffer for printer name
NEXT i
'----- Default setting of the R&S FSV -----
CALL SetupStatusReg      'Configure status register
CALL InstrWrite(analyzer,"*RST")      'Reset instrument
CALL InstrWrite(analyzer,"INIT:CONT OFF")
    'Single sweep mode
CALL InstrWrite(analyzer,"SYST:DISP:UPD ON")
    'Screen display on
'----- Measurement settings -----
CALL InstrWrite(analyzer,"FREQ:CENT 100MHz;SPAN 10MHz")
    'Frequency setting
CALL InstrWrite(analyzer,"DISP:TRAC:Y:RLEV -10dBm")
    'Reference level
CALL InstrWrite(analyzer,"INIT;*WAI")      'Perform measurement
'----- Querying the available output devices -----
CALL InstrWrite(analyzer,"SYST:COMM:PRIN:ENUM:FIRSt?")
    'Read out and display first output device
CALL InstrRead(analyzer,Devices$(0), 50, retCount)
Debug.Print "Printer 0: "+Devices$(0)
For i = 1 to 99
    CALL InstrWrite(analyzer,"SYST:COMM:PRIN:ENUM:NEXT?")
        'Read out next printer name
    CALL InstrRead(analyzer,Devices$(i))
    IF Left$(Devices$(i),2) = "" THEN GOTO SelectDevice
        'Stop at end of list
    Debug.Print "Printer"+Str$(i)+" : " Devices$(i)
        'Display printer name
NEXT i
SelectDevice:
'---- Selection of output device, printer language and output interface ----
CALL InstrWrite(analyzer,"SYST:COMM:PRIN:SEL "+ Devices(6))
    'Printer selection #6

```

プログラミングの詳細例

```

CALL InstrWrite(analyzer,"HCOP:DEST 'SYST:COMM:PRIN'")
    'Configuration: "Printout to
    'printer interface"
CALL InstrWrite(analyzer,"HCOP:DEV:LANG GDI")
    'Printers require printer language 'GDI'
'----- Selection of orientation (portrait/landscape) and colour/BW -----
CALL InstrWrite(analyzer,"HCOP:PAGE:ORI PORT")
    'Portrait orientation
CALL InstrWrite(analyzer,"HCOP:DEV:COL OFF")
    'Black-and-white printout
'----- Configuring and starting the printout -----
CALL InstrWrite(analyzer,"HCOP:ITEM:ALL")
    'All screen contents
'CALL InstrWrite(analyzer,"HCOP:ITEM:TRAC:STAT ON")
    'Alternative: only traces
CALL InstrWrite(analyzer,"*CLS")      'Reset status registers
CALL viEnableEvent(vi, VI_EVENT_SERVICE_REQ, VI_QUEUE, 0)
    'Enable the event for service request
CALL InstrWrite(analyzer,"HCOP;*OPC")
    'Start printout
SRQWaitTimeout = 5000      'Allow 5s for completion
    'Now wait for the service request
statusSRQ = viWaitOnEvent(vi, VI_EVENT_SERVICE_REQ, SRQWaitTimeout, _
    eventType, eventVi)
CALL viClose(eventVi)      'Close the context before continuing
CALL viDisableEvent(vi, VI_EVENT_SERVICE_REQ, VI_QUEUE)
    'Disable subsequent events
IF NOT(statusSRQ = 0) THEN CALL Srq      'If SRQ not detected =>
    'Subroutine for evaluation
'---- Printout in WMF format (BMP format) to file -----
CALL InstrWrite(analyzer,"HCOP:DEST 'MMEM'")
    'Configuration: "Printout to file"
CALL InstrWrite(analyzer,"HCOP:DEV:LANG WMF")
    'WMF file format
'CALL InstrWrite(analyzer,"HCOP:DEV:LANG BMP")
    'BMP file format
CALL InstrWrite(analyzer,"MMEM:NAME 'C:\R_S\Instr\user\PRINT1.WMF'")
    'Define file name
CALL InstrWrite(analyzer,"*CLS")      'Reset Status registers
CALL viEnableEvent(vi, VI_EVENT_SERVICE_REQ, VI_QUEUE, 0)
    'Enable the event for service request
CALL InstrWrite(analyzer,"HCOP:IMMEDIATE;*OPC")
    'Start printout
SRQWaitTimeout = 5000      'Allow 5s for completion
    ' Now wait for the service request
statusSRQ = viWaitOnEvent(vi, VI_EVENT_SERVICE_REQ, SRQWaitTimeout, _

```

```
        eventType, eventVi)
CALL viClose(eventVi)      'Close the context before continuing
CALL viDisableEvent(vi, VI_EVENT_SERVICE_REQ, VI_QUEUE)
        'Disable subsequent events
IF NOT(statusSRQ = 0) THEN CALL Srq      'If SRQ not detected =>
        'Subroutine for evaluation
END SUB
REM *****
```


8 付録

8.1 付録：プリンタ・インタフェース

ローカル・プリンタ（USB）またはネットワーク・プリンタを使用してプリンタ出力することができます。このセクションでは、このうちのローカル・プリンタのインストールについて説明します。ネットワーク・プリンタのインストールについては、[8.2, “付録：LAN インタフェース”](#), (ページ 166) に説明があります。

ここでは、マウスと外付けキーボードを使用した操作手順を説明します。このほかに、本機のフロント・パネルを使用してローカル・プリンタをインストールすることもできます。フロント・パネルからの操作の詳細については、[5, “基本的な操作”](#), (ページ 62) を参照してください。

インストールが完了したら、プリンタ出力できるように本機を設定する必要があります。プリンタを選択して設定する方法については、[3.4.6, “プリンタの選択と設定”](#), (ページ 40) を参照してください。

ローカル・プリンタのインストール

ローカル・プリンタとしては USB インタフェースを持つプリンタを接続することができます。コネクタについては、[2, “フロント・パネルとリア・パネル”](#), (ページ 9) を参照してください。



インストールに使用する外部デバイス

プリンタ・ドライバをコンピュータにインストールするときに、外部デバイスとして LAN もしくは USB デバイス（USB メモリまたは CD-ROM）を使用できます。

ローカル・プリンタのインストールは、マニュアルでもリモート制御でも可能です。ここでは、リモート・デスクトップを経由したインストールについて説明しています。またプリンタ・メーカーから提供されるプリンタのインストール方法の説明書も、あわせて参照してください。

ローカル・プリンタのインストール方法

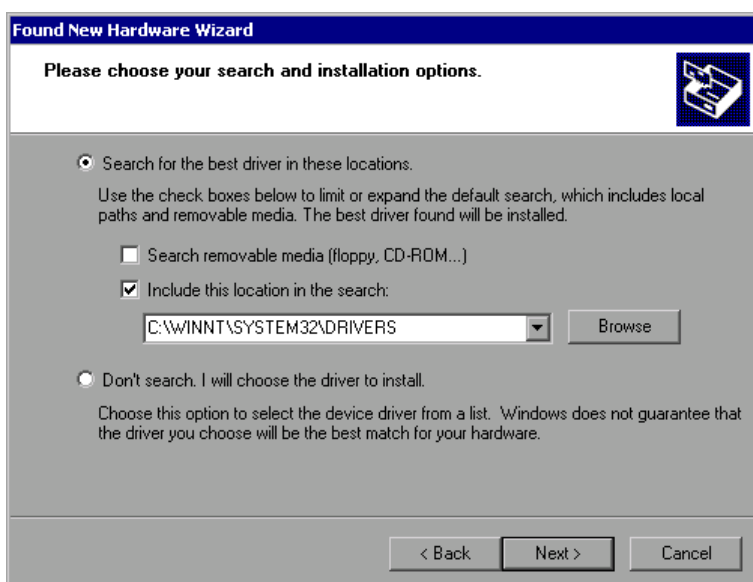
1. USB デバイスを使用してドライバをインストールする場合は、USB デバイスを本機にインストールし、かつ本機に接続してから、インストール作業に取り掛かってください。
2. ド LAN 接続を使用してドライバをインストールする場合は、インストール作業を始める前に、対応するネットワーク・ドライブの割り当てをマウントしておく必要があります。
3. 本機のフロント・パネルにある USB コネクタにプリンタを接続します。“Found New Hardware Wizard” ダイアログ・ボックスの最初のページが表示されます。



4. “Install the software automatically” オプションを選択します。インストール・プロセスが自動的に実行され、それが終了するとダイアログ・ボックスが表示されます。ステップ 15 に進んでください。ドライバ・ソフトウェアが見つからない場合は、エラー・メッセージが表示されます。



5. “Don't prompt me again to install this software” オプションを無効にします。
6. “Finish” をクリックします。
ウィザードの元のページが再び表示されます。
7. “Install from a list” オプションまたは “specific location” オプションを選択します。
8. “Next” をクリックします。
ウィザードの次のページが表示されます。



9. CD を CD-ROM ドライブに挿入します。
10. “Include this location in the search” オプションを有効にします。

11. “Browse” ボタンをクリックします。
フォルダを参照するためのダイアログ・ボックスが表示されます。
12. CD-ROM ドライブから、プリンタ・ドライバがあるフォルダを選択します。
13. “OK” をクリックします。このボタンは、選択したフォルダにドライバがある場合のみ使用可能です。
ウィザードの元のページが再び表示されます。
14. “Next” をクリックします。
選択したフォルダでプリンタ・ドライバを検索し、見つかったプリンタ・ドライバ・ファイルを C: にコピーします。ドライバのインストールが完了すると、ダイアログ・ボックスが表示されます。



15. “Finish” をクリックしてインストールを終了します。

8.2 付録 : LAN インタフェース

このセクションでは LAN インタフェースの補足情報を説明します。本機をネットワークに接続し、ネットワーク・プロトコルを設定する方法については、[3.6, “ネットワーク \(LAN\) 接続の設定”](#), (ページ 45) を参照してください。



ネットワークの制限およびパスワードの入力

一部の手順では、ユーザ名とパスワードを入力する必要があります。この入力には、タッチ・スクリーンとオン・スクリーン・キーボード、またはマウスと外付けキーボードを使用します（5, “[基本的な操作](#)”, (ページ 62) および 3.2, “[USB デバイスの接続](#)”, (ページ 31) を参照）。

8.2.1 ネットワークの設定

ネットワーク設定が確立すると、本機と他のコンピュータの間でデータの交換が可能になり、ネットワーク・プリンタも使用できるようになります。

ネットワーク上で各種操作を行うには、ネットワーク上の各種リソースへのアクセス権限を得ている必要があります。ネットワーク上の代表的なリソースとしては、他のコンピュータのファイル・ディレクトリや共用プリンタなどがあります。ネットワークへのアクセス権は、ネットワーク管理者またはサーバ管理者から与えられます。

ネットワーク上で操作するには、次に示す管理と操作が必要です。

- 8.2.1.1, “[コンピュータ名の変更](#)”, (ページ 168)
- 8.2.1.2, “[ドメインまたはワークグループの変更](#)”, (ページ 169)
- 8.2.1.3, “[ネットワークに接続しないで本機を使用する場合](#)”, (ページ 170)
- 8.2.1.4, “[ユーザの作成](#)”, (ページ 170)
- 8.2.1.5, “[ユーザ・パスワードの変更](#)”, (ページ 173)
- 8.2.1.6, “[ネットワークへのログイン](#)”, (ページ 175)
- 8.2.1.7, “[自動ログインの仕組](#)”, (ページ 175)
- 8.2.1.8, “[ネットワーク・ドライブの割り当て](#)”, (ページ 175)
- 8.2.1.9, “[ネットワーク・プリンタのインストール](#)”, (ページ 177)
- 8.2.1.10, “[ディレクトリの共有 \(Microsoft ネットワークの場合のみ\)](#)”, (ページ 181)

警告**ネットワークへの接続**

本機をネットワークに接続したりネットワークの設定を行うときは、あらかじめネットワークの管理者に相談してください。特に大規模な LAN の場合には注意が必要です。エラーが発生すると、ネットワーク全体に影響することがあります。

ウィルス対策が施されていないネットワークに本機を接続すると、本機ソフトウェアを損傷する恐れがありますので、絶対に接続しないでください。

本機をネットワークの一部として組み込むために、次のシステム・プロパティを変更することができます。

- コンピュータ名
- ドメイン
- ワークグループ

8.2.1.1 コンピュータ名の変更

1. フロント・パネルの SETUP ファンクション・キーを押します。
2. “General Setup” ソフトキーを押します。
3. “Network Address” ソフトキーを押します。
サブメニューが表示されます。
4. “Computer Name” ソフトキーを押し、コンピュータ名を入力します。
5. 無効なコンピュータ名を入力した場合は、ステータス・ラインに “message out of range” エラーが表示されます。編集ダイアログ・ボックスは開いたままなので、入力し直すことができます。
設定が正しければ、設定内容がセーブされ、本機の再起動を求めるメッセージが表示されます。
6. 表示されたメッセージを確定 (“Yes” ボタンを押す) すると、本機が再起動します。

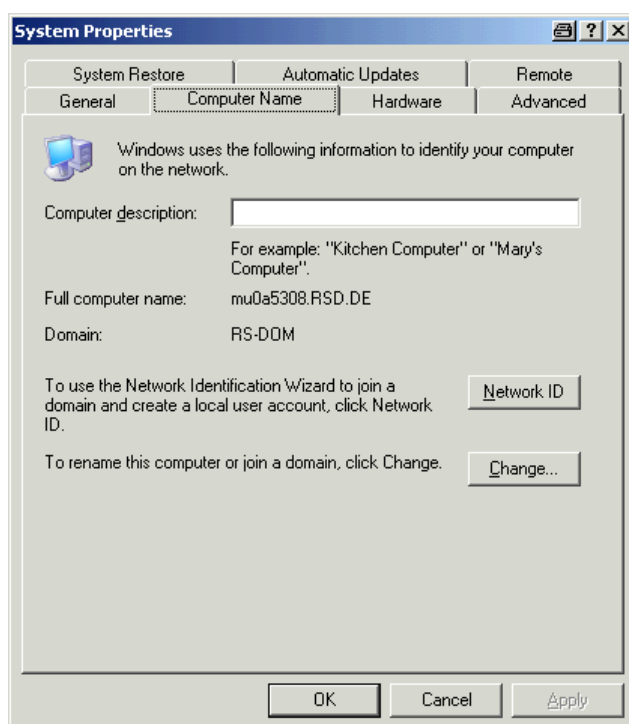
8.2.1.2 ドメインまたはワークグループの変更



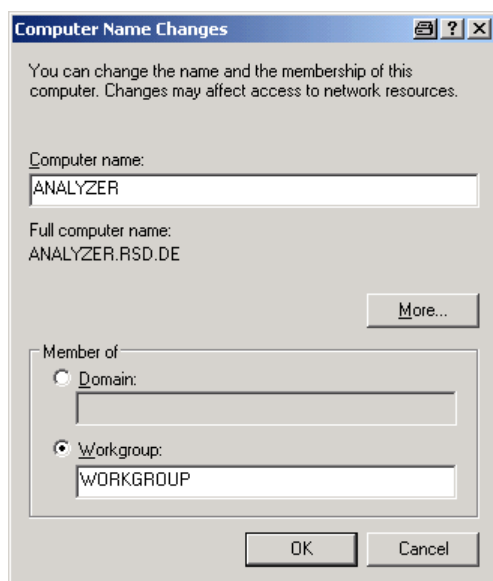
設定の変更

ここで説明する項目以外の設定変更は、ネットワーク管理者に相談してから行ってください。

1. “Start” メニューから、“Settings”、“Control Panel”、“System” の順に選択します。
“System Properties” ダイアログ・ボックスが表示されます。
2. “Computer Name” タブを選択します。



3. “Change” ボタンをクリックします。
コンピュータ名やドメイン、ワークグループを変更するためのダイアログ・ボックスが表示されます。



4. “Domain” または “Workgroup” を入力します。
5. “OK” を押して変更を確定します。
6. ここで本機の再起動を求められた場合は、“Yes” をクリックします。システムが再起動します。

8.2.1.3 ネットワークに接続しないで本機を使用する場合

ネットワークとの接続を一時的または恒久的に行なわずに本機を使用する場合、Windows NT とは違って、特に必要な操作はありません。Windows XP では、ネットワーク接続が切れていることを自動的に検出し、その場合には本機の電源投入時に接続の設定を行いません。

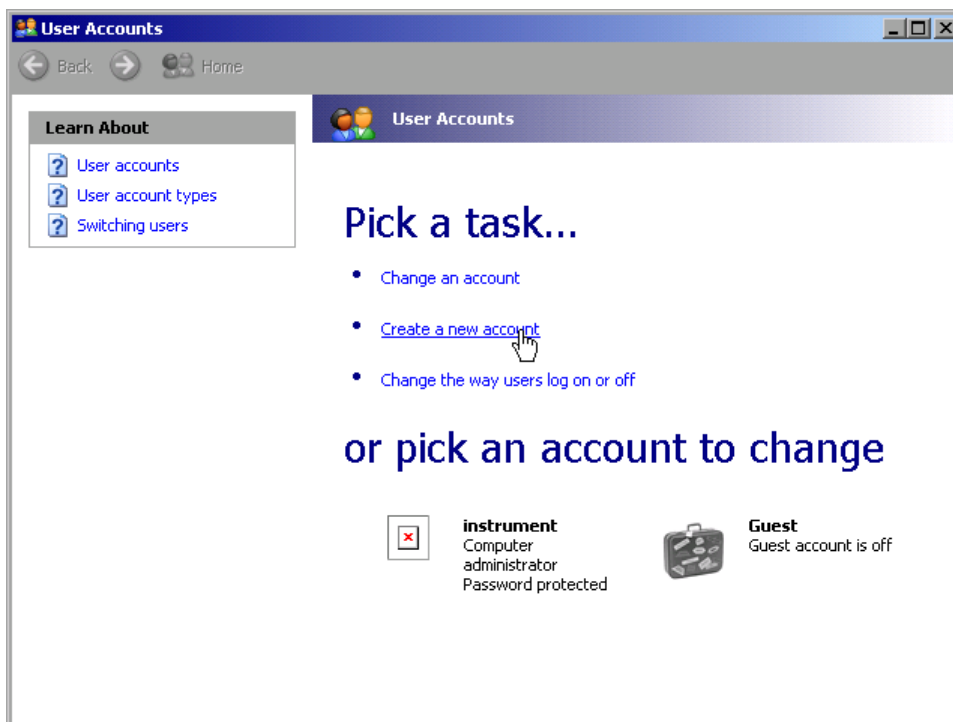
ユーザ名とパスワードの入力を求められない場合は、“[自動ログイン機能の有効化](#)”（ページ 175）の説明に従って操作してください。

8.2.1.4 ユーザの作成

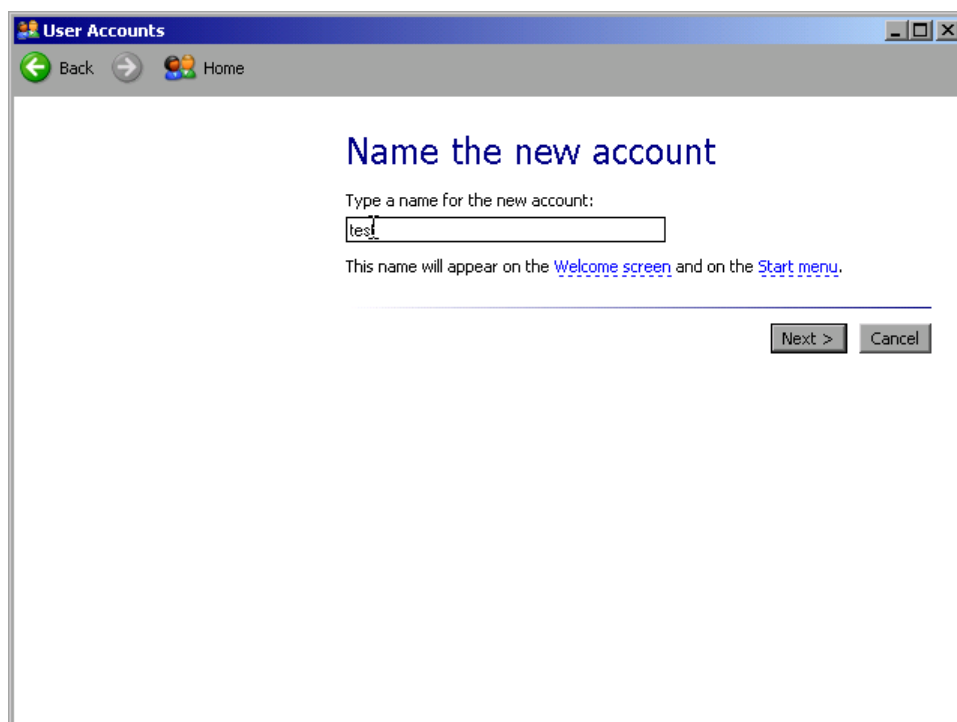
ネットワークに関連するソフトウェアをインストールして、次に本機の電源を入れた時点で、エラーメッセージが表示されます。これは、“instrument” というユーザ名（Windows XP での自動ログイン時の「ユーザ ID」）がネットワークに存在しないからです。そのため、ネットワークと Windows XP の両方に同じユーザ名を作成し、かつパスワードをネットワーク・パスワード用に対応させてから、自動ログインの設定を解除しなければなりません。

ネットワーク内に新しいユーザを作成するのは、ネットワーク管理者の担当になります。新規のユーザは、本機の“User Account”ウィザードを使用して作成することができます。

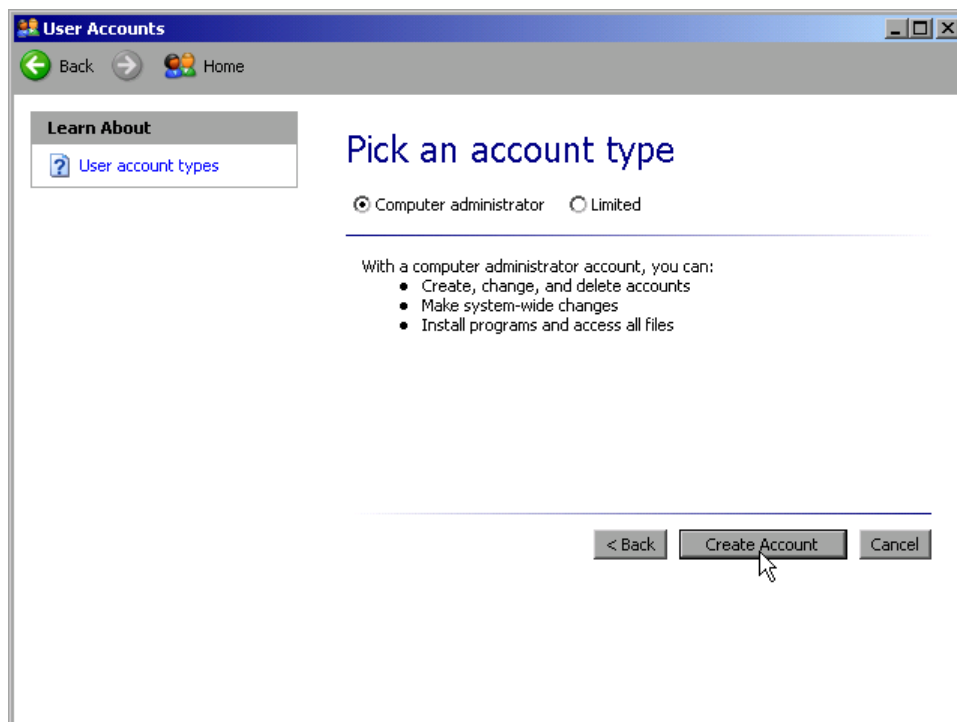
1. “Start”メニューから、“Settings”、“Control Panel”、“User Accounts”の順に選択します。
“Pick a task”ダイアログ・ボックスが開き、ユーザ管理用のウィザードが起動します。



2. “Create a new account”をクリックします。
新規ユーザ名を入力するためのダイアログ・ボックスが表示されます。



3. 文字入力フィールドに新規ユーザの名前を入力し、“Next” をクリックします。ユーザの権限を定義するための “Pick an account type” ダイアログ・ボックスが表示されます。



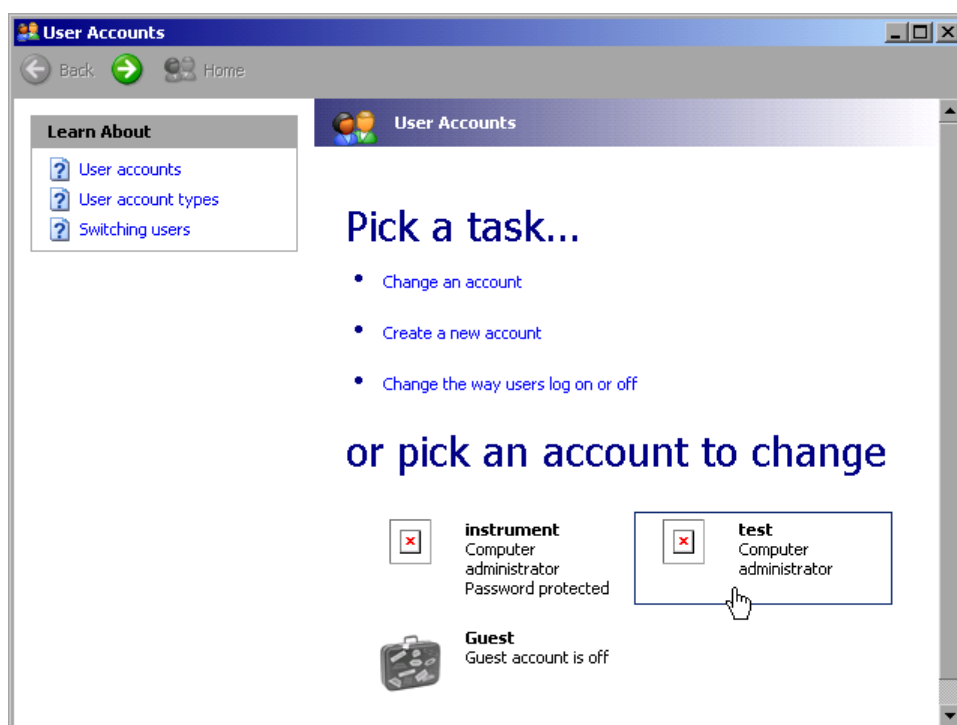
4. “Create Account” ボタンをクリックします。

これで、新規ユーザが作成されました。

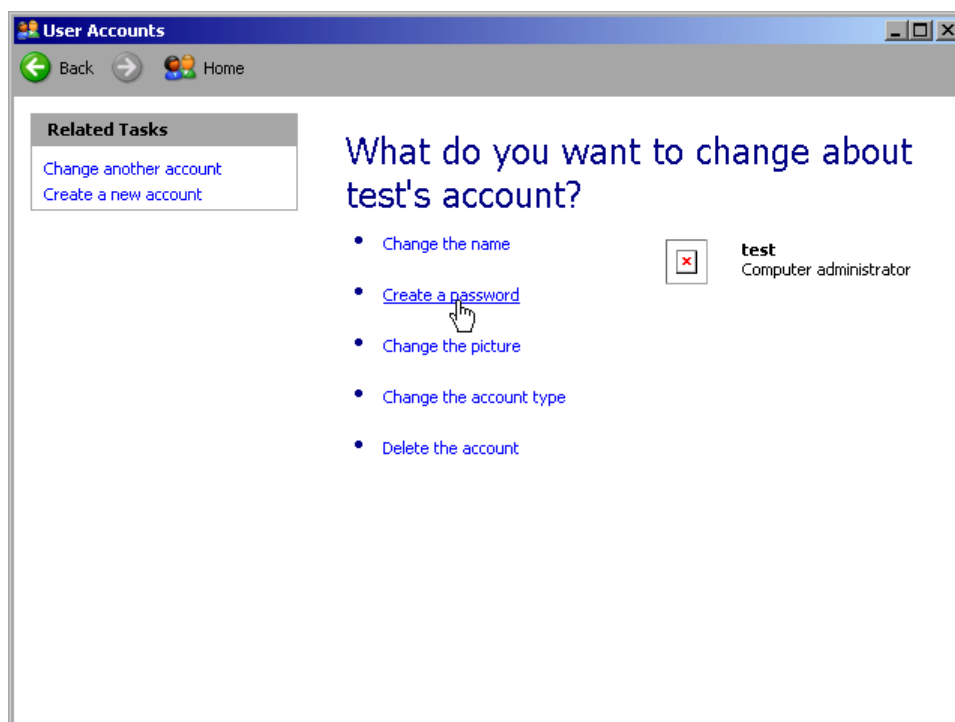
8.2.1.5 ユーザ・パスワードの変更

本機で新規ユーザを作成した後、パスワードをネットワーク・パスワードに対応させる必要があります。この処理は、“User Account” ウィザードでも行うことができます。

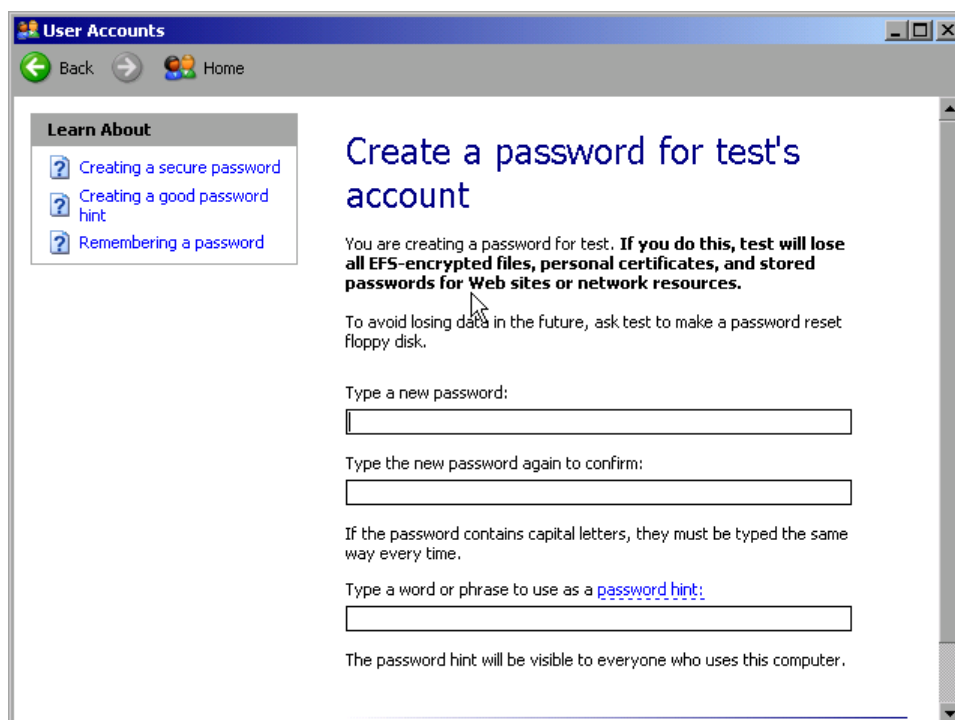
1. “Start” メニューから、“Settings”、“Control Panel”、“User Accounts” の順に選択します。
“Pick a task” ダイアログ・ボックスが開き、ユーザ管理用のウィザードが起動します。



2. 希望するユーザ・アカウントを選択します（この例では“Test”）。
希望する操作を選択するためのダイアログ・ボックスが表示されます。



3. “Create a password” をクリックします。
新しいパスワードを入力するためのダイアログ・ボックスが表示されます。



4. 新しいパスワードを一番上のテキスト行に入力し、確認のためにその下の行にも同じパスワードを入力します。
5. ページの最後にある “Create Password” ボタンをクリックします。

これで、新しいパスワードが有効になりました。

8.2.1.6 ネットワークへのログイン

オペレーティング・システムにログインすると同時に、ネットワークにも自動的にログインします。ただし、ユーザ名とパスワードは Windows XP とネットワークで同一でなければなりません。

8.2.1.7 自動ログインの仕組

自動ログインの無効化

本機は、Windows XP に自動的にログインするように設定されて出荷されます。この自動ログインを解除するには、次の手順を実行します。

1. “Start” メニューから “Run” を選択します。
“Run” ダイアログ・ボックスが表示されます。
2. 次のコマンドを入力します。C:\R_S\INSTR\USER\NO_AUTOLOGIN.REG
3. ENTER キーを押して確定します。
これで自動ログインは無効化されました。次に電源を入れるときには、ファームウェアの起動前にユーザ名とパスワードの入力を求められます。

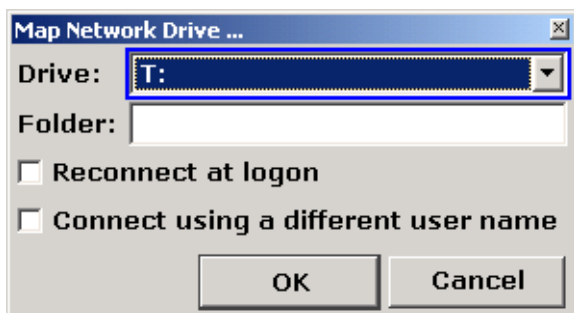
自動ログイン機能の有効化

1. “Start” メニューから “Run” を選択します。
“Run” ダイアログ・ボックスが表示されます。
2. 次のコマンドを入力します。C:\R_S\INSTR\USER\AUTOLOGIN.REG
3. ENTER キーを押して確定します。
これで自動ログインが有効化しました。次回に電源を入れると、自動ログインを実行します。

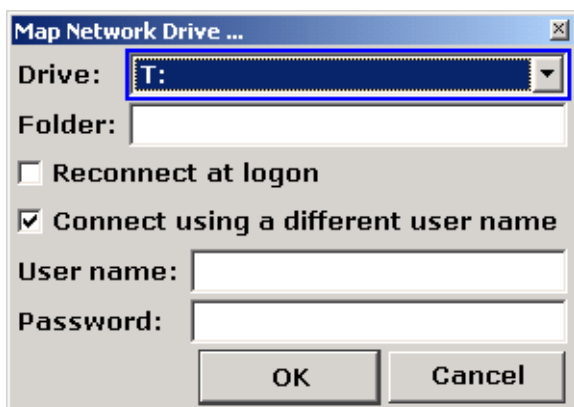
8.2.1.8 ネットワーク・ドライブの割り当て

1. SAVE/RCL キーを押します。
2. “File Manager” ソフトキーを押します。

3. “More” ソフトキーを押します。
4. “Network Drive” ソフトキーを押します。
“Map Network Drive” ダイアログ・ボックスが表示されます。



5. “Drive” リストを押してネットワーク・ドライブ・リストを開き、割り当てたいドライブを選択します。
また、次の方法もあります。
 - “Map Network Drive” ソフトキーを押して “Drive” リストをフォーカスします。
 - ENTER を押してネットワーク・ドライブ・リストを開き、割り当てたいドライブを矢印キーで選択します。
6. 本機の起動時に自動的に接続されるように設定するには、“Map Network Drive” ダイアログ・ボックスで “Reconnect at logon” オプションを選択します。
7. 別のユーザ名で接続するときは、“Connect using a different user name” オプションを選択します。
“Map Network Drive” ダイアログ・ボックスが拡張され、“User name” と “Password” のフィールドが追加されます。



8. 自分のユーザ名とパスワードを入力します。
9. “OK” を押して確定します。

割り当てをしたドライブがエクスプローラに表示されます。

メモ： アクセスを認められたネットワークのみと接続されます。

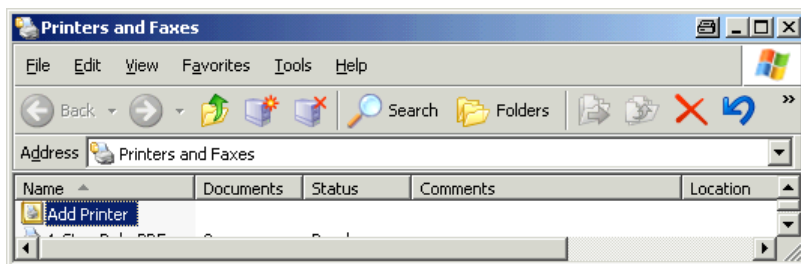
ネットワーク・ドライブの切断

1. SAVE/RCL キーを押します。
2. “File Manager” ソフトキーを押します。
3. “More” ソフトキーを押します。
4. “Network Drive” ソフトキーを押します。
5. “Disconnect Network Drive” ソフトキーを押します。
“Disconnect Network Drive” ダイアログ・ボックスが表示されます。
6. “Drive” リストで、切断したいドライブを選択します。
7. “OK” を押して確定します。

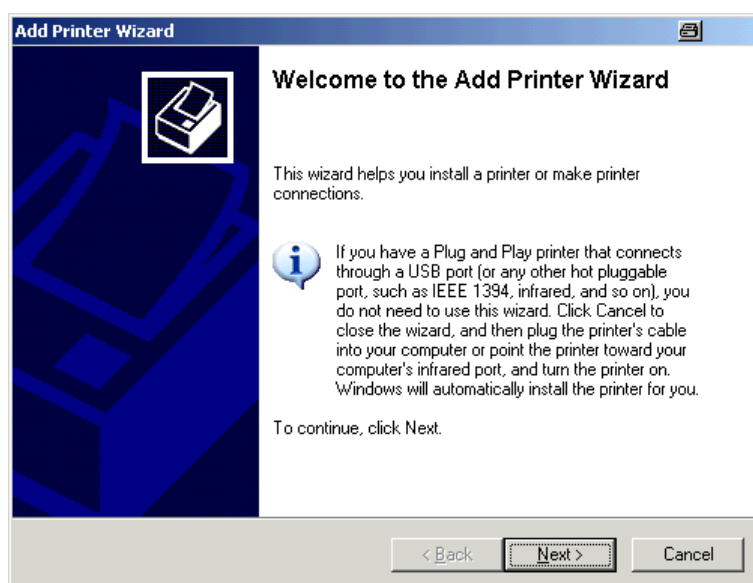
8.2.1.9 ネットワーク・プリンタのインストール

本機をネットワークに接続したら、ネットワーク・プリンタでプリンタ出力できるように設定する必要があります。プリンタの選択と設定方法については、[3.4.6, “プリンタの選択と設定”](#), (ページ 40) を参照してください。

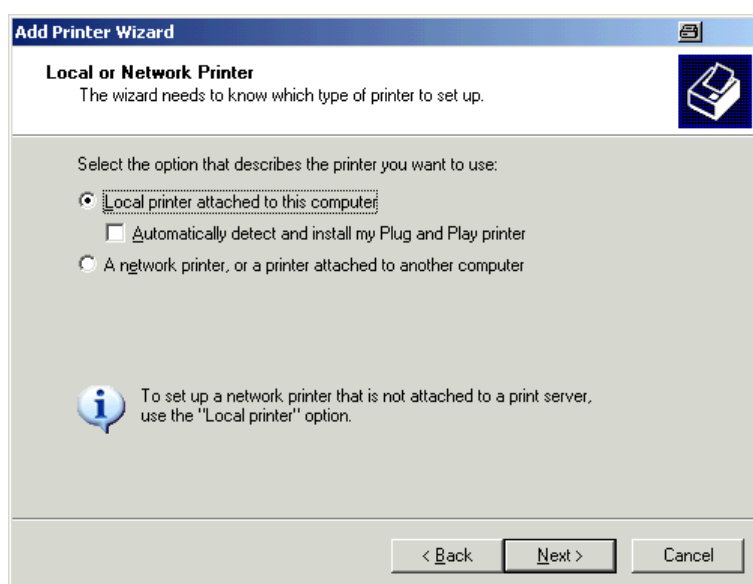
1. フロント・パネルの PRINT キーを押します。
2. “Install Printer” ソフトキーを押して Windows の “Printers and Faxes” ダイアログ・ボックスを開きます。



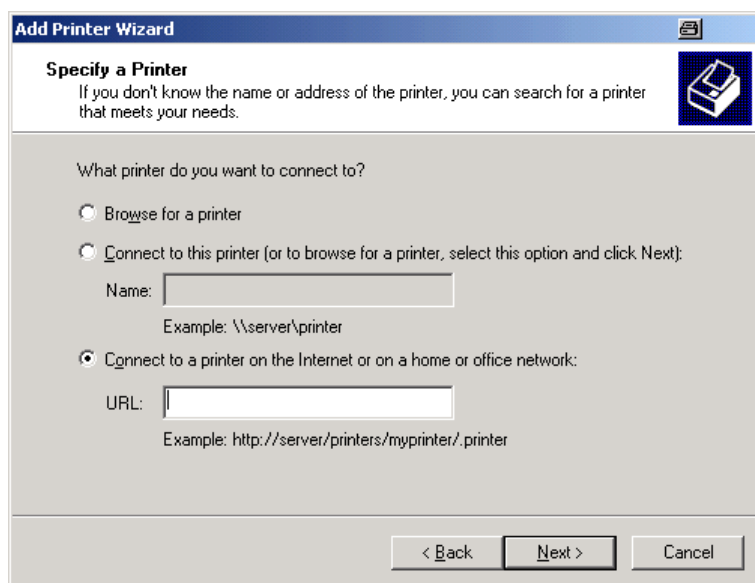
3. リストから “Add Printer” を選択します。
プリンタ・ウィザードのウィンドウが表示されます。



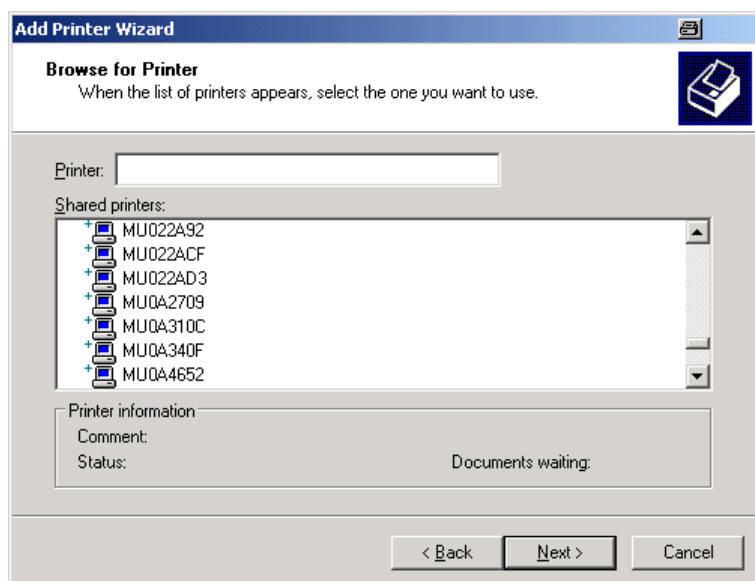
4. "Next" を押して次に進みます。
"Local or Network Printer" ウィンドウが表示されます。



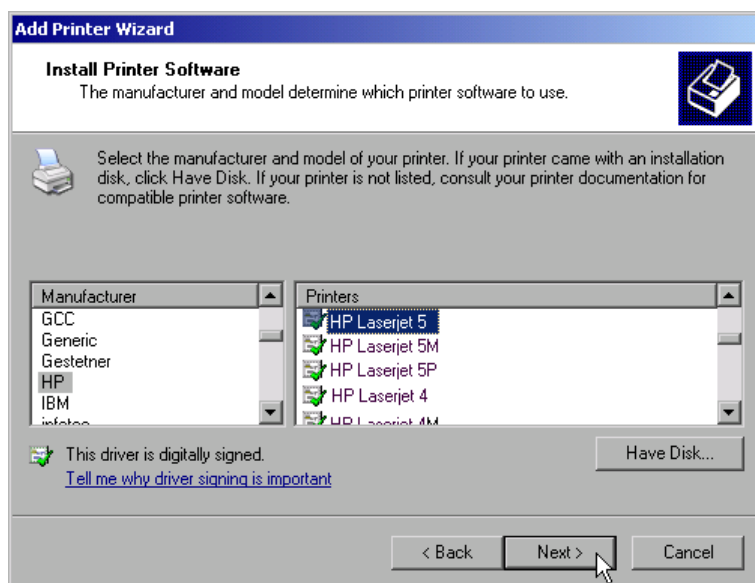
5. "A network printer, or a printer attached to another computer" オプションを選択します。
6. "Next" を押して次に進みます。
"Specify a Printer" ウィンドウが表示されます。



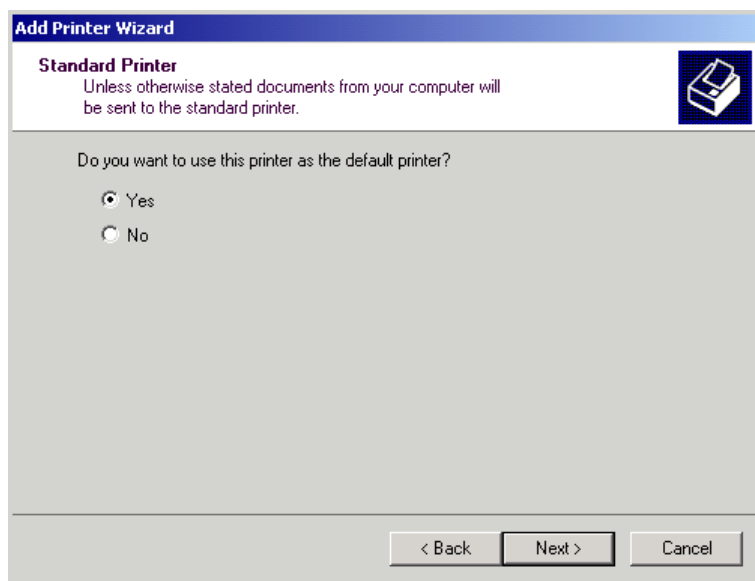
7. “Next” を押して次に進みます。
使用可能なプリンタが表示されます。



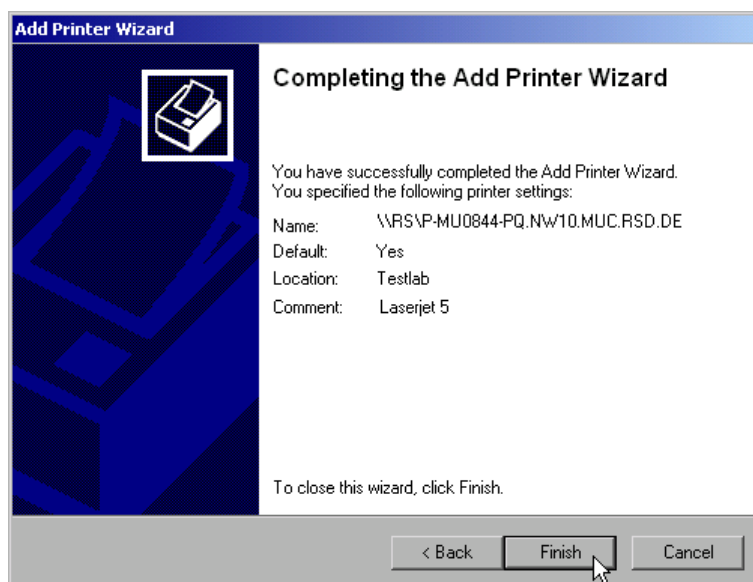
8. 使用するプリンタを選択します。
9. “Next” を押して次に進みます。
10. プリンタ・ドライバのインストールに確認を求めるメッセージが表示されたら、ENTER キーを押します。
使用可能なプリンタ・ドライバのリストが表示されます。



11. “Manufacturers” リストで、該当するメーカーを選択します。
上記の例では、HP Laserjet 5 がネットワーク・プリンタとしてインストールされます。
12. “Printers” リストで、適切なプリンタ・ドライバを選択します。
13. 目的のプリンタがリストにない場合は、そのドライバがインストールされていないことを表します。そのときは、“Have Disk” ボタンを押します。使用するプリンタ・ドライバの入ったディスクを挿入し、“Install From Disk” ダイアログ・ボックスを“OK” ボタンを押して閉じ、プリンタ・ドライバを選択します。
14. “Next” を押して次に進みます。
“Standard Printer” ウィンドウが表示されます。



- このプリンタをデフォルト・プリンタとして設定したいときは、“Yes” を選択します。
- “Next” を押して次に進みます。
インストール・ウィザードの最後のページが表示されます。

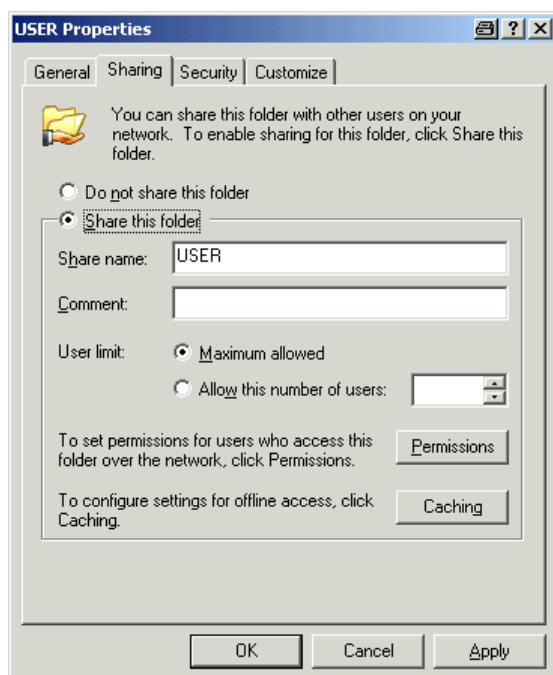


- “Finish” ボタンを押します。

8.2.1.10 ディレクトリの共有 (Microsoft ネットワークの場合のみ)

ディレクトリを共有すると、他のユーザとデータを使用できるようになります。ただし、Microsoft ネットワーク内でのみ可能です。共有は、ファイルまたはディレクトリのプロパティで設定します。

- “Start” から “Programs”、“Accessories”、“Windows Explorer” の順に選択します。
- 目的のフォルダを右ボタン・クリックします。
- 表示されたメニューから “Sharing and Security” を選択します。
ディレクトリ共有のダイアログ・ボックスが表示されます。



4. “Sharing” タブを開きます。
5. “Share this folder” オプションを選択します。
6. 必要に応じて次の設定を変更します。

“Share name”:	エクスプローラで表示ディレクトリの名前
“Comment”:	共有ディレクトリに関するコメント
“User limit”:	ディレクトリに同時にアクセスできるユーザ数
“Permissions”:	ユーザのアクセス権 (read only、read and write、all)
“Caching”:	ディレクトリの内容にすばやくアクセスできるようにローカルにバッファしておくこと

7. “OK” をクリックして設定内容を確定します。
ドライブが共有され、エクスプローラの中ではディレクトリ記号の下に手を添えた形で表示されます。



8.2.2 XP リモート・デスクトップ を使用したリモート操作

製造ラインでの測定やテストでは、リモート操作による保守と診断など、測定器の中央監視による効率化が求められています。本機は、Windows XP のリモート・デスクトップ・ソフトウェアを内蔵し、製造現場の要求に対応することができま

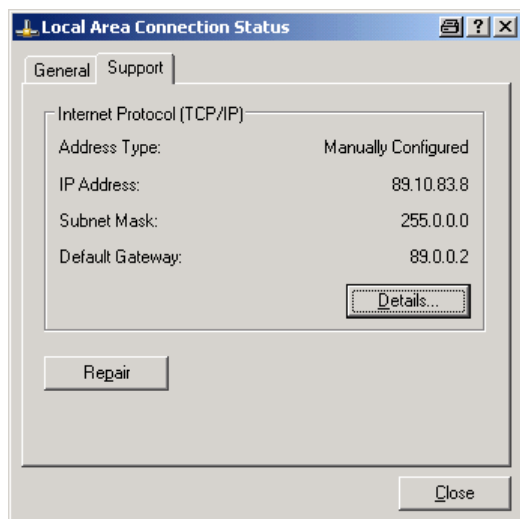
す。このリモート操作に使用するコンピュータを、ここでは“controller”と呼びます。

- 仮想のフロント・パネル（ソフト・フロント・パネル）からが可能
- コントローラから直接測定結果のプリントアウトが可能
- 測コントローラのハード・ディスクに測定結果をセーブが可能

本機は LAN 経由での接続の他、内蔵のモデム経由での接続もサポートしています。このセクションでは、本機の設定、およびコントローラのリモート・デスクトップ・クライアントの設定について説明します。モデム接続のセットアップ方法の詳細については、Window XP の説明書を参照してください。

8.2.2.1 リモート操作対応にするための本機の設定

1. “Start” メニューから “Settings” を選択し、次に “Network Connections” を選択します。
2. “Network Connections” ダイアログ・ボックスで、“Local Area Connection” を選択します。
“Local Area Connection Status” ダイアログ・ボックスが表示されます。

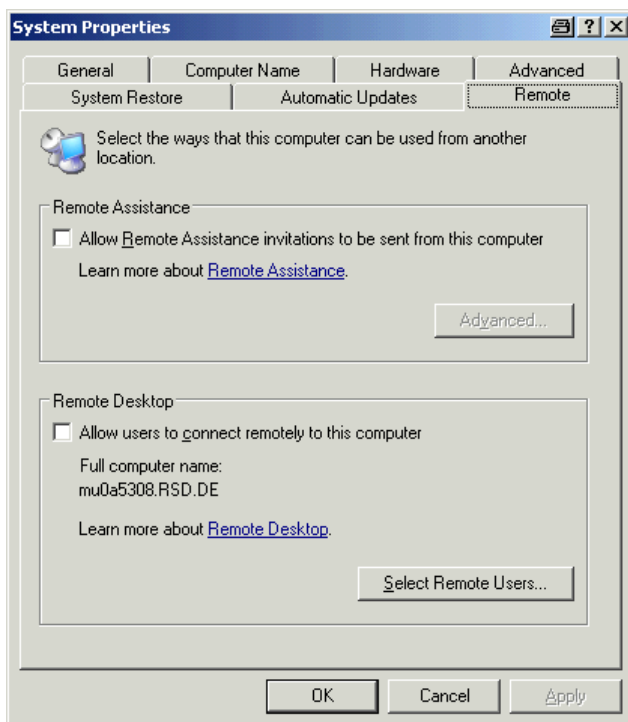


3. “Support” タブを開きます。
現在の TCP/IP の設定が表示されています。
4. “Address Type” フィールドに “Assigned by DHCP” が表示されている場合は、次のステップに進みます。そうでなければ、IP アドレスをメモしておき、ステップ 6 に進みます。

5. 3.6.2, “IP アドレスの割り当て”, (ページ 47) に示した方法で、TCP/IP プロトコル用の固定 IP アドレスを作成します。

メモ： 問題の発生を避けるために、固定 IP アドレスを使用します。DHCP サーバを使用している場合は、本機を再起動するたびに、新しい IP アドレスが割り当てられます。IP アドレスが変更されるたびに、本機がアドレスを認識しなおす必要があります。このため DHCP サーバは本機のリモート操作には適していません。

6. “Start” メニューから、“Settings”、“Control Panel”、“System” の順に選択します。



7. “Remote” タブを選択します。
8. “Remote Desktop” の “Allow users to connect remotely to this computer” オプションを有効にします。
9. ユーザに対してリモート・デスクトップ経由で本機にアクセスすることも許可する場合は、“Select Remote Users” をクリックし、本機で作成したユーザを選択します。

メモ： この設定したユーザ・アカウントは、自動的にリモート・デスクトップにも適用されます。

10. “OK” をクリックして設定内容を確定します。

以上により、本機の接続セットアップがコントローラのリモート・デスクトップ・プログラムで可能になります。

8.2.2.2 コントローラの設定

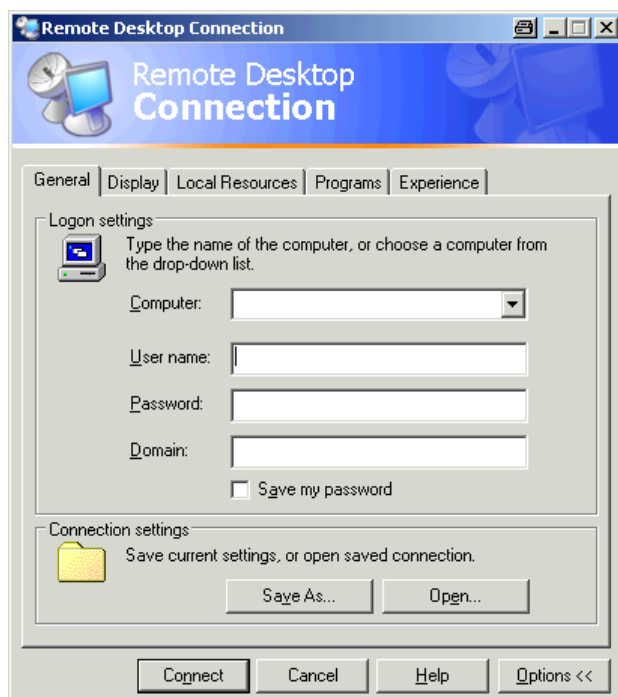


リモート・デスクトップ・クライアント

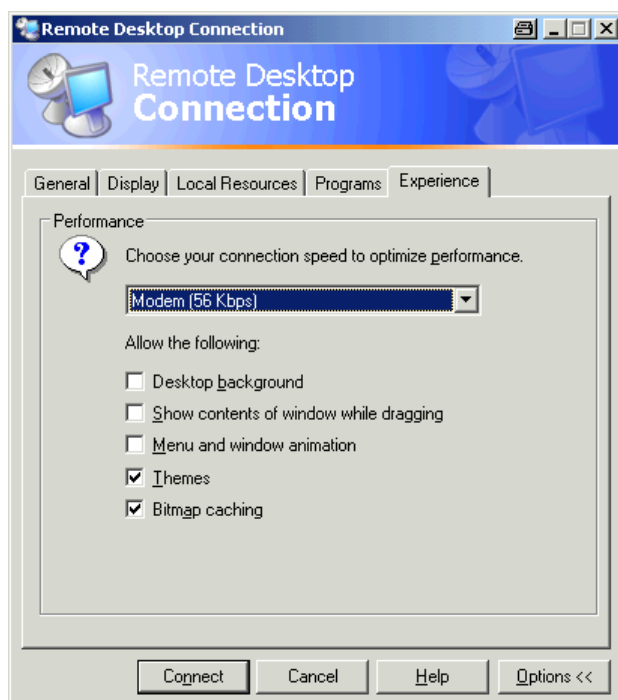
Windows XP では、リモート・デスクトップはオペレーティング・システムの標準機能です。“Start > Programs > Accessories > Communications > Remote Desktop Connection” からアクセスできます。

その他のバージョンの Windows では、リモート・デスクトップ・クライアントはアド・オンとして Microsoft 社から提供されます。

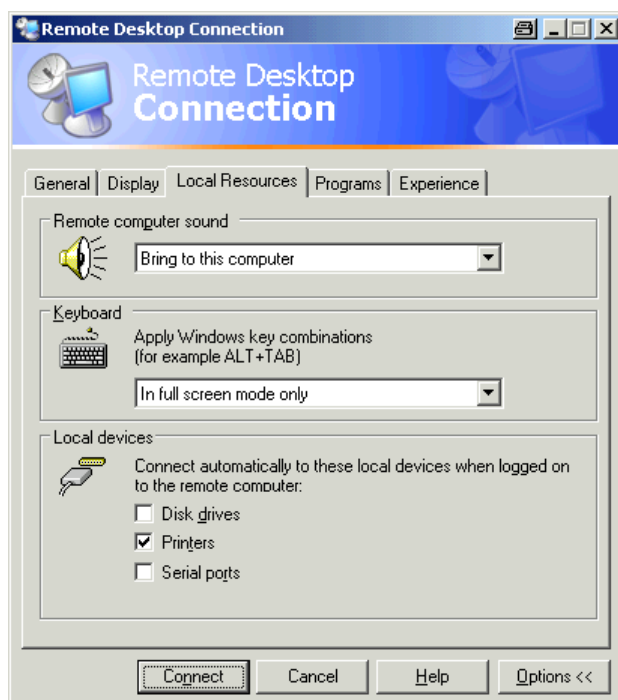
1. “Start” メニューから、“Programs > Accessories > Communications > Remote Desktop Connection” の順に選択します。
“Remote Desktop Connection” ダイアログ・ボックスが表示されます。
2. “Options >>” ボタンをクリックします。
ダイアログ・ボックスが拡張され、設定データが表示されます。



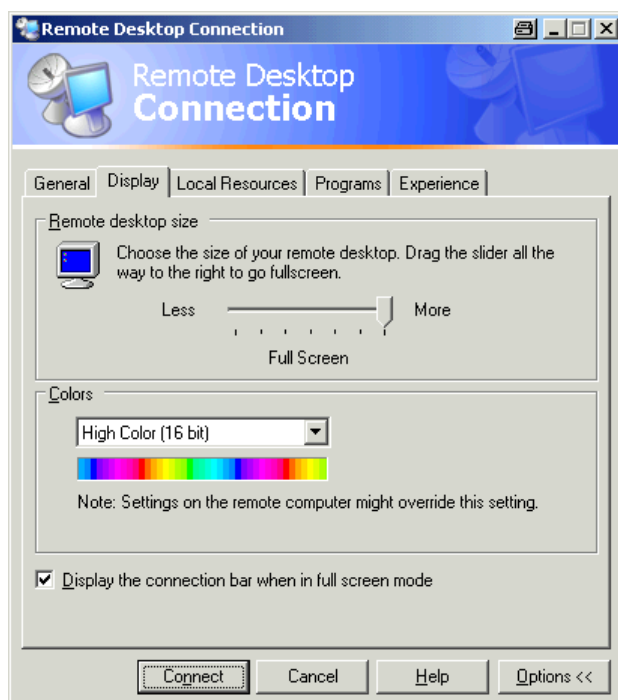
3. “Experience” タブを開きます。
このタブの設定内容は、接続速度の選択と最適化を行うために使用されます。



4. リストから適切な接続速度を選択します（「LAN (10 Mbps or higher)」）。ここで選択した速度（および接続の性能）によって、オプションの一部が有効または無効になります。
5. 性能を向上させるために、“Desktop background”、“Show contents of window while dragging”、“Menu and window animation”の各オプションを無効にしても構いません。
6. プリンタやローカル・ドライブ、シリアル・インタフェースなどを有効にするために、“Local Resources” タブを開きます。



7. コントローラから本機に、設定情報やファイルのをセーブ／コピーを行う目的で、本機からコントローラのドライブへのアクセスが必要な場合は、“Disk drives” オプションを選択します。
Windows XP は、コントローラのドライブを対応するネットワーク・ドライブに割り当てします。
8. 本機からコントローラに接続されているプリンタにアクセスして使用する場合は、“Printers” オプションを選択します。その他の設定は変更しないでください。
9. “Display” タブを開きます。
本機の画面表示を設定するためのオプションが表示されます。

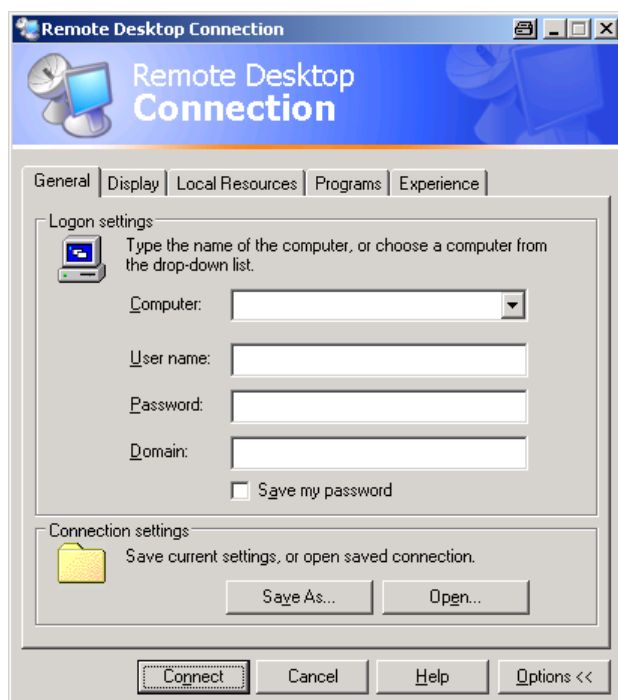


10. “Remote desktop size” で、コントローラのデスクトップに表示される本機のウィンドウ・サイズを設定できます。
11. “Colors” の設定は変更しないでください。
12. “Display the connection bar when in full screen mode” と表示されている接続バー・オプションを選択します。
13. この接続バー・オプションが有効化すれば、本機のネットワーク・アドレスを示すバーが画面の最上部に表示されます。このバーで、ウィンドウの縮小、最小化、クローズが可能になります。
14. 接続バー・オプションが無効の場合には、本機の全画面表示からコントローラのデスクトップに戻るには、“Start” から “Disconnect” を選択する以外に方法はありません。

8.2.3 リモート操作の開始と終了

本機への接続の設定


1. “Remote Desktop Connection” ダイアログ・ボックスで (8.2.2, “XP リモート・デスクトップ を使用したリモート操作 ”, (ページ 182) および 8.2.2.2 “コントローラの設定” P.177 を参照)、“General” タブを開きます。



2. “Computer” フィールドに、本機の IP アドレスを入力します。
“Password” フィールドに 894129 と入力します。
3. これらの接続設定値をセーブする場合は、次の操作をします。
 - a) “Save As” ボタンをクリックします。
“Save As” ダイアログ・ボックスが表示されます。
 - b) 接続情報 (*.RDP) の名前を入力します。
4. 既存の接続設定値をリコールする場合は、次の操作をします。
 - a) “Open” ボタンをクリックします。
“Open” ダイアログ・ボックスが表示されます。
 - b) *.RDP ファイルを選択します。
5. “Connect” ボタンをクリックします。
これで接続が設定されました。
6. “Local Resources” タブで “Disk drives” オプションが選択されている場合は、本機からドライブへのアクセスが有効であるとの警告が表示されます。

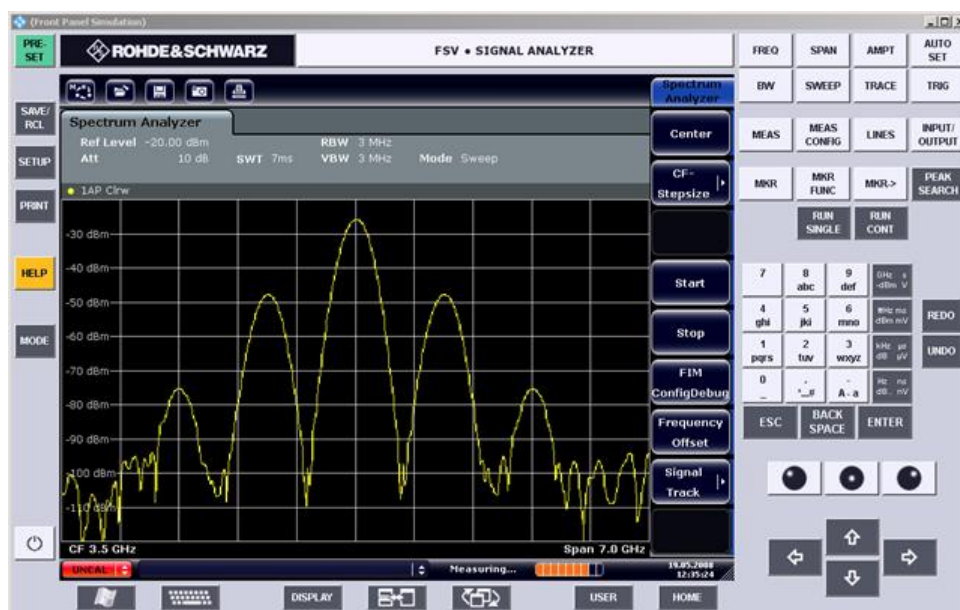


7. “OK” をクリックして警告を承諾します。
本機の画面が表示されます。接続設定の直後に本機のアプリケーションが画面に表示された場合は、シャットダウンや再起動の必要はありません。
8. 画面が消えた場合、または画面の左上隅の黒い四角形が現れた場合には、変更した画面解像度で表示させるために本機を再起動する必要があります。

 <p>Analyzer</p>	<ul style="list-style-type: none"> ● ALT と F4 のキーを同時に押します。 ● 本機のファームウェアがシャットダウンされます。数秒かかります。 ● デスクトップ上で、“Analyzer” アイコンをダブル・クリックします。
---	---

これによってファームウェアを再起動し、“Soft Front Panel” が自動的に開きます。フロント・パネル・コントロールの要素とロータリ・ノブがボタンとして表示されます。

9. “Soft Front Panel” は、F6 キーでオン／オフを切り替えることができます。接続が確立すると、“Remote Desktop” アプリケーション・ウィンドウに本機の画面が表示されます。



すべてのキーとソフトキーを、マウスで操作することができます。またロータリ・ノブは、ノブ・ボタンで操作することができます。

Windows XP の “Start” メニューは、“Remote Desktop” ウィンドウをフルサイズに拡張すると現れます。

コントローラと接続している間、本機の画面上にログイン・ウィンドウが表示されています。

リモート・デスクトップ・コントロールの終了

接続の終了は、コントローラと本機のどちらからも行うことができます。

1. コントローラから終了する場合は、“Remote Desktop” ウィンドウを閉じます。本機との接続が終了します（いつでも終了できます）。
2. 本機から終了する場合は、本機にログインします。これによって、コントローラとの接続が終了します。コントローラのディスプレイには、本機の操作の権限が別のユーザに移った事を知らせるメッセージが表示されます。

本機との再接続

上記の方法で本機との接続設定を行なってください。再接続した場合は、本機は、前回の接続終了時の状態を保持しています。

8.2.4 リモート操作により本機の電源をオフにする方法

1. 本機のソフト・フロント・パネルをクリックし、ALT と F4 キーを同時に押してアプリケーションを終了させます。
2. デスクトップをクリックし、ALT と F4 キーを同時に押します。
この操作を行なうと、リモート操作では本機を再起動できなくなるが、このままシャットダウンしてもよいかどうかの確認を促すメッセージが表示されます。
3. “Yes” を押します。
コントローラとの接続が終了し、本機の電源がオフになります。

8.3 RSIB プロトコル

本機は出荷時に RSIB プロトコルを実装しています。このプロトコルにより本機は Visual C++ や Visual Basic で制御できるだけでなく、Word や Excel、National Instruments 社の LabView、LabWindows/CVI、Agilent VEE でも制御が可能となっています。

RSIB プロトコルの詳細については、CD 版のオペレーティング・マニュアルを参照してください。

索引

記号

75Ω (強調ラベル) 66

A

AC 電源ヒューズ 28

AP (トレース情報) 66

AQT (ハードウェア設定) 64

Att (ハードウェア設定) 64

AUX PORT

コネクタ 23

AV (トレース情報) 67

C

CLRWR (トレース情報) 67

CNT (マーカ機能) 67

D

DBW (ハードウェア設定) 65

DHCP 47

E

Ext 69

EXREF (ステータス表示) 69

EXT TRIGGER

コネクタ 21

F

Frq (強調ラベル) 66

FXD (マーカ機能) 67

G

GAT (ハードウェア設定) 65

GATE IN

コネクタ 21

GPIB インタフェース

コネクタ 22

設定 54

I

IFOVL (ステータス表示) 69

IF/VIDEO

コネクタ 22

IP アドレス

変更 47

リモート・デスクトップ 57

L

LAN

コネクタ 21

設定 45

LAN インタフェース 166

LOUNL (ステータス表示) 69

LXI

LAN の設定 53

Ping 54

設定 48

ブラウザ・インタフェース 51

M

MAXH (トレース情報) 67

MI (トレース情報) 67

MINH (トレース情報) 67

More

ソフトキー 77

MOD (マーカ機能) 67

MONITOR (VGA)

コネクタ 21

N

NCor (強調ラベル) 66

NOI (マーカ機能) 67

O

OCXO

コネクタ 22

OVEN (ステータス表示) 69

OVLN (ステータス表示) 69

P

Pa (強調ラベル) 65

PHN (マーカ機能) 67

Ping 54

PK (トレース情報) 66

Plug&Play プリンタ 163

Q

QP (トレース情報) 67

R

RBW (ハードウェア設定) 64

Ref (ハードウェア設定) 64

REF IN

コネクタ	21	う	
REF OUT		ウイルス対策	44
コネクタ	21	え	
RM (トレース情報)	67	英数字パラメータ	81
S		お	
SA (トレース情報)	67	オフセット (ハードウェア設定)	64
Sgl (ハードウェア設定)	65	オプション	60
SWT (ハードウェア設定)	64	起動	60
T		ライセンス	60
Tdf (ハードウェア設定)	66	オペレーティング・システム	43
TOI (マーカ機能)	67	サービス・パック	44
Trg (ハードウェア設定)	65	ログイン	45
TRIGGER OUTPUT		か	
コネクタ	22	管理者権限	59
TRK (マーカ機能)	67	外部ミキサ	
U		コネクタ	18
UNCAL (ステータス表示)	69	き	
Up		基準	
ソフトキー	77	外部	34
USB		内部	34
コネクタ	23	強調ラベル	65
V		切替え	
VBW (ハードウェア設定)	64	スパン値	74
W		キー	
Windows XP	43	HOME	77
アクセス	45	REDO	76
サービス・パック	44	UNDO	76
あ		上矢印	76
アイコン		英数字	74
ツールバー	71	下矢印	76
アップデート	59	小数点	74
アップデート頻度		左矢印	76
表示	94	右矢印	76
い		こ	
色		コネクタ	
スクリーン	36	AC 電源	20
インストール		AF 出力	17
ネットワーク・プリンタ	177	AUX PORT	23
ローカル・プリンタ	163	EXT TRIGGER / GATE IN	21
インタフェース		GPIO インタフェース	22
LAN	166	IF/VIDEO	22
		LAN	21
		MONITOR (VGA)	21
		OCXO	22

REF IN	21	測定例	
REF OUT	21	AM 変調	121
RF 入力 50Ω	16	AM 変調された信号の AF	122
TRIGGER OUTPUT	22	FM 変調された信号の AF	131
USB	16, 23	S/N 比	128
外部ミキサ	18	周波数カウンタを使用した信号周波数	112
ノイズ・ソースの制御	16	信号の分離	117
パワー・センサ	18	第 1 次高調波と第 2 次高調波	113
フロント・パネル	15	バースト信号の電力	124
プローブ・パワー	17	レベルと周波数	109
コンピュータ名		ソフトキー	77
変更	48	More	77
互換モード (ハードウェア設定)	64	Up	77
さ		ファームウェアのアップデート	59
サービス・パック	44	ソフト・フロント・パネル	87
し		ミニ	87
周波数		た	
基準	34	多重信号の測定	117
時間		タッチ・スクリーン	
設定	35	整合	36
自動ロード		表示	14
設定	137	ダイアグラム・エリア	
す		強調ラベル	65
数値パラメータ	80	ステータス表示	68
スクリーン		トレース情報	66
色	36	ハードウェアの設定	64
スタンドアロン装置	170	ダイアログ・ボックス	
ステータス表示	68	操作	79
せ		ち	
正弦波信号の測定	108	チャンネル	63
高調波	113	っ	
整合		ツールバー	
タッチ・スクリーン	36	アイコン	71
設定		切替え	71
自動ロード	137	て	
セーブ	135	電源	
ロード	136	コネクタ	20
ゼロ・スパンでの測定	124	テーマ	
セーブ		表示	93
測定データ	136	と	
本機の設定	135	トレース	
そ		セーブ	136
測定データ		ロード	136
セーブ	136		
ロード	136		

- トレース情報 66
 - 検波器の種類 66
 - トレース番号 66
- に
- 入力
 - 完了 74
 - 取消し 74
- 入力の完了 74
- 入力の取消し 74
- ね
- ネットワーク 167
 - 自動ログイン 175
 - 設定の変更 169
 - ディレクトリの共有 181
 - ドライブの接続 175
 - ドライブの切断 175
 - プリンタ 177
 - ユーザの作成 170
 - ユーザ・パスワードの変更 173
- の
- ノイズ・ソースの制御
 - コネクタ 16
- は
- パスワード
 - リモート・デスクトップ 57
- パラメータ
 - 入力 80, 81
- ハードウェアの設定
 - 表示 64
- ひ
- 日付
 - 設定 35
- ヒューズ 28
- 表示
 - アップデート頻度 94
 - 拡大 90
 - 表 86
 - 分割スクリーン 86
- ふ
- ファームウェア
 - アップデート 59
 - オプション 60
- プリンタ
 - Plug&Play 163
- 選択 40
- ネットワーク・プリンタのインストール 177
 - ローカル 163
 - ローカル・プリンタのインストール 163
- プロトコル
 - RSIB 192
- プローブ・パワー
 - コネクタ 17
- へ
- 編集ダイアログ・ボックス 79
- 変調モード（ハードウェア設定） 64
- ほ
- 保守 29
- も
- モード（ハードウェア設定） 64
- や
- 矢印キー 76
- ゆ
- ユーザ ID
 - リモート・デスクトップ 57
- ユーザ・アカウント 59
- ら
- ラックに取り付ける場合 27
- り
- リモート
 - DISPlay:THEMe:SElect 94
- リモート制御
 - RSIB プロトコル 192
 - グローバル変数 142
 - コマンドの送信 144
 - コマンドの同期化 146
 - 初期化 142
 - スクリーン表示のオン／オフ切換え 143
 - 性能の向上 94
 - セッションの終了 188
 - 接続の設定 188
 - ディスプレイのパワー・セーブ 144
 - の設定 182
 - 本機の設定情報 145

本機の停止	192
マーカの使用	145
ライブラリ	139
リモート制御のプログラミングの例	
設定情報のセーブ/リコール	157
デフォルト設定の変更	148
トレース・データの読出し	155
プリントアウト	159
マーカとデルタ・マーカの使用	150
リモート操作	55
リモート・デスクトップ	55
ろ	
ログイン	
オペレーティング・システム	45
ローカル・プリンタ	163
ロータリ・ノブ	75
ロード	
測定データ	136
本機の設定	136
キ	
キー	
BACK	74
ENTER	74
ESC/CANCEL	74
GHz/dBm	74
Hz/-dB	74
kHz/dB	74
単位	74
符号	74
ミ	
ミニ・ソフト・フロント・パネル	87